

2E A-83

鳥取縣産業案内



貴族院  
函  
号  
冊

DC113

2



776132

本書は山陰東線鐵道の開通に際し鳥取縣産業の一斑を湖江に紹介せんが爲に編纂せるものなり只上梓急を要したるに依り材料の蒐集に缺くるものもあり、繁簡の取舍に宜しきを得ざるものもあるべし。是れ畢竟推敲の餘日を許さざりしが爲めなり讀者之れを諒せよ。

明治四十五年五月

鳥取縣内務部



水産業	六〇
概況	養殖業 遠洋漁業 漁業取締 水産試験事業
蠶絲業	六九
桑園 養蠶 製絲 真綿 原蠶種製造事業 蠶病豫防 風穴及蠶種雪圍貯藏所	
林業及林産物	七六
一般森林狀態 主要木材 薪炭 工藝原料 縣有模範林 重要副産物	
畜産業	八〇
牛 馬 鶏 山羊 豚 牛乳及屠畜 種畜場	
鑛産業	九七
鐵 合資會社米子製鋼所	
工業	九八
製紙 紙製品 絹織物 木槿織 白木綿 縹木綿 縞木綿及織色木綿 漆器 陶器 海柳	
及海松細工 建具及指物類 彫刻 傘、提燈及團扇 菅笠 疊表及蓆産 稻扱 經木真田	
下履及下駄 鑄鐵品及金物 藥細工品 蠟燭 素麵及饅飩 蒲鉾 玩具 刻錫 莫大小	
パテレンリース 煉瓦及土管類 油類 酒 醬油	
工場	一二一
鳥取縣物産陳列場	一二六
金融機關	一二七
株式會社鳥取農工銀行 株式會社中國貯蓄銀行 倉吉融通株式會社 株式會社通商銀行	
株式會社米子銀行 株式會社獎惠銀行 合資會社若櫻銀行 合資會社鳥取銀行 浦富融通	
合資會社 第三銀行支店 第百銀行支店 松江銀行支店 共立商工銀行支店 平福銀行支店	
市場	一二八
鳥取魚鳥市場 鳥取蔬菜市場 米子魚菜果實市場 倉吉魚菜果實市場 家畜市場	
輸出入の狀況	一三三
輸出 輸入	
實業教育	一三八
鳥取縣立農學校 鳥取縣立商業學校 乙種農業學校 岩美郡立浦富水産學校 氣高郡立	
工業徒弟學校	

實業團體 ..... 一四二

農會、蠶絲同業組合 漁業組合及水產組合 產業組合 酒造組合 木材同業組合 產牛  
馬組合因幡紙同業組合

附錄

城址 ..... 一五四

鳥取城址 鹿野城址 倉吉城址 米子城址

社寺 ..... 一五二

樗溪神社 興禪寺 玄忠寺 宇倍神社 摩尼寺 白兔神社 長谷寺 三佛寺 名和神社  
大神山神社 大山寺 安養寺

溫泉 ..... 一五四

吉方溫泉 岩井溫泉 吉岡溫泉 濱村溫泉及勝見溫泉 關金溫泉 東湖溫泉 三朝溫泉

清遊地 ..... 一五五

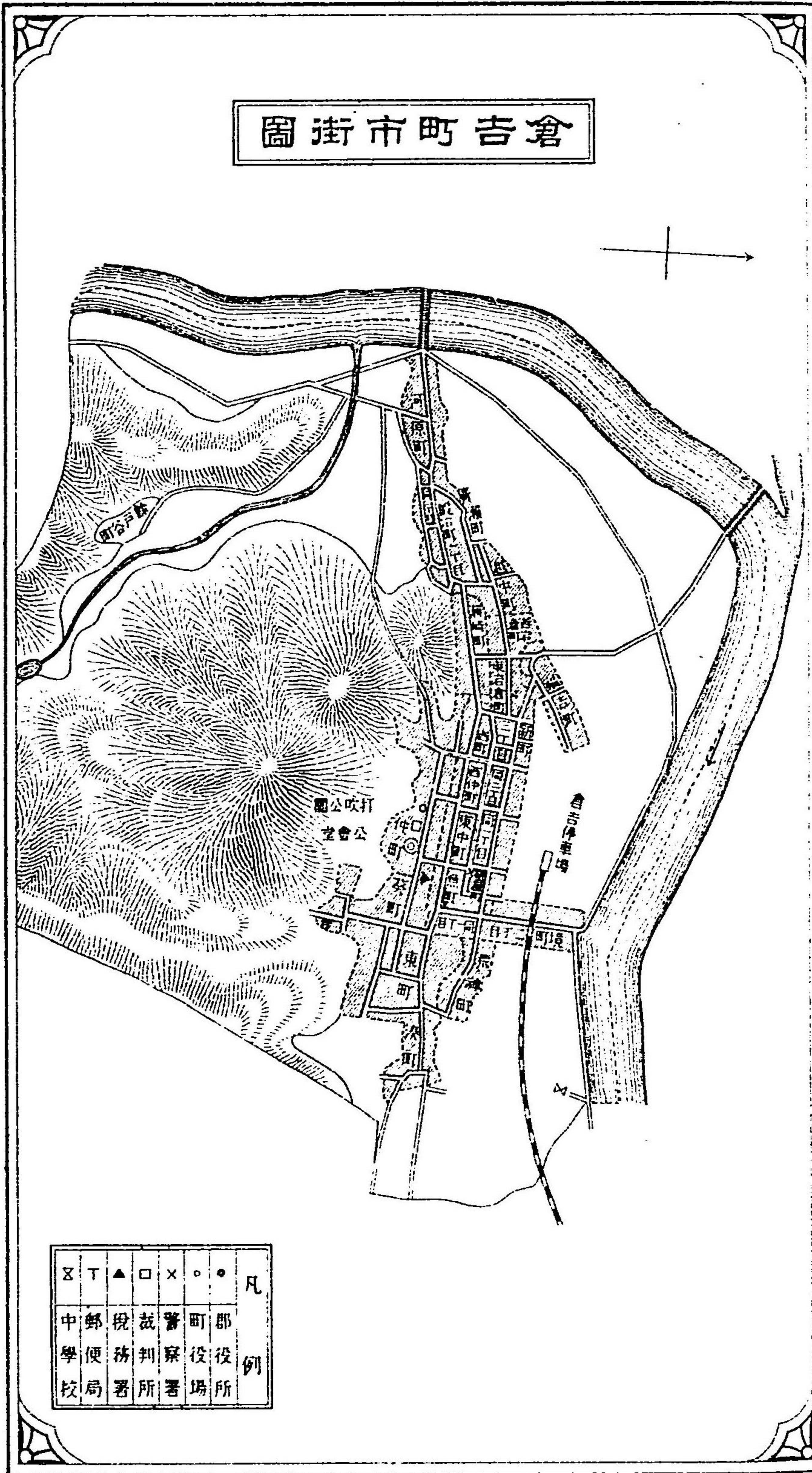
浦富海岸 網代海岸 湖山池 東郷池 打吹公園 夜見半島 錦海 錦公園



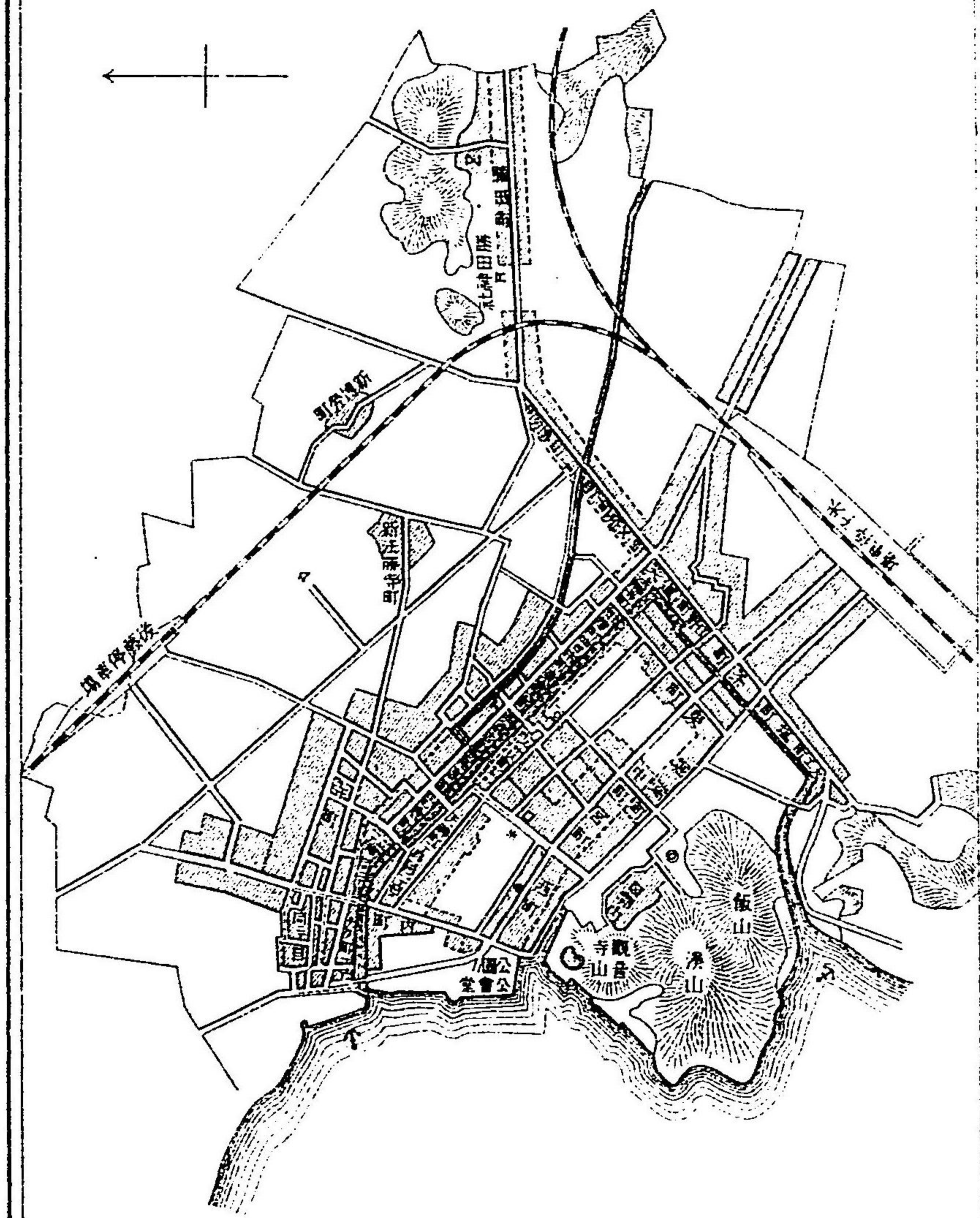




倉吉町市街圖

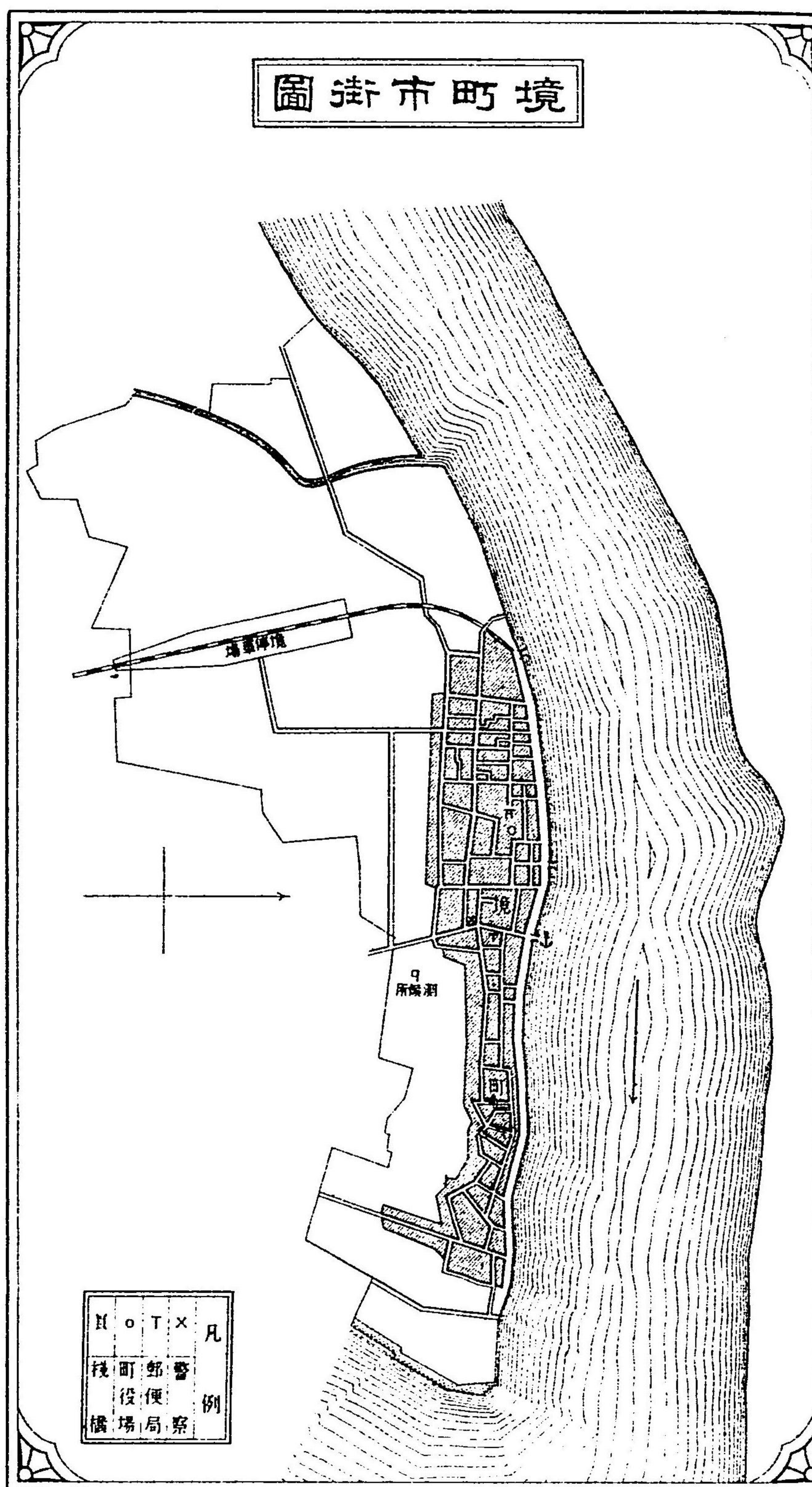


米子町市街圖



●	○	△	▽	×	□	○	●	凡
病	監	女	中	郵	稅	裁	警	町
院	獄	學	學	便	務	判	察	役
校	校	校	校	局	署	署	署	所

圖街市町境

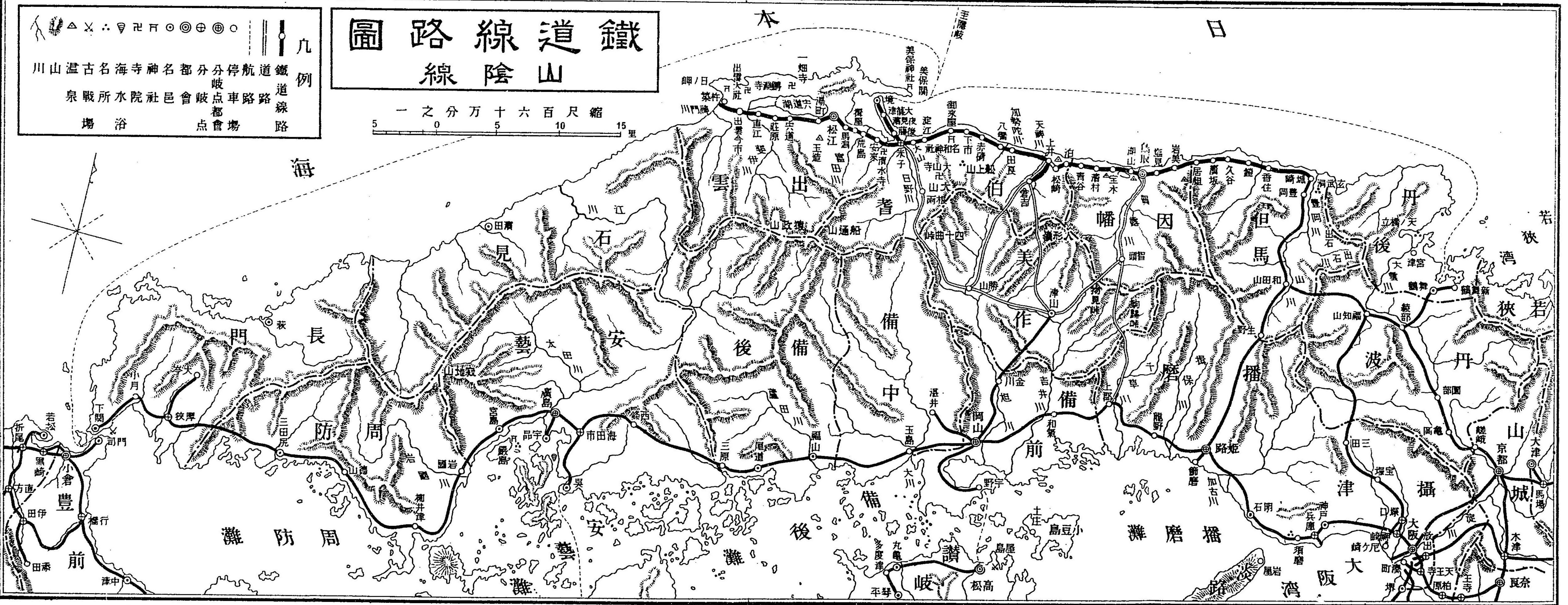


# 鐵道線路圖 山陰線

縮尺六萬分之一

凡例

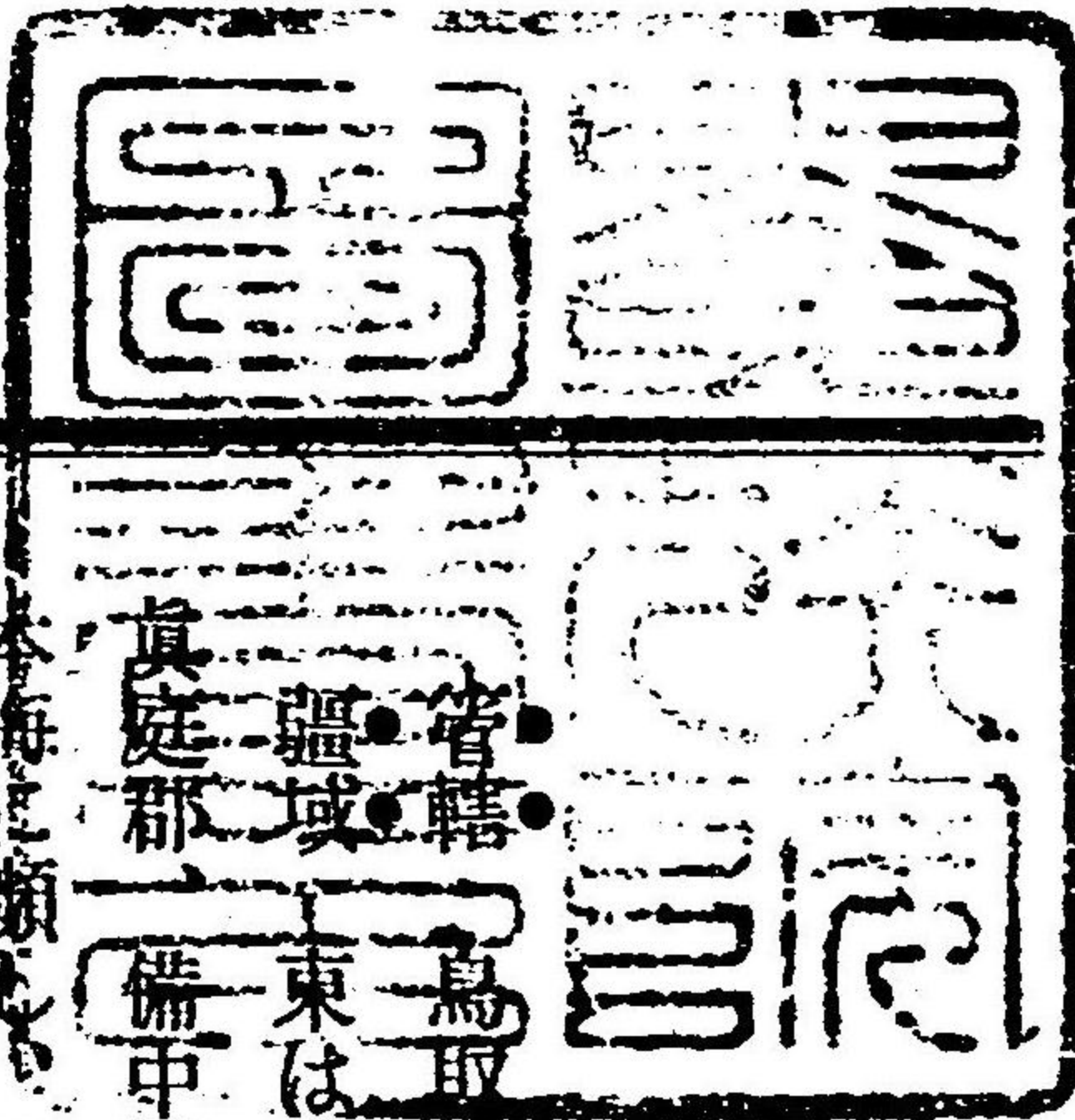
- 鐵道線路
- 航空停分
- 都分
- 名都
- 寺名
- 海名
- 古名
- 山名
- 川名
- 路車
- 岐点
- 會都
- 邑都
- 社都
- 院都
- 所都
- 戰都
- 泉都
- 浴都
- 場都
- 點都
- 會都
- 場都





廳縣取島

# 鳥取縣產業案内



## 總論

管轄 鳥取縣は、山陰道の中央に在り、因幡、伯耆兩國を管轄す。

疆域 東は、但馬國美方郡及播磨國宍粟郡に境し、南は、播磨國宍粟郡、美作國英田郡、苫田郡、  
真庭郡、備中國阿哲郡及備後國奴可郡に接し、西は、出雲國仁多郡及能義郡に隣り、北部全面は、日  
本海に瀕し、西北部の一端、長く海中に斗出して、半島をなし、一葦帶水を隔て、島根縣島根半島  
と相對す。

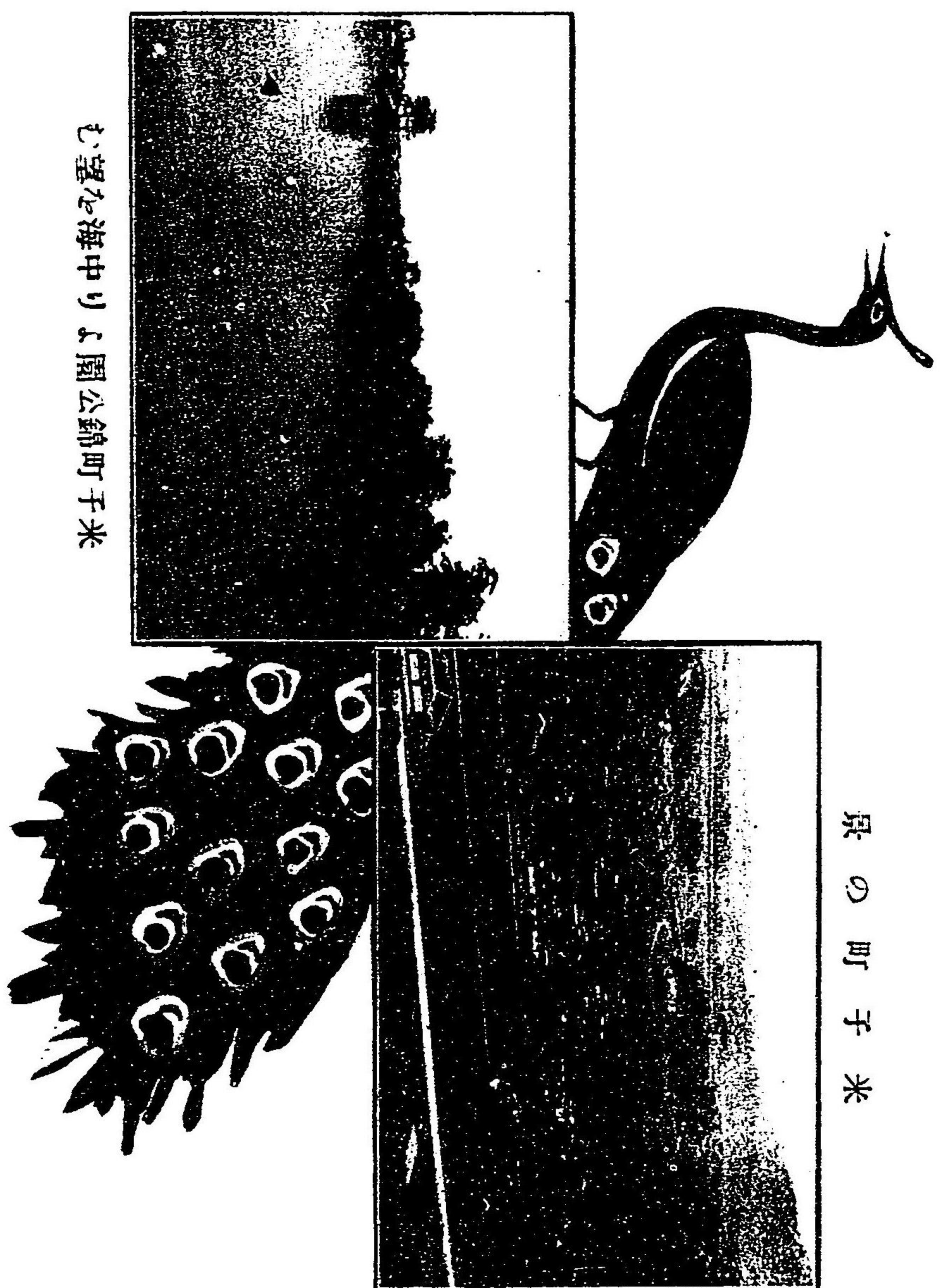
位置 東經百三十四度二十六分乃至十四分北緯三十五度三十六分乃至三十分に位し、極東は、八頭  
郡池田村、極西は、日野郡多里村、極南は、日野郡福榮村、極北は、岩美郡東村に在り。

面積廣袤 面積は、三百九十八方里八四にして、東西三十二里二丁、南北十五里二十七丁あり。之  
を郡市別とせば、左の如し。

鳥取縣產業案内

鳥取市	面積 零方里八八 廣 三十丁 表 一里三丁	岩美郡	面積 三十五方里三〇 廣 五里二十九丁 表 五里二十三丁
八頭郡	面積 百四方里七八 廣 十一里三十四丁 表 七里三十五丁	氣高郡	面積 三十四方里二五 廣 六里十三丁 表 四里二十二丁
東伯郡	面積 九十二方里七九 廣 十一里四丁 表 七里三十四丁	西伯郡	面積 四十八方里七四 廣 八里二十四丁 表 八里三十二丁
日野郡	面積 八十二方里一〇 廣 十里二十三丁 表 六里十八丁		

縣内の總段別は、二十四萬三千六百七十八町三段歩にして、各種地目の面積は、左の如し。



望を海中り、園公錦町千米

望の町千米

官有.....七段步	
田	民有
有租地	面積 三萬四千二百八十九町八段步
免租地及無租地	地價 千二百一萬二千八百八十四圓
面積計.....	六百二十七町步
官有.....	三萬四千九百十七町五段步
官有.....	一町八段步
畑	民有
有租地	面積 一萬四千五百二十九町八段步
免租地及無租地	地價 百六十九萬六千七百三十圓
面積計.....	百二十一町三段步
官有.....	一萬四千六百五十二町九段步
官有.....	三段步
宅地	民有
有租地	面積 三千七十一町九段步
免租地及無租地	地價 百三十萬八百八十四圓
面積計.....	三町八段步
官有.....	三千七十六町步

總論



鳥取縣產業案内

官有……………三萬二千二百六十五町五段步

山林 有租地 面積 七萬三千五百三十八町六段步

民有 地價 十三萬三千九百四十圓

免租地及無租地 四千八百八十町四段步

面積計……………十萬九千六百八十四町五段步

官有……………二十七町步

原野 有租地 面積 六萬三千七百三十八町五段步

民有 地價 四萬二千六百十二圓

免租地及無租地 千六百六十八町步

面積計……………六萬四千九百三十三町五段步

官有……………二百八十九町四段步

社寺 免租地及無租地……………二百九十五町二段步

面積計……………五百八十四町六段步

官有……………四千二十町步

牧場 免租地及無租地……………二町二段步

面積計……………四千二十二町二段步

官有……………一千八百八十六町五段步

道路堤塘 免租地及無租地……………二十三町五段步

面積計……………二千九百十町步

鐵道用地 官有……………二百九十九町八段步

官有……………四千六百三十一町六段步

河川溝渠 免租地及無租地……………百七町二段步

面積計……………四千七百三十八町八段步

官有……………千六百十六町五段步

池沼湖 有租地 面積 十八町五段步

民有 地價 二百五十四圓

免租地及無租地 百四十七町五段步

面積計……………千七百八十二町五段步

總 論

官有	面積	千六百十三町五段歩
其他	有租地	面積 三百六十町一段歩
	地價	七千七百五十九圓
	免租地及無租地	百二町二段歩
面積計		二千七十六町歩
官有	面積	四萬六千六百五十二町八段歩
計	有租地	面積 十八萬九千五百四十七町二段歩
	地價	千五百十九萬四千三百六十三圓
	免租地及無租地	七千四百七十八町三段歩
面積總計		二十四萬三千六百七十八町三段歩

地勢 東西に長く、南北に狭く、南方一帶は、陰陽兩道を分隔する中國山脈を以て限られ、東方も亦、峻嶺を以て、但馬と境し、峯巒重疊、南に高く、北に低し。從て河川は、總て南に發し、北に流れて、日本海に注ぐ。西南部は、深く三備州及出雲の間に突出し、西部は山岳を以て出雲に接し、西北端は、一大沖積層より成れる夜見半島を以て、中海と日本海とを遮斷す。而して其北端に境水道ありて、兩海を聯絡せり。日本海及中海に面せる沿岸線四十四里十丁、崎岬の突出、若くは、數里に亘

る砂丘を以て、水陸を境界す。

山岳 因伯兩州は、中國山梁の背面に在るを以て、高山峻峯頗る多く、就中、大山は、山陰山陽兩道に於ける、最高峯にして、海拔五千六百五十三尺、其山勢、富岳に酷似せるを以て、伯耆富士、又は出雲富士の稱あり。其他、蛭山、大倉山、船通山、菅の山、扇の山、氷の山等は、兩州に於ける高峯なり。孰れも火山岩より構成せらるゝと雖も、總て死火山に屬す。重なる山岳の名稱、其高さ及所在地、並に造成岩石は、左の如し。

山岳名稱	海面ヨリノ高さ	地質	所	在
久松山	八百七十一尺	石英粗面岩及花崗石	鳥取市、岩美郡中ノ郷村	
摩尼山	千二十九尺	岩	岩美郡中ノ郷村、同郡服部村、同郡元鹽見村	
扇ノ山	四千三百二十二尺	岩	岩美郡上舟村、八頭郡赤松村、但馬國美方郡	
三國ヶ山	四千三百三十二尺	岩	八頭郡明治村、同郡上佐治村、東伯郡神中村、美作國菅田郡	
陳鉢山	四千三尺	岩	八頭郡赤松村、同郡菅野村、但馬國美方郡	
菅ノ山	五千四百七十五尺	岩	八頭郡菅野村、同郡池田村、但馬國美方郡	
大通山	三千五百四尺	岩	八頭郡池田村、播磨國美粟郡	
池田山	四千四百八十一尺	岩	同上	
沖ノ山	四千三百五十二尺	岩	八頭郡虫井村、同郡池田村、美作國英田郡	

總論

七

籠ノ山	二千九百八十八尺	古	生	層	八頭郡富澤村、同郡社村
那岐ノ山	四千九十三尺	安	山	岩	同郡那岐村、美作國勝田郡、美作國吉田郡
頭巾山	千七百三尺	花	崗	岩	同郡用瀬村、同郡大村
毛無山	千八百八十三尺	安	山	岩	氣高郡吉岡村、同郡鹿野町
鷲峯山	三千三十九尺	安	山	岩	同郡小鷲河村、同郡鹿野町
美徳山	二千九百七十尺	安	山	岩	東伯郡三徳村
下蛭山	三千六百三十二尺	安	山	岩	同郡山守村
中蛭山	三千七百三尺	安	山	岩	同上
上蛭山	三千九百五十九尺	安	山	岩	同上
船上山	二千三十一尺	安	山	岩	同郡以西村
打吹山	六百八十六尺	花	崗	岩	同郡倉吉町
大山	五千六百五十三尺	安	山	岩	同郡古布庄村、同郡上中山村、西伯郡大山村、日野郡吉壽村、同郡金岩村、同郡金澤村、同郡米原村、同郡米澤村
手間山	千六十九尺	石	粗	岩	西伯郡手間村、同郡賀野村、同郡天津村
湊山	二百九十七尺	石	粗	岩	西伯郡米子町
鎌倉山	二千四百十二尺	花	崗	岩	西伯郡上長田村、日野郡黒坂村
權現山	千三百三十三尺	花	崗	岩	西伯郡東長田村
大倉山	三千六百七十尺	花	崗	岩	日野郡石見村、同郡福成村

高麗山 二千五百三十一尺 安山 西伯郡高麗村、同郡宇田川村、同郡大山村  
 船通山 四千尺 花崗岩 日野郡多里村、鳥根縣仁多郡島上村

原野 地質は、概ね火山噴出物より成り、其表面は、腐墟土を形成するもの多し。  
 重なる原野の名稱、面積、地層及其所在は、左の多し。

原野の名稱	廣	袤	面積	土質	所在
廣富野	十丁	十丁	百町歩	火山凝灰	八頭郡赤松村
天神町	六丁	一里二十四間	二百六十二町歩	洪積土	東伯郡小鴨村、上小鴨村、南谷村、北谷村
仙隱野	三十丁	十丁	三百六十町歩	腐墟土	同郡南谷村、上小鴨村、北谷村、山守村
千目野	五丁二十間	二丁三十間	拾四町歩	同	同郡瑞穂村、常盤村
八橋野	十六丁四十間	一里十丁三間	七百五十町歩	同	同郡榮村、伊勢崎村、下郷村、由良村
羽田井野	十一丁	三十二丁	四百三十三町歩	同	同郡上中山村
牧野	二十五丁	二十九丁	八百七十三町歩	同	西伯郡大山村
泉野	十二丁三六間	十丁三十間	百四十六町歩	同	同郡大和村、大高村

河川 因幡國に在りて、主なるものは、千代川、河内川、日置川及蒲生川とす。千代川は、源を八頭郡に發し、岩美、氣高二郡を貫流して、日本海に注ぐ。伯耆國に在りて、主なるものは、天神川、加勢陀川、由良川、佐陀川、日野川とす。天神川は、東伯郡蛭山及人形山に發する二流、倉吉町の東

に於て相會し、日本海に注ぐ。日野川は、日野郡に發し、西伯郡を貫流して、日本海の一部なる美保灣に注ぐ。其本支流の沿岸は、伯州鐵の産地にして、砂鐵の採集盛なり。重なる河川の名稱、水源地名、流末地名、管内經過地名及里程は、左表の如し。

名	千代川	北股	土師川	新見川	佐治川	曳田川	袋川	砂見川	大留川	有坂川	野山川	湖川
水源地名	八頭郡山郷村大字駒歸宿	同郡由井村大字八河谷村	同郡那岐村大字河津原村	同郡富澤村大字波多村	同郡上佐治村大字柿原村	同郡明治村大字北村	岩美郡大茅村大字雨瀧村	岩美郡三戸古村大字越路村	氣高郡福富村大字高路村	同郡明治村大字河内村	同郡湖山村	同郡湖山村
流末地名	氣高郡賀露村	八頭郡大内村大字郷原村	同郡智頭村大字智頭宿	同郡同村大字同宿	同郡用瀬村大字用瀬宿	同郡曳田村大字曳田村	岩美郡中郷村大字濱坂村	氣高郡大和村大字長谷村	岩美郡美保村大字古市村	同郡蒲野村大字菖蒲村	氣高郡海徳村大字古海村	同郡賀露村
管内經過地名	岩美郡、八頭郡	八頭郡	同郡	同郡	同郡	同郡	岩美郡、氣高郡	岩美郡、氣高郡	岩美郡、氣高郡	同郡	同郡	同郡
里程	二、里	二、里	二、里	一、里	五、里	三、里	六、里	二、里	二、里	三、里	〇、里	〇、里

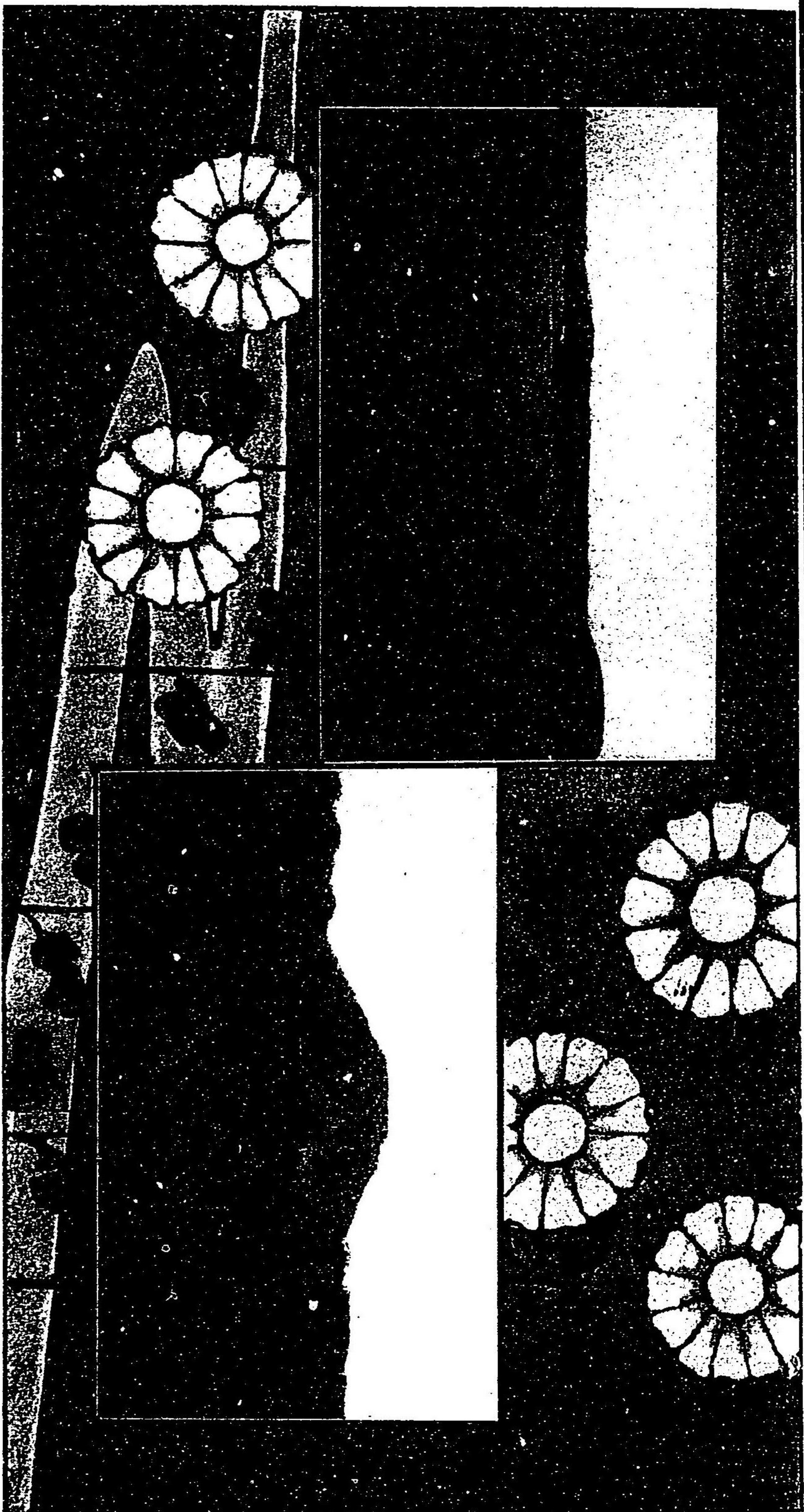
支	日野川	佐野川	阿彌陀川	甲勢川	加勢川	種蛇川	支三小	支三小	天神川	河内川	蒲生川
水源地名	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村
流末地名	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村	同郡那岐村大字河津原村
管内經過地名	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡	同郡
里程	三、里	二、里	二、里	二、里	二、里	二、里	二、里	二、里	二、里	二、里	二、里

石見	川	同郡福成村大字神戸上村	同郡霞村大字生山村	同	二〇〇
小原	川	同郡山上村大字笠木村	同郡同村大字同村	同	三〇〇
部	川	同郡二部村大字福岡村	同郡旭村大字中祖村	同	三〇〇
(派)米	川	西伯郡東尾村大字勸音寺村	西伯郡境町	西伯郡	五〇〇

池沼湖 縣内の主なる池沼湖の構成は、海成沖積層及砂丘の日本海の一部を包鎖して成れる所謂閉鎖に屬す。而して、湖山及東郷の西湖は、淡水魚族に富み、年々捕獲する所多し。主なる池沼湖の名稱、所屬地及大きさは、左の如し。

名稱	所屬地	周圍面積	積廣	表
多給池	岩美郡 中ノ郷村、服部村	三十丁	六十町歩	七丁
湖山池	氣高郡 湖山村、松保村、大郷村、未垣村、木垣村	三三丁	六百七十二町歩	二十二丁
水尻池	同郡 寶木村	十二丁	十六町歩	四丁四十九間
東郷池	東伯郡 舍人村、法崎村、東郷村、花見村、淺津村	二里十丁	六百三十二町歩	三十丁

氣候 東西南の三方は、山脈を以て包み、北方一帶、海に面し、其海上約十里の所、黒潮の暖流、西より東に流る、を以て、四時の氣候、概ね順調なり。空氣の溫度は、全年の平均、華氏五十度を示し、盛夏の候は、平均七十四度、時に蒸熱高きことありと雖も、鬱蒼たる山岳は、屢ば驟雨を送り



望眺の池沼郡高氣

む望を山松久リよ方吉市取鳥

て暑熱を拂ふ、冬季は、平均四十度、疾風六花を飛すの日多きに居るも 一旦雪積むに至れば、寒氣漸く弱く、隨て融雪速かなるを常とす。  
 境測候所に於て觀測せる、明治四十三年二月より同四十四年二月に至る、氣象摘要表を掲ぐれば、左の如し。

冬	春	夏	秋	平均
四十度	五十二度	七十四度	六十一度	五十七度
八	七	八	八	同
十	六	二	五	十一
四百四十二耗八	三百七十四耗一	四百二十耗四	六百十六耗九	計千八百零四耗三
快晴	六	二	十	同
曇	四	四	四	同
天	四	四	四	同
雨	七	三	四	同
雪	五	五	五	同
九	一	八	五	九

明治三十八年より同四十二年に至る五ヶ年間の平均氣象摘要表を掲ぐれば、左の如し。

冬	春	平均
四十一度	五十三度	五十七度
八	七	同
十	八	十一
五百三十六耗七	三百八十五耗五	計千八百零四耗三
快晴	十一	同
曇	六	同
天	六	同
雨	一	同
雪	七	同
十二	四	同

總論

一五

鳥取縣產業案内

夏	七十四度八	十	四	四百九十四耗七	七	四	十五	四十三
秋	六十度八	十	二	五百三十二耗二	五	四	十三	五十一
平均	五十七度八	十	一	四百八十七耗二	六	四	十七	五十三

一四

地質 因伯兩州の地を、構成する地質は、概ね左の如し。  
噴出岩にありては。

- 花崗岩及石英斑岩
- 閃 綠 岩
- 石英粗面岩
- 安山岩及玄武岩
- 火山岩屑
- 水成岩にありては。

- 古 生 層
- 中 生 層
- 第 三 紀 層

- 洪 積 層
- 沖 積 層

變成岩にありては。

- 結 晶 片 岩

岩石の最も大なる面積を占むるものは、花崗岩なり。花崗岩は、陰陽分水界たる、中國山系の骨梁をなし、石英斑岩と共に、全面積の約四分の一を占む。伯州鐵及紫水晶、煙水晶等の水晶類は、即ち此花崗地に産出す。之に亞ぎて、面積の大なる岩石は、石英粗面岩、安山岩、玄武岩、火山岩屑等の火山岩類にして、火山山彙及因伯國境、並に因但國境の高地、約四分の一を占む。古生層を成す岩石の種類は、硅岩、砂岩、凝灰岩及石灰岩を主なるものとし、因伯兩國の南部に在りては、杉、檜及三椏産地の母岩たり。

沖積層は、千代川、天神川、日野川、其他大小河川の沿岸及海濱の砂地を構成す。

鑛泉 因伯の地、鑛泉の湧出するもの亦少なからず、即ち左の如し。

- 鑛泉名 所在 地 泉 質 温 度 (華氏) 摘 要
- 岩井温泉 岩美郡岩井村 鹽 泉 百十七度 岩美驛より一里二十二丁

總 論

鳥取縣產業案内

鳥取溫泉	鳥取市吉方村	鹽類泉	百十度乃至百三十度	鳥取驛より十丁餘
吉岡溫泉	氣高郡吉岡村	鹽類泉及硫黄泉	百十度乃至百三十度	鳥取市より二里半、湖山驛より二里一丁
濱村溫泉	同郡正條村	硫黄泉	百六度乃至百九度	濱村驛に接近し濱村及勝見の二ヶ所に在り
東郷溫泉	東伯郡松崎村	鹽類泉及硫黄泉	百十度乃至百五度	松崎驛に接近せる東郷湖中に在り
淺津溫泉	同郡淺津村	硫黄泉	百十度乃至百六度	松崎驛より東郷湖上十丁餘、舟楫の便あり
關金溫泉	同郡矢送村	鹽類泉及硫黄泉	百十度乃至百六度	上井驛より三里半、倉吉町より二里二十八丁
三朝溫泉	同郡三朝村	鹽類泉及硫黄泉	百十度乃至百五度	上井驛より約三里、倉吉より二里十丁

港灣 日本海に面せる沿岸四十餘里、其間甚だ良港に乏しく、獨り西伯郡夜見半島の北端に在る境港のみ山陰に於ける、唯一の良港として、船舶の碇泊に適す。境水道を過ぎ、中海に入れば、米子港あり、港口深からざるも亦、良港の一たるを失はず。其他日本海に臨める港灣に在りては、岩美郡に網代、浦富あり。氣高郡に賀露、青谷あり。東伯郡に泊、橋津、赤崎あり。西伯郡に御來屋、淀江あり、大船舶を容るゝには不充分なるも貨客の出入亦尠しとせず。

鐵道 山陰線は、伯州の境港を起點とし、米子町に至り、分岐して二線となり、一線は、倉吉を経て因州に入り、鳥取市を過ぎて岩美驛に達し、更に延びて但州に入り、濱阪、城の崎を経て京都、大阪に直通し、又姫路に連絡す。他の一線は、米子より雲州に入り、安來を過ぎ、松江市を経て、出雲

今市に達す。今鳥取驛より境、出雲今市、京都及大阪間に於ける主要驛名及其哩數を掲ぐれば、左の如し。

驛名	哩數	驛名	哩數
京都	百四十四哩二	大阪	百五十九哩八
綾部	九十五哩九	神崎	百五十五哩二
和田山	九十五哩九	福知山	八十八哩二
豊岡	五十一哩	和田山	六十九哩二
城崎	四十五哩	豊岡	五十一哩
鳥取		鳥取	
上井	二十四哩八	上井	二十四哩八
米子	五十七哩六	米子	五十七哩六
松江	七十五哩六	松江	七十五哩六
出雲今市	九十五哩九	境	六十八哩四

産路 縣内に於ける主要道路には、左の諸線あり。

總論



但馬街道(國道)

但馬街道は、鳥取より但馬國和田山及豊岡に至る線路にして、途中、嶮阪頗る多し。

鳥取より和田山迄二十五里十二丁

智頭街道

智頭街道は、鳥取より播州姫路及上郡驛に至る線路にして、途中駒返り峠の嶮阪あり。

鳥取より上郡驛へ二十四里二十二丁

岡山街道

岡山街道は、鳥取より作州津山を経て岡山に達する通路にして、智頭宿津山間には、二線路あり、途中、物見峠又は馬桑峠あり。

物見越線 鳥取より津山迄二十里二十二丁

馬桑越線 鳥取より津山迄十九里十九丁

鳥取米子街道(國道)

鳥取より米子迄二十五里二十七丁

倉吉津山街道

倉吉より津山に達するには、穴鴨、上齊原、奥津等を経るものと、關金、湯本及久世を経るものと  
の二線あり、孰れも途中、嶮阪あり。

穴鴨線 倉吉より津山迄十八里十七丁

關金線 倉吉より津山迄十七里二十九丁

出雲街道

米子町より板井原、勝山、津山を経て岡山市に達する通路なり。勝山、板井原間に四十曲の嶮阪あり。

米子より津山迄二十五里十六丁

廣島街道

米子より多里、川島、庄原、三次、吉田、可部を経て廣島に達する道路なり。多里、川島間に陰陽  
山脈あり。

米子より廣島迄五十一里二十二丁

玉島街道

米子より備中玉島に通ずる道路なり。根雨宿に於て出雲街道と合す。黒阪、上市間に陰陽山脈の嶮

鳥取縣產業案内

あり。

米子より玉島迄四十里二十二丁

松江街道(國道)

米子より中海の沿岸を串通して、松江に達する道路なり。

米子より松江迄八里十八丁

境街道

米子より境港に達する道路なり。

米子より境迄四里十二丁

鳥取市元標(西町に在り)より三府及近縣に達する里程は、左の如し。

東京府へ 百九十九里三十一丁五十三間

京都府へ 六十五里十四丁三十九間

大阪府へ 五十四里二十四丁十四間

兵庫縣へ 四十五里二十一丁三十間



鳥取市元標(西町に在り)より三府及近縣に達する里程は、左の如し。

岡山縣へ 三十三里三十丁

廣島縣へ 七十六里六丁二十二間

島根縣へ 三十五里二十四丁五十四間

●●海路 沿岸線長しと雖も、良港に乏しきが爲め、海運は左の數航路あるのみ。

米子松江間

米子、松江間には、日々午前六時より午後五時迄は、毎時雙方より小蒸汽船の發着あり。航海時間、二時間乃至三時間を要す。

松江美保關間

松江、美保關には、毎日數回の小蒸汽船往復し、途中、伯州境に寄港す。航海時間、四時間なり。

馬關航路

大阪商船會社汽船は、隔日毎に、馬關及門司を發して、仙崎、萩、須佐、濱田、溫泉津及鷺に寄港して、境及米子港に來る。大阪を發してより航海四日を費すも、海運には、頗る便なり。

隱岐航路

伯州境港より、隱岐國西郷港に達する航路にして、航海時間、六時間乃至十時間を要す。境、西郷

鳥取縣產業案内

間、雙方隔日の發着なり。

大家汽船會社の航路

日本海沿岸の諸港と、浦鹽間の航路にして、西廻り線と、東廻り線とあり、共に境に寄港す。  
通信 縣下には、左記郵便局に於て、電信事務を取扱ふ

局名	所在地	局名	所在地
鳥取郵便局	鳥取市本町二丁目	三朝郵便局	東伯郡三朝村大字三朝村
岩井郵便局	岩美郡岩井村大字岩井宿	上小鴨郵便局	同 郡上小鴨村大字中河原村
浦富郵便局	同 郡浦富村	關金郵便局	同 郡矢送村大字關金宿
宮下郵便局	同 郡宇倍野村大字宮下村	由良郵便局	同 郡由良村大字由良宿
中河原郵便局	同 郡登儀村大字中河原村	八橋郵便局	同 郡八橋町大字八橋町
郡家郵便局	八頭郡賀茂村大字郡家村	赤碓郵便局	同 郡赤碓町大字赤碓宿
安井郵便局	同 郡安倍村大字安井宿	御來屋郵便局	西伯郡御來屋町大字御來屋宿
若櫻郵便局	同 郡若櫻町大字若櫻宿	淀江郵便局	同 郡淀江町大字淀江宿
河原郵便局	同 郡河原村大字河原村	尾高郵便局	同 郡大高村大字尾高村
用瀬郵便局	同 郡用瀬村大字用瀬宿	米子郵便局	同 郡米子町大字西倉吉町
智頭郵便局	同 郡智頭村大字智頭宿	法勝寺郵便局	同 郡法勝寺村大字法勝寺宿

等、左の如し。行政區劃 管内を分つて、六郡一市を置き、二百二十一町村に分つ、其郡市役所名、所在地、町名

郡市名	町村數	町	郡市役所所在地
岩美郡	二十七	若櫻町	鳥取市大字東町
八頭郡	三十四	鹿野町	八頭郡加茂村大字郡家
氣高郡	三十三	鹿野町	氣高郡吉岡村大字吉岡

總論

鳥取縣產業案内

東伯郡	五十三	倉吉町、八橋町、赤碕町	東伯郡倉吉町大字仲ノ町
西伯郡	四十六	米子町、御來屋町、淀江町、境町	西伯郡米子町大字廓内
日野郡	二十九		日野郡二部村大字二部
鳥取市			鳥取市大字西町

戸口 明治四十三年に於ける、縣下總戸數は、七萬九千三百三十一戸にして、人口は、本籍四十六萬二千五百六人、現在四十四萬九千九百九十二人なり。而して、實業者別及主なる都市の戸數及現住人口を掲ぐれば、左の如し。

農業者	戸數 五萬五千四百五十七戸	漁業者	戸數 五千九百六戸
人口 三十一萬九千九百四十二人		人口 三萬百五十七人	
商業者	戸數 一萬八千二百八十二戸	工業者	戸數 一萬三千九十九戸
人口 八萬六千二百七十人		人口 九萬百五十四人	
鳥取市	戸數 五千七百十三戸	倉吉町	戸數 二千六十三戸
人口 三萬四千三百二人		人口 八千五百六十八人	



鳥取市の街景

米子町 戸數 四千二百三十三戸  
人口 二萬二百四十六人

境町 戸數 千三百二十七戸  
人口 六千四十九人

執業者の數を掲ぐれば、左の如し。

農業者  
自作 三萬七千二百八十五人  
自作兼小作 六萬八千七百八十七人  
小作 七萬八千八百二十八人  
計 十八萬四千九百人

工業者 二萬千六百十五人

商業者 三萬三千九百六十六人

鹹水漁 九千三百四十九人

漁業者 淡水漁 千八十七人

計 一萬四百三十六人

縣政 因幡は、往古稻羽、又は稻葉、或は以奈八と書し。伯耆は、伯伎、或は伯々岐と書せり、現今用ふる所の因幡、伯耆の文字は、和銅六年の改定に由るもの、如し。上世に於て因伯兩州は須佐之

總論

男命、大國主命等相繼で統治し給ひ、景行天皇の時、大八木足尼石川、波々岐の國造に任せられ、成務天皇の時、彦多都彦命、伊其和斯彦命と稻葉の國造に任せられたり、中世に在ては、國府を因幡には、宮下村岩美郡國府村伯耆には、國府村東伯郡村に置き、國の格は、上國と定められたり、國司の著明なるは、因幡に在りては、大友家持、淡海三船、在原行平、橘行平等にして、伯耆に在りては、山上億良等とす。和氣清磨亦、因幡の國司に任せられしも來任せず、其他國司に任せられしもの多しと雖も、皆任國に入らず、國務は、介以下の者に於て、決行せしに似たり。元弘中、名和長年功を以て、因伯二州の守護に補せらる。足利時代には、山名氏兩州を領せり。後戰國時代及豊臣時代を歴て、慶長五年、徳川家康、關ヶ原戰捷の後に及んで、伯耆一國を中村一忠に與へ、因幡は龜井茲矩、池田長吉兩人の封土となしぬ。元和三年、兩州の地、舉て池田光政に與へらる。後寛永九年光政備前に封を移され、其從弟光仲備前より移されて、二州の太守に封せらる。以後十二代、凡二百三十六年を経て、王政維新の政變あり。藩主池田慶徳藩籍奉還後、鳥取藩を置かれ、明治四年藩を廢して、鳥取縣を置かれ、因伯隱の三州を管す。同九年鳥取縣を舉げて、鳥根縣に合併せられ、同十四年鳥取縣を再置され、因伯二州を管轄して、今に至れり。

縣經濟 鳥取縣の經濟は、明治四十三年度決算額に據れば、歳入總計七十三萬五千三百六十八圓二

十七錢一厘、歳出總計六十九萬七千六百五十三圓四錢にして、其賦課率は、左の如し。

宅地一圓二付 十八錢一毛

地租割 田畑一圓二付 四十二錢九厘一毛

其他一圓二付 三十六錢三厘六毛

戶數割 一戸二付 一圓七十九錢六厘

郡費及市町村費は、左の如し。

郡費 歳入總計 十一萬七千五百二圓六十六錢五厘

歳出總計 八萬六千七百四十八圓五十三錢二厘

市町村費 歳入總計 百三十五萬五百十二圓四十五錢五厘

歳出總計 百二十七萬二百三圓八錢六厘

又明治四十五年度縣費豫算額及賦課率は、左の如し。

歳入

經常部合計 七十五萬三千六百二十五圓

臨時部合計 十七萬五千十一圓

總論

鳥取縣產業案内

總計 九十二萬八千六百三十六圓

歲出

經常部合計 五十八萬七千七百十六圓

臨時部合計 三十四萬九千二百一十圓

總計 九十二萬八千六百三十六圓

賦課率

宅地一圓ニ付 十七錢三厘二毛

地租割 其他一圓ニ付 四十二錢六厘三毛

戶數割 一戸ニ付 二圓四十六錢

郡費は、左の如し。

歲入

經常部合計 十萬七千三百八十七圓

臨時部合計 一萬三千四百二圓

總計 十二萬七千八百八十九圓

歲出

經常部合計 五萬五千六百七十七圓

臨時部合計 六萬五千百十二圓

總計 十二萬七百八十九圓

歩行よき程に風ふく日永かな

海に添ふ國を抱て霞けり

春の夜の旅草臥や道中繪

蕪村

白雄

子規

普通農事

米 藩制當時は、民間に於て、米穀を恣に藩外に輸出することを許さず、藩下樞要の地、十二ヶ所に藩倉を配備し、嚴格なる検査を行ひたる貢米を收納し、藩士の扶持米は、其貢米中、専ら因幡産のものを以て之に充て、不足あるときは、伯耆産米を以て之を補ひ、剩れる伯州産米は、毎年三萬乃至五萬俵、橋津港より兵庫市場に輸出する慣例なりき。而して橋津倉庫に收容する産米は、恰も因伯兩

普通農事



州中、最も優良の米産地に産出せるもの多額を占めたるを以て、自然阪神地方に於て、橋津米たる銘柄を作り、名聲を博するに至れり。然るに維新變革の後、米納の制度廢れ、從て米の調製、乾燥、俵裝及販賣は、全く當業者の自由となり、何等檢束する所無きに至れるを以て、俵米は、漸次其規格を棄し、粗製濫造の弊に陥り、因伯米の聲價、甚しく失墜せり。明治十四年、本縣再置以後、之が挽回の策を講ずると共に、稻作の改良を企圖し、或は、農談會を開き、或は、稻種を配付し、或は、品評會共進會の開催を促す等、獎勵に努むる所ありき。而して橋津米の聲價益々失墜するを見るや、同十七年、元河村、久米、八橋三郡（今日の東伯郡）の當業者相謀り、輸出米改良組合を組織し、此地方より輸出する俵米に對し、一定の検査を行ひ、市場聲價の恢復に努めたる結果、二十一年頃に至りては、此地方の輸出米は、他郡の輸出米に比し、一石平均三十錢の格上を見るに至れり。又明治十九年及二十一年に於ては、福岡縣の老農林遠里を聘し、稻作改良に關する巡回講話を爲さしめ、尙二十一年には、稻作教師を雇ひ來り、縣下各地に稻作改良傳習所を設置し、傳習生の養成及改良作の普及を計り、傍ら稻米改良組合準則を發し、縣下各町村をして、同組合を設けしめ、生産米の検査を行ひ、稻作改良及調製、俵裝の改善を促さしめ、尋て田圃害蟲驅除豫防規則を發布して、害蟲の驅除豫防を督勵する所あり、越えて二十二年、稻種改良の目的を以て、種枳を枌木、千葉、三重及山口の諸縣に

請め、縣下各地に配付し、翌二十三年より二十六年に至る四年間、縣費を以て稻の種類、挿秧及肥料等に關する簡易の試験地並に稻作模範地を縣下各地に設置し、實地改良の考證に資せり。明治三十年因伯米改良組合取締規則を發布し、郡市區域に依り、因伯米改良組合を組織せしめ、調製俵裝の統一的改良を圖り、同時に、因伯米輸出検査規則を發布し、同組合取締所の事業として、縣下二十六ヶ所に輸出米検査所を設置して、輸出米の検査を施行せしめ、又三十年、小作獎勵組合準則を發布し、小作米改良の獎勵を策せり。三十五年、因伯米改良組合取締規則を廢して、更に地廻米取締規則を廢し、又因伯米輸出検査規則を廢して、重要物産同業組合法に依る因伯米輸出同業組合の組織を誘導し、翌三十六年成立を告げ、爾來四十四年まで、九ヶ年間、専ら輸出米の検査を施行し、調製俵裝の改良を圖り。四十年、苗代設置規程を發布し、短冊苗代及五畝歩以上の集合苗代仕立の方法を規定し、稻苗の改善を企劃せり。其他、系統農會に於て施設せる米作に關する講習講話の如き、當業者の智能を啓發して、斯業の改良を促したること頗る多大なるものあり、又近年各郡市農會に於て、施行せる採種田の如き、稻種の品位を上進し、併せて收穫を増加したること尠なからず。

左に明治八年より四十四年に至る米の産額及一石平均價格並に三十七年より四十四年に至る米作付段別及四十二年より四十四年に至る輸出米高を掲記す

鳥取縣產業案內

同同同同同同同同同同同同同同同同  
 年 治 次 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二

產 額  
 三十五萬二千五百三十四石  
 四十四萬八千五百石  
 四十一萬四千四十一石  
 三十一萬八千四百六十石  
 四十五萬八千九百石  
 四十一萬三千二百八十二石  
 三十九萬七千六百七十石  
 三十九萬五千三十石  
 三十六萬八千五百四十四石  
 三十六萬六千五百六十六石  
 三十六萬七千九百三十三石  
 四十四萬四千二十一石  
 五十一萬百七十四石  
 五十二萬五千四百八十一石  
 四十一萬九千二百二石

一石平均價格  
 四圓四十六錢八厘  
 四圓九十一錢九厘  
 三圓四十七錢二厘  
 四圓五十五錢四厘  
 六圓八十四錢二厘  
 八圓十一錢  
 七圓十三錢五厘  
 七圓七十錢  
 四圓四十四錢八厘  
 三圓八十八錢  
 五圓三十七錢二厘  
 四圓二十七錢九厘  
 四圓十錢  
 三圓六十一錢五厘  
 四圓七十一錢五厘

同同同同同同同同同同同同同同同同  
 普通農事 三十八年 三十七年 三十六年 三十五年 三十四年 三十三年 三十二年 三十一年 三十年 二十九年 二十八年 二十七年 二十六年 二十五年 二十四年 二十三年

五十七萬八千七百五十九石  
 四十三萬五千四百十石  
 六十萬一千五百五十石  
 四十一萬六千三百三十三石  
 四十九萬二千八百四十六石  
 四十七萬四千二百二十六石  
 五十一萬四千六百九十四石  
 四十一萬四千三百石  
 六十萬七千九百九十六石  
 五十七萬七千九百五十八石  
 五十三萬六千九百五石  
 五十二萬九千八百六石  
 四十一萬七千三百三十石  
 五十六萬七千三十三石  
 六十三萬七千四十石  
 五十二萬七千三十石

七圓五十六錢二厘  
 六圓五十錢  
 五圓八十錢  
 六圓九十一錢三厘  
 七圓六十一錢  
 七圓六十三錢九厘  
 八圓五十三錢八厘  
 十一圓十二錢五厘  
 十三圓十八錢五厘  
 八圓七十三錢八厘  
 十圓四十二錢九厘  
 十一圓三錢四厘  
 十一圓七十二錢五厘  
 十三圓八厘  
 十二圓二錢三厘  
 十一圓八十五錢二厘

鳥取縣產業案内

三四

同	三十九年	六十一萬三千三百七十八石	十三圓八十五錢五厘
同	四十年	六十二萬一千六百七十二石	十五圓四十八錢七厘
同	四十一年	六十九萬九千七百九十一石	十五圓十六錢七厘
同	四十二年	六十五萬三千二百二十一石	十二圓四十七錢八厘
同	四十三年	六十三萬六千六百二十六石	十二圓五十錢七厘
同	四十四年	六十七萬二千五百十五石	十七圓八十八錢

米の作付段別

明	治	三十七年	三萬三千六百四十七町步
同		三十八年	三萬三千七百二十八町一段步
同		三十九年	三萬三千七百四十一町四段步
同		四十年	三萬三千八百三十五町九段步
同		四十一年	三萬四千三百三十六町三段步
同		四十二年	三萬四千三百三十五町四段步
同		四十三年	三萬四千三百七十六町四段步

同 四十四年 三萬四千四百五十八町九段步

輸出米高

明治四十二年	玄米 三十一萬三千四百三十一俵
	白米 十三萬七千二百七十一俵
明治四十三年	玄米 二十八萬三千五百十四俵
	白米 二十一萬六千六百四俵
明治四十四年	玄米 二十五萬七千九俵半
	白米 二十萬八千九百九十七俵

米穀検査所 別項記載の如く、從來、縣下より輸出する米穀に對しては、因伯米輸出同業組合に於て、輸出検査を施行したるも、明治四十四年十月より、縣は、米穀検査所を設置し、検査員をして、輸出米検査及生産米検査を施行せしむこととなり、其の結果大に米製の改良を催し其の聲價を高むるに至れり。而して其の検査の方法は、輸出米検査に在りては、米穀検査所又は出張所に於て施行し乾燥、調製及包装の検査成績に據り一等より五等に至る五階級及格外米に分ち生産米検査は、検査員に於て、必要と認めたる時、隨時隨所に之を施行し、合格、不合格に分つ。又米券倉庫營業者若しくは、

普通農事

三五

鳥取縣產業案内

小作米を収納する地主にして、入庫米検査を申請する時は、検査員を派遣し、輸出米検査を施すこと。検査所若しくは、其出張所に於て施行する所と異ならず。現今所長一人、検査監督員三人、検査員三十六人、助手若干人あり。検査所は左の所に本所及出張所を設く。

本所	鳥取縣廳内	同	岩美郡元鹽見村
出張所	鳥取市若櫻街道筋	同	同 郡大岩村
同	同 郡浦富村	同	同 郡大岩村
同	同 郡服部村	同	同 氣高郡加露村
同	同 郡湖山村	同	同 郡寶木村
同	同 郡正條村	同	同 郡青谷村
同	同 東伯郡三橋村	同	同 郡松崎村
同	同 郡橋津村	同	同 郡日下村
同	同 郡由良村	同	同 郡八橋町
同	同 郡赤碕町	同	同 西伯郡逢坂村
同	同 郡御來屋町	同	同 郡淀江町

同	同 郡巖村	同	同 郡米子町
同	同 郡大國村	同	同 郡境町
同	同 郡外江村	同	同 郡渡村
同	同 日野郡印賀村大字印賀宿	同	同 郡印賀村大字折渡村

米券倉庫 明治八年、租税は、米納を廢して金納となりたるより、地方經濟界の恐慌甚だしく、就中、農民の困難、一層大なるものありき。蓋し、貢租米納の制度久しく行はれ、從て物品交換の慣習存し、貨幣通用の道、未だ充分行はれざるに當り、金納の新制度布かれたるを以て、俄かに、農産物を以て、貨幣に交換せざる可からざるの必要起れり。然れども當時は、縣外との交通、頗る不便にして、賣買交換の區域、甚だ狹隘なりし爲め、米穀の如き徒らに堆積し、金融益々梗塞し、隨て米價は、非常の下落を爲し、農民の困窮名狀す可からざるに至れり。是に於て元河村郡(今の東伯郡の一部)の豪農及有志の輩、相謀り、橋津村に在る舊藩倉の一部を借用し、共同倉庫となし、抵當貸金の方法を劃策し、明治十年、爲替規則なるものを設けて、僅かに金融疏通の端を開けり。十五年獎惠社なるもの橋津村に起るに及び、其事業を繼承し、初めて米券の發行を爲せり。(獎惠社は、二十七年組織を變して、獎惠合資會社となり、本社を倉吉驛附近に移し、四十五年更に株式會社獎惠銀行に變更し、

傍ら米券倉庫業を繼續營業せり。尋て東伯郡由良村に於て、舊藩倉の拂下を受け、米券倉庫業を営むものあり、又同郡松崎驛構内東郷報徳社に於て同事業を振むるあり。之が爲め是等地方の米質は、大に改善せられ、橋津米の聲價を挽回するに至れり。斯くの如く、本縣に於ては、夙に米券倉庫業の起れるありと雖も、未だ縣下一般に普及せしむるに至らざりき、然るに時勢の進歩は、米券倉庫の必要を促して止まず、四十四年、縣は、普く米券倉庫の設置を企策し、之が獎勵として、倉庫新設者に對し、其建築費の幾分を縣費を以て、補助すること、なし、勸誘の結果、西伯郡に八ヶ所、東伯郡に三ヶ所、氣高郡に六ヶ所、岩美郡及鳥取市に三ヶ所、八頭郡に二ヶ所、或は株式、或は合資、或は合名の組織を以て、米券倉庫建築の決定をなし、目下建築中若しくは建築準備中に在り。

● 麥 栽培の起原は、詳かならずと雖も、古來より普く栽培せるもの、如し。藩制の頃は、別に改良増殖に付き保護獎勵を加へたるものを見ざるも、當時は、農業者の飲料としては、麥を以て主とせる如き有様なりしを以て、隨つて麥作に盡す所多かりし。然るに文化の進むに隨ひ、衣食住の度高まり、麥食を爲すもの漸次減少して、米食に移る傾向あるより、麥作段別の如きも、年と共に遞減するを見る。從來改良の施設としては、或は、外國種の試作を爲さしめ、或は共進會品評會を開き、或は、巡回教師をして、講話講習せしめ、或は、肥料試験を行ふ等、明治十五年以來、企策獎勵する所ありし

も、未だ著しき改良を見ず。最近三ヶ年の作付段別及收穫高は、左の如し

四十二年 作付段別 一萬六千七百六十四町步  
收穫高 十九萬二千三百三十四石

四十三年 作付段別 一萬六千三百六十六町步  
收穫高 十七萬四千三百六十二石

四十四年 作付段別 一萬六千二百六十一町步  
收穫高 二十萬百七十二石

● 甘藷 口碑の傳ふる所に依れば、今より凡そ百餘年前、航海者、之を島根縣石見國より齎し歸りたるものなりと云ふ、各郡とも之を栽培すと雖も、西伯郡濱の目地方、最も産額多し。最近三ヶ年の作付段別及收穫高左の如し。

四十一年 作付段別 一千百五十六町六段步  
收穫高 六百四十一萬八千四百十二貫

四十二年 作付段別 一千百四十四町二段步  
收穫高 六百五十二萬八千七百十二貫

鳥取縣產業案内

四十二年 作付段別 二千二百二十九町三段歩  
 收穫高 六百八十七萬九千六百六十七貫

馬鈴薯 維新以前より栽培す。明治二十四年、洪水の爲め稻田の荒廢に歸せるもの、利用策として、米國種を各郡に配付す爾來普及して盛んに耕作せらるゝに至れり。最近三ヶ年の耕作段別及收穫高は左の如し

四十一年 作付段別 二百八十町七段歩  
 收穫高 六十一萬四千八十一貫

四十二年 作付段別 二百六十四町九段歩  
 收穫高 六十萬二千六百三十六貫

四十三年 作付段別 二百七十三町二段歩  
 收穫高 六十二萬一千九百四十九貫

大豆、小豆、粟、稗及其他 之等の農作物は、多くは山畑及畦畔に栽植す。左に明治四十四年の産額を示す。

大豆	作付段別 千二百七十六町二段歩 收穫高 一萬二千七百五十石	小豆	作付段別 五百四十六町六段歩 收穫高 三千六百八十五石
豌豆	作付段別 三百十七町九段歩 收穫高 二千九百三十石	蠶豆	作付段別 七百六十九町歩 收穫高 七千九百六十石
粟	作付段別 六百九町八段歩 收穫高 五千七百八十八石	稗	作付段別 六十九町歩 收穫高 四百一十一石
黍	作付段別 四十三町九段歩 收穫高 六百九石七斗	蕎麥	作付段別 六百八十四町八段歩 收穫高 五千三百九石
玉蜀黍	作付段別 九十六町八段歩 收穫高 千七百二石		

農事試驗場 縣立農事試驗場は、明治三十五年度の創設にして、從來は、主要作物、特用作物等の應用試驗を施行し、尙場員をして、農事講話、實地示導を爲さしめ、且試驗の成績若しくは、耕作方法等の印刷物を配付し、斯業の改良に資する所ありたるも、明治四十四年度よりは、研究的試驗事業を廢止し、専ら稻原種の栽培及果樹苗の養成を爲し、傍ら酸性土壤の調査を爲すこと、なれり。明治

四十五年度の經營費は、一萬二千三百五圓にして田地五町六段二畝十九步畑地一町六段六畝二十八歩を以て其作業地に充用せり

耕地整理 本縣耕地の狀態は、概ね區劃不整にして、徒に迂曲の細徑を多設し、其他灌排水路の便宜しきを得ず。爲めに挿秧の時期を失し、或は早損病害に侵され、若くは、深泥膝を没し、一毛の作も猶普通の收穫を得る能はざるもの多きを占む。是等耕地の整理は、農事改良上、主要の事業に屬するを以て、明治三十三年に至り、縣費を以て、補助金を交付し、一は岩美郡浦富村に、一は西伯郡日吉津村に、各三十餘町歩の模範的整理を實施せしめたり。是れ營に本縣耕地整理の第一着手たるのみならず、實に本邦耕地整理法以來の嚆矢とす。明治四十年、耕地整理獎勵規程を定め、測量及設計補助の便宜を與へ、四十二年、耕地整理費補助規程を設け、其の事業費に對し、縣費を以て補助金交付の途を開き、一方耕地整理法改正の趣旨に従ひ、單に水田區劃の整理のみならず、苟も耕地改良の事業は、各方面に互りて手を下すに至りたるを以て、僅に數年を出でずして、多數面積の土地を整理するに至れり。乃ち明治三十三年度以來、整理を實行せしもの、其地區五十六ヶ所、面積五千八百參拾町餘歩にして、内四十年より四十三年度に至り、工事監督を了せしもの、三十二ヶ所、此面積貳千四百三十四町九反餘歩に達し、又獎勵規程に依り、七千八百拾三町四段餘歩の測量設計を遂げ、補助

規程に依り、四十二年度及四十三年度に於て、二十六地區に於ける整理施行面積二千二百六十一町八段二畝歩に對し、七千二百七十七圓二十七錢八厘の補助金を交付せり。更に其整理施行箇所面積を郡別せば左の如し。

郡別	整理施行地區數	面積
岩美郡	五ヶ所	四百二町八段六歩
八頭郡	五ヶ所	百八十六町三段三畝十三歩
氣高郡	十ヶ所	千六百二十二町三段八畝十九歩
東伯郡	六ヶ所	千九十七町五段五畝二十一歩
西伯郡	十三ヶ所	二千二百五十八町二段七畝二十七歩
日野郡	八ヶ所	二百八町三段七畝十四歩
鳥取市	一ヶ所	五十四町七段六畝十三歩
合計	五十六ヶ所	五千八百三十町四段九畝二十三歩

尙ほ之を年度別とせば左の如し。

年 度	整理施行地區數	面積
三十三年度	二ヶ所	六十八町三段一畝十五歩

鳥取縣產業案内

四四

三十六年度	三ヶ所	二百四十三町八段八畝三步
三十七年度	一ヶ所	五十六町五段七畝二十七步
三十九年後	三ヶ所	八十九町四段九畝二十九步
四十一年度	二ヶ所	百五十七町六段二十步
四十二年度	九ヶ所	三百六町二段二畝二十二步
四十三年度	八ヶ所	六百七町三段九畝二十五步
四十四年度	十ヶ所	千七百七十七町一段六畝五步
合計	五十六ヶ所	二千五百八十三町八段二畝二十七步 五千八百三十町四段九畝三步

整理終了地の効果を見るに、明治四十二年耕地整理法改正以前に施行したる地區は、區劃形狀の改造に重きを置きたる結果、灌漑排水の施設に於て、充分の効果を得ざりしと雖も、收穫量に於て、一割内外の増收を得、尙耕作運搬上の便宜と、勞費節減に依る利益とを得たること少なからず。耕地整理法改正以後の最近三ヶ年に於ては、該改正の主旨に基き、縣の獎勵方針を一變し、從來の田區改正に加ふるに灌漑排水の改良、就中暗渠排水に重きを置き、又溜池の新設等に依り地目變換開墾を盛に獎勵し、畑地向つても亦、適當の整理を獎勵したる爲め、縣下に於て、畑地に有名なる西伯郡濱

の目地方の如き、殆んど全部整理に着手するに至る等、施行面積に於て驚くべき一大發展を來し、且各方面に良好の成績を呈するに至れり。斯の如く耕地整理事業は、今や一般當業者間に順潮の發展をなし、既に組合として設立せるもの三十ヶ所の外、尙測量設計の補助及組合設立の認可申請中にあるもの、又は現に測量設計に従事し、或は工事進行中にあるもの少なからず。

肥料需要の趨勢 本縣に於ける肥料の需用は、年を逐ふて、漸次増加の趨勢を示せり、即ち明治三十五年に於ける金肥總額は、二十九萬圓に過ぎざりしが、同三十九年に至りては、四十九萬五千圓に昇り、同四十三年に於ては一躍六十三萬圓を超過せり。其種類別數量並價額を掲ぐれば左の如し。

鍊 粕 類	數量	二十七萬六千六百三十二貫
	價額	十二萬四千九百六十圓
過 磷 酸 肥 料	數量	五十八萬六千六百六十九貫
	價額	七萬二千九百二十圓
調 合 肥 料	數量	四十七萬四千二百七十五貫
	價額	十三萬二千五百二十七圓
硫 酸 安 母 尼 亞	數量	九萬六千八百八十一貫
	價額	五萬六千七百十三圓

普通農事

四五



大豆	数量	八十四萬九千六百八十貫
	價額	十七萬四千九十六圓
油粕類	数量	十一萬九千七百七十三貫
	價額	二萬四千九百一十一圓
智利硝石	数量	千百五十貫
	價額	五百二十七圓
糠其他植物質肥料	数量	十八萬千六百二十二貫
	價額	一萬四千二百五十九圓
乾鰹其他の魚肥	数量	九萬二千六百九十貫
	價額	二萬九千七百五十二圓

製造肥料の趨勢 縣下に於ける肥料製造業者は、現今八十八名にして、年次に遞減の趨勢なり。製造肥料は、主として油粕類にして、他は之れを擧ぐるに足らず。即ち油粕にありては、菜種油粕、胡麻油粕、荏油粕、棉實油粕、大豆油粕、桐油粕、蠶蛹油粕及樗油粕等にして、何れも大規模の製造者なく、僅かに舊式の壓搾器を以て、副業的に製造するに過ぎず。魚肥類の製造は、年額僅かに二

三百貫に過ぎず、曾て調査肥料の製造を開始せしもの十數名ありしも、縣外輸入品に壓倒せられ、漸次衰頽の状況にあり。獨り大豆の製造は、油類條下に記載せる如く米子町に於て、益尾吉太郎の營業に係るもの規模大にして、日に五百枚以上を製出せり。

畑打ちや法三章の札のもと	燕	村
いとまなき世や苗代の薄みどり	白	雄
稻の香や束て落る水の音	蓼	太

### 工藝作物

煙草 本縣に於ける煙草耕作の起源は、詳ならずと雖も、想ふに甚だ古きものには非らざる可し。主産地は、日野郡を首位とし、西伯及八頭郡之に亞けり。藩政の當時は、總て縣下の需要は、日野、八頭兩郡産に仰ぎたるを以て、其産額亦多く、他の農産物に比すれば、較や進歩の状況なりし。維新後、他國産の優品、搬入さるゝや、忽ち其影響を被むり、一時不振の状況を呈せり。明治十六年改良の一策として、薩摩、埼玉及露國産の種子を配付し、同二十二年外國種「フロリダ」、「コンネチカツ

ト」及薩摩種を各地に試作せしめ、且特效肥料を試用せしむ。二十三年、縣立農學校に煙草教師を聘し生徒を養成す。二十五年、煙草作改良試驗を主産郡に行ふ、爾來耕作者も、大に改良の必要を認め、着々改善を圖ると共に、其販路も亦擴張し、鳥根、兵庫、及北陸各縣に輸出するに至れり。葉煙草專賣法實施せられしより、耕作段別の制限を設けたると、耕作人に於て耕作上諸種の煩雜を厭ふ等の爲め耕作地は、從來より著しく減少し、西伯、八頭の如きは、全く廢絶せり。最近三ヶ年の作付段別及收穫高は、左の如し

四十一年 作付段別 百八十八町五段歩  
收穫高 六萬六千七百四十九貫

四十二年 作付段別 百八十町歩  
收穫高 六萬七千三百九十六貫

四十三年 作付段別 百六十八町歩  
收穫高 五萬六千二百三十二貫

薯蕷 石油使用前に於ては、薯蕷の栽培盛なりしも、近來は、石油及電燈の類に厭倒され、種油の使用大に減少せる爲め、薯蕷の栽培は著しく減少せり、最近三ヶ年作付段別及收穫高は、左の如し

四十一年 作付段別 七百三十一町歩  
收穫高 四千九百六十六石

四十二年 作付段別 六百四十七町五段歩  
收穫高 四千四百六十石

四十三年 作付段別 六百四十町九段歩  
收穫高 四千八百九十一石

草棉 栽培の起源は、明かならずと雖も、西伯郡夜見半島（濱の目地方と稱す）に於ては、元祿以前、既に之れを栽培せるもの、如し。同地方は、草棉の栽培に適し、藩制當時は、同郡米子町及車尾村に綿改所なるものを設置し、手數料を徴し、標章を付して、輸出を許したり。維新後、之を廢止したりと雖も、其産額は、益々増加し、此一地方にても一ヶ年九十萬貫の産出を爲し、縣下産綿の九割に及びぬ。然るに明治十六年頃より、各地紡績業の勃興に伴ひ、外國綿の輸入盛んとなり、地方草棉は、之が爲め一大打撃を蒙り、一時は殆んど其耕作者を絶つゝの状況なりしが、近來は、衣服及布團類の中綿として、内地綿の需要増加したる爲め、再び之が耕作に従事するもの有る傾向あり。最近三ヶ年の作付反別及收穫高は、左の如し。

四十一年 作付段別 四百三十八町六段歩  
收穫高 十萬二千八百八十八貫

四十二年 作付段別 四百二町四段歩  
收穫高 十七萬六千八百九十一貫

四十三年 作付段別 四百三十一町九段歩  
收穫高 十四萬二千九百八十八貫

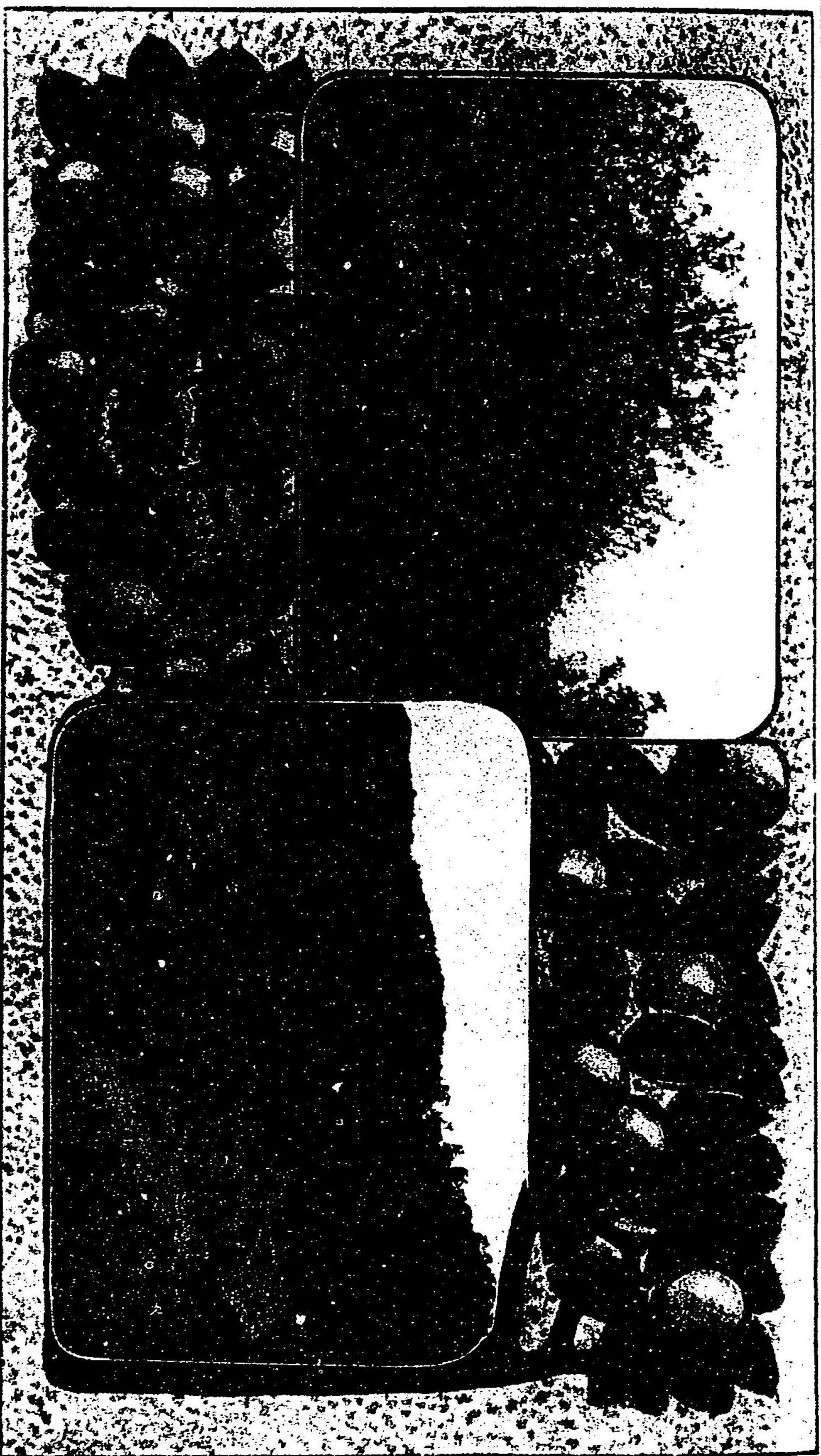
鳥取縣產業案内

麻 各郡共に多少産出するも、八頭及日野二郡を以て、主産地とす。就中八頭郡佐治村、佐貫村地方に産するものは、纖維強靱にして品質佳良、販路遠く四國、岡山、兵庫の各縣に及べり。而して本縣産の麻は、魚網及網具用として、獨特の品質を有するを以て需要せられたるも、近來綿絲を使用すること、なれるを以て其需要大に減じ、且加ふるに主産地方に於て、麻の裏作として、栽培せる馬鈴薯の疫病菌に侵され殆んど栽培の望みなきに至りたるより、從て麻作を廢止するもの多し。最近三年の作付段別及收穫高は、左の如し

四十一年	作付段別	百八十七町步	四十二年	作付段別	百三十七町二段步
	收穫高	五萬五百三十七貫		收穫高	六萬二千二百四十九貫
四十三年	作付段別	百四十七町二段步			
	收穫高	五萬三千七百十貫			

雨に暮る、日を菜の花の盛哉  
里は今綿あたらしき日和かな

青 蘿  
太 蘿



鳥取縣產業案内

## 園藝作物

果樹 縣下に栽培する果樹は、苹果、梨、桃、柿、梅、葡萄、枇杷、杏、及柑橘類にして、葡萄、枇杷及杏の如きは、未だ産額多からず。梨、桃、柿、梅及柑橘類は、其起源詳かならずと雖も、古來栽培する所なり。而して近年梨、桃及柑橘類は優良なる新品種の移入あり、大に其面目を改めたるのみならず、其産額の如き、頗に一大長足の進歩を爲せり。苹果は、明治二十年頃に於て、既に栽植を試みたるものありしも、當時栽培剪定の方法詳かならざりし爲め、好結果を得ず、明治三十年頃より東伯郡に於て、栽培するもの漸く多く、而も其結果良好にして、收益尠ならず、是に於て、同郡は元より、西伯、氣高、岩美の諸郡及鳥取市に至るまで各地之が栽培を見ざる無きに至れり。而して苹果、梨、桃は、東伯郡最も上品のものを産し、氣高、西伯等之に亞ぐ。柑橘は、西伯郡に優品を出す。重なる種類は、苹果に在りては、紅魁、紅玉、祝、旭及國光等にして、梨は、明月、大平、長十郎、早生赤、奥三吉、「バートレット」及赤龍等、柑橘は、九年母、「ネーブル柑、蝋、温州、回生橙、夏橙、旭柑及金柑等にして、桃は、上海及天津水蜜桃、「アムステンジュン」「カールマン」等、柿は、花御所、西條、新平、蜂屋、八方寺百目、「コネリ」等なり。販路は、苹果及梨は、地方を主とし、門司、

鳥取縣產業案内

阪神地方、島根縣、及臺灣等に輸出す、其他の果實は、主として地方に於て賣却す。販賣方法は、他地方へ輸出するものは、特約せる問屋に送付し、地方販賣は、問屋又は小賣店に賣却し、稀に行商を爲すものあり。

最近三ヶ年の作付段別及産額は、左の如し

梅	四十二年	作付段別	四十三町八段歩
		價 格	七千三百二十二圓
	四十三年	作付段別	四十五町二段歩
		價 格	八千六百六十五圓
	四十四年	作付段別	四十九町五段歩
		價 格	八千七百六十九圓
	四十二年	作付段別	七十八町歩
		價 格	二萬三千八十五圓
桃	四十三年	作付段別	七十一町一段歩
		價 格	二萬七百五十九圓

梨	四十四年	作付段別	八十四町七段歩
		價 格	二萬五千五百八十二圓
	四十二年	作付段別	百六十二町四段歩
		價 格	六萬一千四百三十三圓
	四十三年	作付段別	百十六町四段歩
		價 格	五萬五千七百十五圓
	四十四年	作付段別	百四十三町五段歩
		價 格	七萬四千九百九圓
苹果	四十二年	作付段別	二十五町五段歩
		價 格	四萬九千五十一圓
	四十三年	作付段別	三十一町五段歩
		價 格	五萬五千百十三圓
	四十四年	作付段別	八十二町二段歩
		價 格	五萬三千七百七十七圓

園藝作物

鳥取縣產業案内

密柑		四十二年	作付段別	八十九町三段歩
			價 格	二萬九千六百二十二圓
		四十三年	作付段別	百二十九町九段歩
			價 格	二十三萬七千七百二十四圓
		四十四年	作付段別	—
			價 格	—
柿		四十二年	作付段別	三百九十四町六段歩
			價 格	九萬五千八百八十三圓
		四十三年	作付段別	三百五十七町三段歩
			價 格	七萬三千五百五十圓
		四十四年	作付段別	三百八十四町八段歩
			價 格	十一萬二千八百八十二圓

●蔬菜 縣下に栽培する蔬菜は、蘿蔔、蕪菁、胡蘿蔔、牛蒡、葱、頭葱、蕃椒、山葵、生姜、西瓜、南瓜、瓜類、茄、芋類、當歸、甘藍、及各種の菘類等とす。玉葱は、近來西伯郡内海沿岸なる彦名村

に於て、優品を産出す。山葵は、東伯郡三徳地方の産、最も有名なり。蕪菁にして、一種赤蕪菁と稱するもの西伯郡米子町附近より産出す、鹽藏して風味あり、近來各地に輸出す、其他鳥取市附近より産する南瓜、西伯郡より産出する扁蒲より製造する干瓢も亦、美味を以て聞ゆ。温室栽培に至ては、多少試むるもの無きに非らざるも、未だ盛ならず。最近三ヶ年の作付段別及收穫高は、左の如し。

蘿蔔		四十一年	作付段別	千五十町二段歩
			收穫高	五百三十一萬六千五百九十貫
		四十二年	作付段別	千四十七町九段歩
			收穫高	五百四十五萬九千三百九十貫
		四十三年	作付段別	千二百二町二段歩
			收穫高	六百二十二萬四千七百七貫
		四十一年	作付段別	百二十町五段歩
			收穫高	三十五萬六千八百十三貫
		四十二年	作付段別	百五町九段歩
			收穫高	四十二萬九百七十二貫

園藝作物

鳥取縣產業案內

四十二年	作付段別	百十七町四段步
四十二年	收穫高	四十五萬七千七百八十四貫
四十一年	作付段別	二十二町四段步
四十一年	收穫高	六萬四千二百二十四貫
四十二年	作付段別	二十六町八段步
四十二年	收穫高	八萬三百九貫
四十三年	作付段別	二十三町五段步
四十三年	收穫高	六萬三千五百九十九貫
四十一年	作付段別	九十九町三段步
四十一年	收穫高	二十一萬四千七十三貫
四十二年	作付段別	八十七町三段步
四十二年	收穫高	二十萬八千二百二貫
四十三年	作付段別	九十四町七段步
四十三年	收穫高	二十二萬七千六百一十一貫

四十一年	作付段別	八十九町五段步
四十一年	收穫高	二十六萬三千六十五貫
四十二年	作付段別	九十八町七段步
四十二年	收穫高	三十萬五千六百六十九貫
四十三年	作付段別	百二町三段步
四十三年	收穫高	三十一萬八千三百五十七貫
四十一年	作付段別	—
四十一年	收穫高	—
四十二年	作付段別	一段步
四十二年	收穫高	二百貫
四十三年	作付段別	九段步
四十三年	收穫高	二千九百七十五貫
四十一年	作付段別	三十三町五段步
四十一年	收穫高	四萬三千二百十七貫

鳥取縣產業案內

蕃椒

四十二年 作付段別 三十六町六段步  
收穫高 四萬六千二百九十六貫

四十二年

作付段別 三十八町七段步

四十二年

收穫高 五萬七百五十六貫

四十二年

作付段別 四町九段步

四十二年

收穫高 九千六百九十貫

生姜

四十二年 作付段別 五町二段步  
收穫高 一萬一千六百五十八貫

四十二年

作付段別 六町五段步

四十二年

收穫高 一萬三千八百九十二貫

四十二年

作付段別 七十町三段步

四十二年

收穫高 二十八萬七千三百八十七貫

西瓜

四十二年 作付段別 八十一町二段步  
收穫高 三十一萬四千九百九十九貫

四十二年

作付段別 九十八町一段步

四十二年

收穫高 四十一萬五千四百三十八貫

四十二年

作付段別 九十五町九段步

四十二年

收穫高 二十七萬四千八百五十四貫

南瓜

四十二年 作付段別 百四町五段步  
收穫高 二十九萬八千六百八十四貫

四十二年

作付段別 百四町一段步

四十二年

收穫高 二十九萬二千九十五貫

四十二年

作付段別 百四町七段步

四十二年

收穫高 三十一萬三千二百十六貫

瓜類

四十二年 作付段別 百六町五段步  
收穫高 三十一萬六百七十三貫

四十二年

作付段別 百五十七町六段步

四十二年

收穫高 三十一萬六千六百二十三貫

園藝作物



四十二年	作付段別 百七十七町三段歩
四十二年	收穫高 三十九萬三千六百四十九貫
四十二年	作付段別 百八十二町九段歩
四十二年	收穫高 三十九萬三千八百八十二貫
四十三年	作付段別 百七十一町三段歩
四十三年	收穫高 四十萬八千六百七十六貫
四十一年	作付段別 八百四町
四十一年	收穫高 二百十四萬八千五百二十八貫
四十一年	作付段別 七百三十五町一段歩
四十一年	收穫高 百七十八萬七千二百二十二貫
四十三年	作付段別 七百六十四町六段歩
四十三年	收穫高 百八十八萬三千二十貫
四十一年	作付段別 二千五百五十六町六段歩
四十一年	收穫高 六百四十一萬八千四百二十二貫

甘藍 四十二年 作付段別 二千四百四十四町二段歩  
 收穫高 六百五十二萬八千七百七十二貫  
 四十二年 作付段別 二千二百二十九町三段歩  
 收穫高 六百八十七萬九千六百六十九貫

備考 山葵、當歸の收穫高は不詳なり。

花さそふ桃や歌舞妓の脇踊  
 齒にしみて秋のとゞまる熟柿哉  
 初茄子さて大兵の使かな

其 角  
 一 蓼  
 茶 太

### 水産業

概況 縣下一市六郡中、海に接するは、岩美、氣高、東伯及西伯の四郡にして、漁業に従事するもの、五十七町村、五千二百十二戸に及ぶ。海岸凹凸少く、島嶼稀にして、船舶の出入に便ならず、故に往時は、地勢により、沖合漁業を營む部落と、磯漁に従事する地方とは、自ら分割せられ、沖漁村

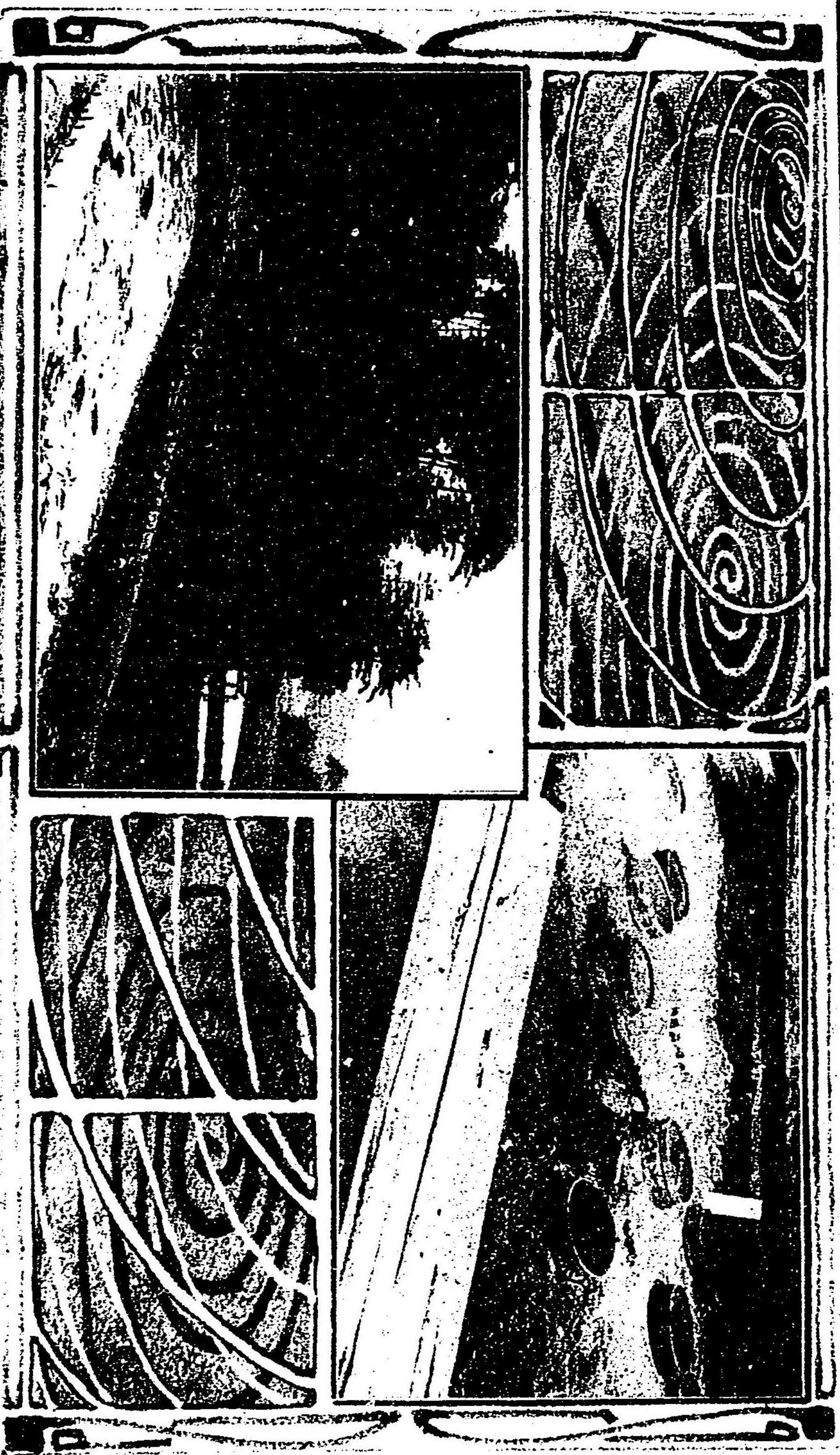
水産業

鳥取縣產業案内

に在りては、十數里の海岸に於て、延繩一本釣漁に従事し、専ら漁業に依りて、生計を營み。漁村に在ては、其地先數里の海面に於て、地曳網、掛網漁業に従事し、其多くは、農業と相兼ね、以て生計の一助となすに過ぎざりし。輒近、其業を擴張し、或は漁船漁具を改め、或は新に漁場を撰定し、磯漁村の如きも亦、遠く沖合に出漁する所、少なからず。殊に鯖延繩、鰯網、文鯨魚卷網、鱒流網、沖手線網の開始、並に柔魚釣漁の發達は、大に漁獲高を増加せしめたり。淡水に於ては、千代川、天神川、日野川、湖山池、東郷池、水尻池等、河湖池沼に於ける漁業、漸次發達しつゝあり。

重要な漁獲物 鹹水に在りては鯛、鰈、鰯、鮎、鰻、鱒、鯖、文鯨魚、鰻、柔魚、鰯、鮎、鰻、鱒等にして、淡水に在りては、鰻、鯉、鮎、鮎、鰻、鱒なり。多くは生鮮のまま、地方の需用に供用せらるるに過ぎざりしが、近來交通の便開くるに従ひ、或は生鮮にて、或は氷詰にて、或は一時の假製を施して、京阪其他の地方に輸送せらるゝもの少なからず。製造物の重なるものは、鰻、煮乾鰻、田作、鱒、鱒及び鯖、鰻、鰯、文鯨魚等の鹽藏、若くは乾製品にして、就中鰻は近來柔魚漁の發達に伴ひ、其生産額著しく増加せり。

養殖業 元和年間、山城國淀川産鯉魚を湖山池に移殖したるを始とし、明治廿一年、天神川産鰻魚を千代川に移殖し、湖山池、東郷池、水尻池等に鯉若くは鰻の放養を獎勵せり。近來に至りては、池



鳥取縣養田福村同郡同

鳥取縣養田福村保松郡高氣

沼、溜池其他廢水面を利用し、養魚を試み、或は農家の副業として、稻田に鯉兒を放養する者増加し、殊に養鯉業の如き、明治十三四年の頃、西伯郡淀江町に於て、鯉兒の孵化育成の業を開始せし以來氣高、八頭の兩郡に於ても亦、之を營む者あり。養鼈も亦氣高郡に於て盛ならんとす、其産額縣下を通じ一ヶ年三百五六十萬尾に達し、盛に縣内外の需要に應じつゝあり。

**遠洋漁業** 縣費を以て補助金を交付し、遠洋漁場の探検を促したるも、明治三十六年度より三十八年度迄は、之に従事するもの、毎年二組にして、鱒、鯉、鯛、鰯及明太魚漁業に過ぎざりし。三十九年度よりは、補助規程を定め、其漁業種類を鱒及鯛延縄並に鱒、鯉及玉筋魚の地曳網に限り、且漁具の構造及其設備に對し、一定の率を以て、補助するの方針を執り、一層斯業の啓發を促したる結果、同年度に於ては、四組四十年度には六組、四十一年度には五組の従業者を出し、朝鮮國嶺海灣、巨濟島、巨文島、安島及關東州大連附近に於ける鱒及鯛延縄並に鯛網漁業に従事せり。其成績は、年一年良好の結果を示すに至りしも、朝鮮に於ては、漁業法を實施し、廣く彼我兩國人の漁業を保護誘掖せらるることとなり。其狀勢如上の施設により、満足すべきにあらず、益々其規模を擴張し、大に斯業の發展を期せざるべからざるを以て、四十二年度より従來の補助方法を廢し、更に水産組合の事業として、移住通漁の根據地を定め、多數當業者をして、同國漁業法に依る、各種漁業に従事せしめんが爲め、

家屋建設、漁船改造及漁獲物運搬の便宜を與ふるの方法を設けしめ、現今其經營に對し、縣費を以て補助金を與へ、之が遂行を督勵中なり。又縣下有志者に於て、明治四十四年、水産株式會社を組織し、水産組合と相俟て、出漁者に便宜を與ふることとなりしより、進で出漁を希望する者多く、同年に於ては、漁船九隻、漁者六十四人の出漁を見、尙該地方漁業に經驗ある實業教師を備聘し、且朝鮮人をも使役し、鯖鱈等の漁業に従事せり。其他先年來獨力、對州及鬱陵島に出漁せる者あり、其成績佳良なるを以て出漁者漸次増加の趨勢なり。

**漁業取締** 明治十八年、湖川漁業取締規則を發布したるを始めとし。爾後改定又は新規則を制定せしが、漁業法實施の結果として、三十六年從前の規則を廢し、更に漁業取締規則を制定せり。仍ち四ツ張網、地曳網、鵜川（以上湖川）、笄網、手繰網及打瀬網（以上海面）を許可漁業とし、築、連翼索、網目六節以上の曳網、川干、鵜使及鮎張網（以上湖川）の漁業を禁止し、鮑、鮎、鮭、鱒、石花菜及イギスの、採捕期を制限し、其他漁場、時期及漁法に關する制限事項を定めて、魚族の蕃殖を保護し、又遊漁に對する漁事の種類を制限して、漁業者を保護する所あり。

**水産試験事業** 明治三十三年の創設に係り、其初年より明治三十六年度迄は漁撈、製造及養殖の各種試験を施行し、同三十六年度より専ら漁撈試験を實施せり。而して、最早重要なる試験事項に就て

は、一階段を経たるを以て、本場は明治四十三年度限り廢止し、爾後試験の必要に際しては、團體に委託し、其他は隨時相當の措置を執る事とせり。本場創設以來の試験事項及成績を概述すれば、左の如し。

試験事業 施行年度 成績の梗概

鰈延繩餌料試験

自三十三年度 本試験は餌料の不足補充のため新餌料の發見を目的として施行せしが沙吹貝の最適當なるを發見し且つ其鹽漬せるもの、優良なるを認め良好の成績を收め得たり

鱒卷網漁業試験

自三十四年度 本試験は鱒漁法を改良研究するの目的にして成績良好なりしを以て一般至三十八年度 當業者に良好の漁具たるを認知せられ之を使用するもの多きに至れり

鰯網漁業試験

自三十四年度 本試験は從前の釣漁業を網漁業に改良し收支如何を研究せるものにして其結果網漁業の頗る有利なるを實驗したれば現今釣漁をなすもの殆ど之なきに至れり

鮪延繩漁業試験

自三十四年度 鮪は年々より夥多沿海に來游するを以て之が延繩漁業を試験したるに魚群を認むるも鉤に上らず之れ蓋し孕卵時期による者にして充分なる見込なきと他漁業の關係上支障の點あるを以て當年度限り試験を止む

鱒延繩餌料試験

自三十四年度 本試験は在來餌料高價なるを以て安價に且得易き新餌料を發見するにあ至三十七年度 りて其結果諸種の有益なる餌料を發見し大に當業者を利せり

水産業

玉筋魚網漁業試験

自三十四年度 玉筋魚は従前恰好の漁具なきにより沖取の本網を試験せしに其成績良好  
至三十九年度 且輕便の漁具なるを以て一般漁者の好評を博し漸次普及しつゝあり

鯛延繩餌料試験

自三十六年度 本試験は鯛餌料の研究にありて沿海砂底に棲息する蝶子蟹が非常の好餌  
至三十七年度 料たるを發見し當業者に多大の利益を與へたり

鱈延繩漁業試験

自三十七年度 在來縣下に於て鱈漁季とせる秋冬季以外に該漁獲なきやを試験したるに  
至三十九年度 其成績良好にして夏季五六月の交は秋冬季に劣らざる漁獲あるを認めたり

鱈流網漁業試験

自三十七年度 本試験は縣下四伯郡沿海に年々群來する鱈の漁法研究に在りて成績佳良  
至三十八年度 なりしにより其地方漁業者間に本漁法に倣ふもの鮮からざるに至れり

丸子魚卷刺網試験

三十八年度 本試験は丸子魚漁具の改良を目的とせるものにして成績は頗る良好なり  
しにより一般に好漁具たるを認知せられたるも比較的經費多額を要する  
を以て未だ民間起業者を見るに至らず

鯛延繩漁業試験

自三十八年度 本試験は隱岐國沿海に出稼鯛漁業を奨励するの目的にて漁獲物は網生洲  
至四十一年度 得尚試験船は一隻を以てしたるも團體にて出漁するときは一層有利なる  
を認められたるも未だ團體出漁の組織を見るに至らず

鱈卷刺網漁業試験

三十八年度 本試験は丸子魚卷刺網を鱈漁に兼用の目的を以て之を施行したるも卷刺  
網は鱈の習性に適せざるを發見し當年限り試験を止む

鱈縛網漁業試験

自三十九年度 鱈漁に卷網の不適當なるを認めたるより縛網を試験したるに良好の成績  
至四十一年度 を見るに至れり

吾智網漁業試験

自四十年年度 本網使用に適當なる位置には目的魚の來游甚だしく從て收支相償はず本  
至四十二年年度 網は縣下の海面に不適當なるを認めたり

鯛四艘張網漁業試験

自四十二年年度 本試験は從來専ら使用せる地曳網漁場に鯛の來游稀少なるを以て輕便な  
至四十三年度 る沖取漁具使用の目的を以て施行し成績良好なりしも未だ廣く起業者を  
見るに至らず

松ヶ瀬漁業試験

自四十二年年度 本試験は縣下重要漁業たる鯛漁をして益々盛大ならしめん爲人工的鯛棲  
至四十三年度 息所を設くるにありて多少鯛の集游を認め成績良好なるが如し

中海藻介養殖準備調査

四十一年度 藻介養殖の準備として調査をなせり

中海(方言)藻介(赤介)養殖試験

自四十二年年度 本試験は中海に於て重要水産物たる藻介の最適當の養殖方法を發見せ  
至四十三年度 んとするにありて大體に於ては略ぼ之を知るを得たるも尙一層明確な  
缺く所あるを以て本場廢止後は彦名村役場に委託して繼續試験中なり

各種罐詰試験

自三十三年度 本試験は適當と認むる水産物原料を以て經濟的研究をなすにありしも  
至三十四年度 中途にして休止し成績を得るに至らざりし

糞干並保存試験

三十四年度 本試験は糞干鮭の製造改良及保存上の試験にして其成績佳良なり

鮭製造

三十四年度

本試験は東京灣淺草海苔の製法に倣ひ之を試験し傍ら當業者に傳習せしめしに在來製に比し稍々良好の製品を得るに至れり

干鰯製造試験

三十四年度

本試験は干鰯製造法の改良にして成績良好なり

牡蠣移植試験

自三十三年度  
至三十六年度

本試験は縣下西伯郡中海に廣島縣産の牡蠣増殖を期するに在りしが中海は潮汐の關係上成育充分ならざるを認めたり

海苔養殖試験

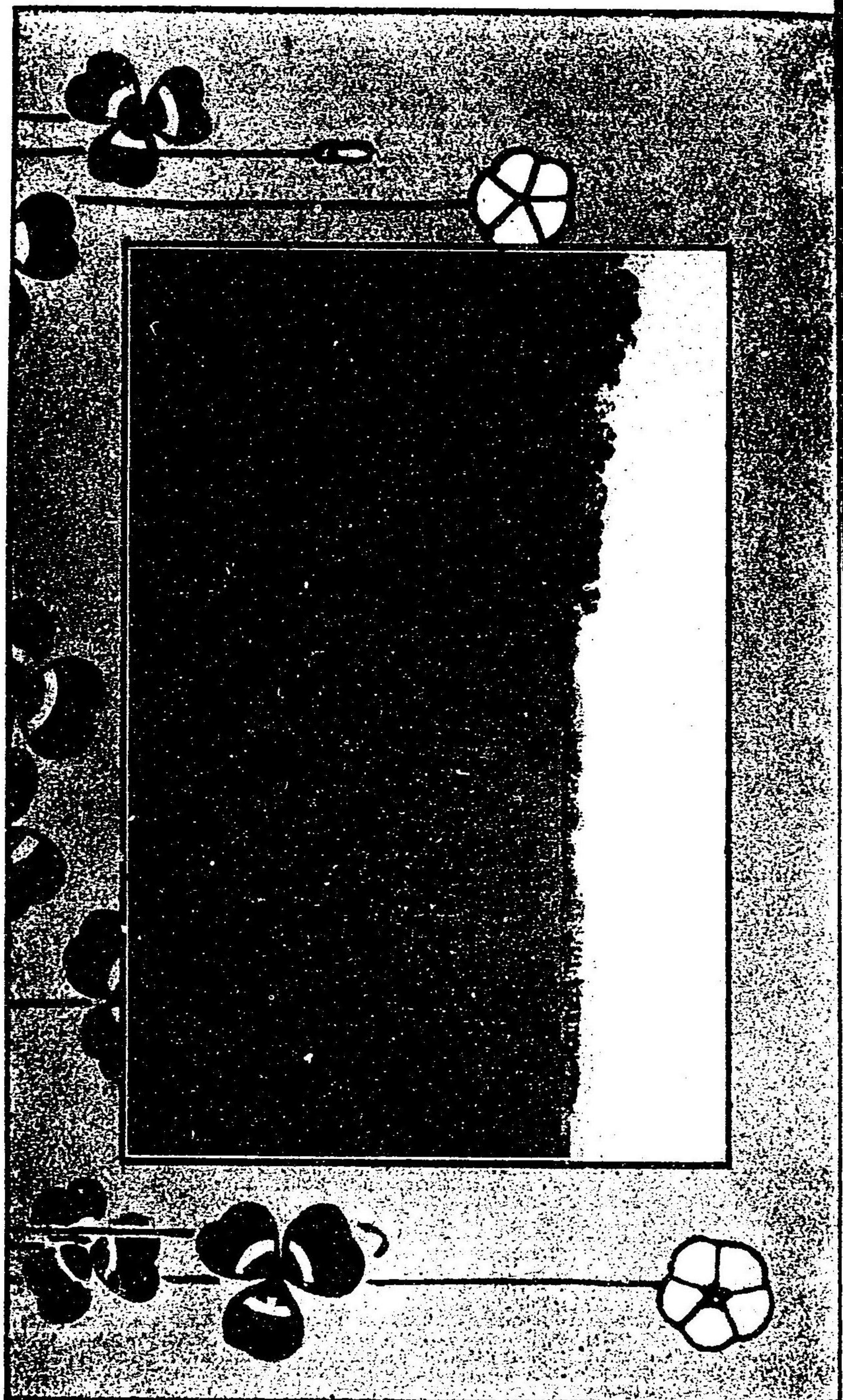
三十四年度

本試験は縣下に海苔の人工養殖法を創始せんとする目的なりしも試験の結果海況其他の狀勢人工養殖法を施すに不適當なるを認識せり

我朝のものとは見えぬ海鼠かな

白魚や鯨にも此花の兄  
籠の目や潮こぼるゝ初鯉

一 茶  
葉 蓼 太 蛤



鳥取縣に於ける初鯉の圖

## 蠶絲業

●桑園 昔時、農家に於て蠶を養ふには、特に桑園の設け無く、纔に天然の山桑、若くは河岸に栽植せられたる桑葉を用ひたるに過ぎず。明治の初年に至り、蠶絲業の有利にして、將來重要輸出品たることを看取せられしより、斯業に従事する者、漸く多く、隨て桑園の設備を必要とするに至れり。是に於て縣は明治八年、茨城縣より桑苗二百萬本を購入し、之を因伯隱の三國に分植し、同十年には、滋賀縣より桑苗を購入し、之を舊鳥取藩士族へ年賦返納の法によりて栽植せしめ、同十一年三月、鳥取市に四町歩の桑園を設け、桑苗を仕立て、民間に配布するの法を設け、翌十二年、更に岩美郡美保村大字古市村に、土地九段餘歩を買上げ、桑園を拓き、良苗の普及を計れり。然るに苗木下付の希望者非常に多く、其需要を充たし難きにより、桑苗を江州に求めて配布したるもの數萬本、尙古桑園を擴張して四町六畝餘歩とし、更に西伯郡米子町に桑園四段歩餘を開設す。當時民間に於て桑苗仕立に従事するもの亦少なからず。明治十七年には、上州及奥州地方よりも桑苗を購入し、盛に栽植を計りしを以て民有桑園、六百三十餘町歩に達し、同年四月、更に士族授産の目的を以て、古市村に桑園一町五段歩を増設し、同二十年氣高郡千代水村に十二町餘歩、同廿一年に東伯郡倉吉町に一町餘歩

の桑園を開きぬ。斯の如く施設奨励の結果、桑園は、漸く縣下に普及したるを以て、同廿二年、米子桑園を閉ぢ、士族授産の爲め設立したる桑園は、同廿三年三月、總て士族の自營に移せり。爾來桑園の改良増殖は、主として、蠶絲同業組合或は縣農會等に補助金を交付して、之れが局に當らしめたる結果、現在の桑園段別は、四千八百七町歩に達せり。然れども尙縣内には桑園に好適なる荒蕪地、約五千町歩の在る有り、且現今栽培せる桑樹の早、中、晩、の割合は、甚しく晩桑に偏せるを以て、荒廢せる桑園の改植及新設の桑園には、可成早中桑を栽培せしめん爲め、明治四十五年一月桑園改良増殖奨励費交付規程を設け、同四十五年度に於て縣費五千圓を豫算に計上せり。

養蠶 延喜の時代に於ては、因伯兩州は、中絲國の班に列せしを以て稽ふれば、兩州養蠶の起原は、甚だ古きものなるべし。然れども史籍の之れを傳ふるもの無きを以て、昔時の狀況詳かならず。明治八九年の頃、縣下の有志者、意を養蠶に傾け、熱心に其の改良を圖りしと雖も、當時未だ桑園の之れに伴はざりしを以て、充分其目的を達せざりし。同十六年頃に至りては、桑園漸く普及し、同年より七年間、士族授産の目的を以て、群馬縣より養蠶製絲の教師を聘し、生徒を養成し、修業生二百八十三名を出せり。又同廿年より廿二年迄、毎年各郡役所管下に一二ヶ所宛、補助金を交付して、養蠶傳習所を設立し、傳習生三百六十餘名を得たり。而して縣立の倉吉農學校に於ても亦、明治十八年

以來、蠶業専科を置き、學理及實地の教授を爲し、明治二十四年より同三十年迄は、縣若くは蠶絲業改良上の講話を爲さしめ、一面には共進會、品評會を開設せしめたる等、之れが改良發展に努めたり。明治三十一年以來、縣下各蠶絲同業組合に縣費を補助し、自働的發展を圖らしめたる結果、漸次其産額を増加せしも、尙擴張すべき餘裕多大なるを認め、明治四十四年度にありては、縣に一名の技師を置き、各郡に一名宛技手を配置し、且各町村には一名宛の蠶絲業奨励委員を置き、蠶絲業上の指導奨励を爲さしめ、又育蠶時期には、春蠶期十名、夏秋蠶期八名の養蠶巡回教師を備入れ、養蠶者各戸に就き、實地指導を爲さしめたり。斯の如く官民協力、本業の改良發達に盡すこと將に三十有餘年。今や本業により、收得する金額、毎年約二百三十三萬餘圓に達し、縣下物産中米に亞ぐ主要物たるに至れり。左に既往三ヶ年間の實績を掲ぐ。

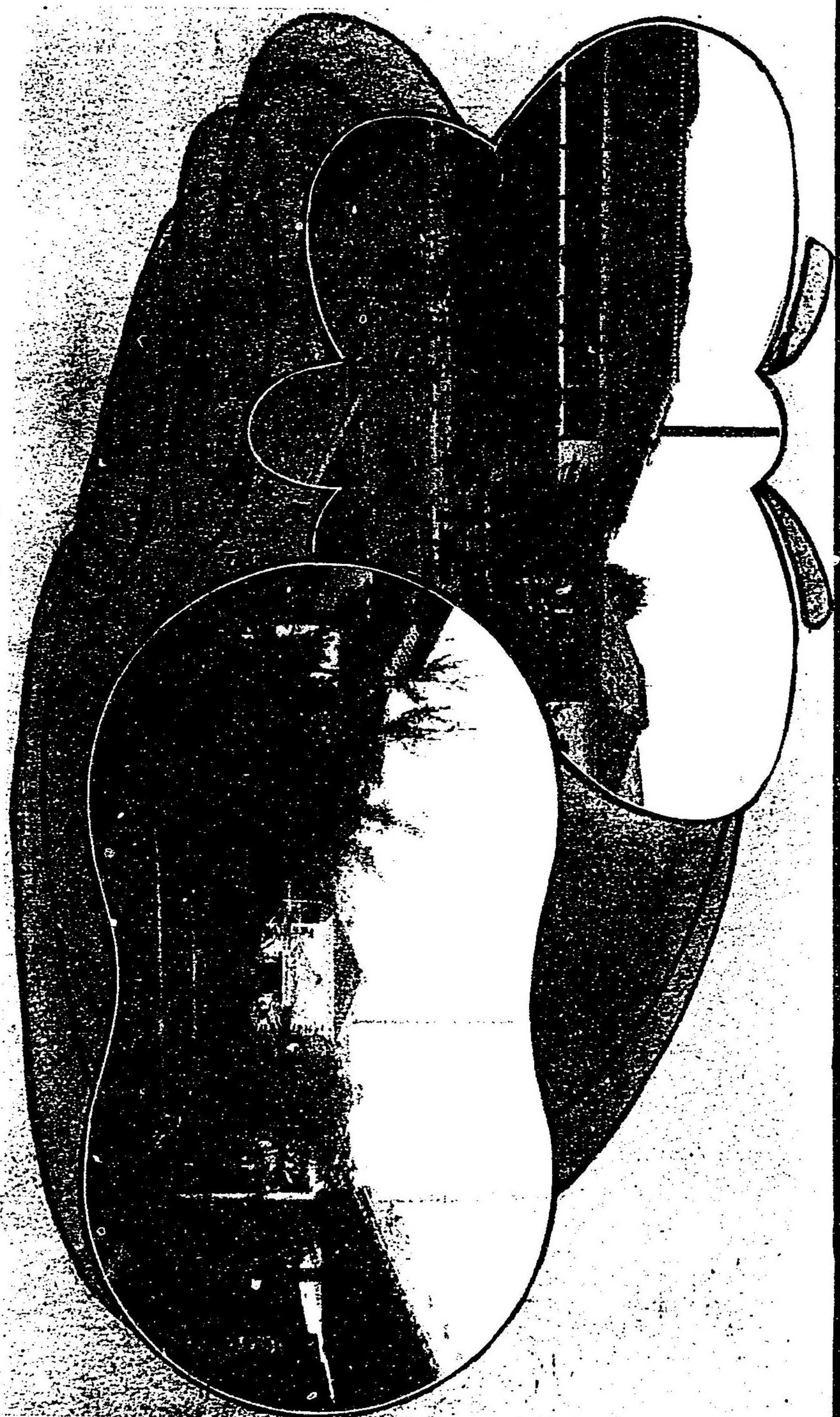
年次	桑園段別	産繭	同上	金額
明治四十二年	四千四百六十三町一段歩	四萬九千三百十五石	百八十一萬三圓	
同 四十三年	四千七百六十七町一段歩	五萬二千八百三十一石	百七十七萬八千八百十二圓	
同 四十四年	四千八百七町歩	六萬五千百五十九石	二百三十三萬七千九百四十一圓	

製絲 明治初年に至る迄は、製絲方法甚だ幼稚にして、纒に手繰絲を製したるに過ぎず。明治十三年、信州人金森某來縣し、初めて坐繰製絲の法を傳ふ、茲に於て二三の工場之れに倣ひ、改良の端緒

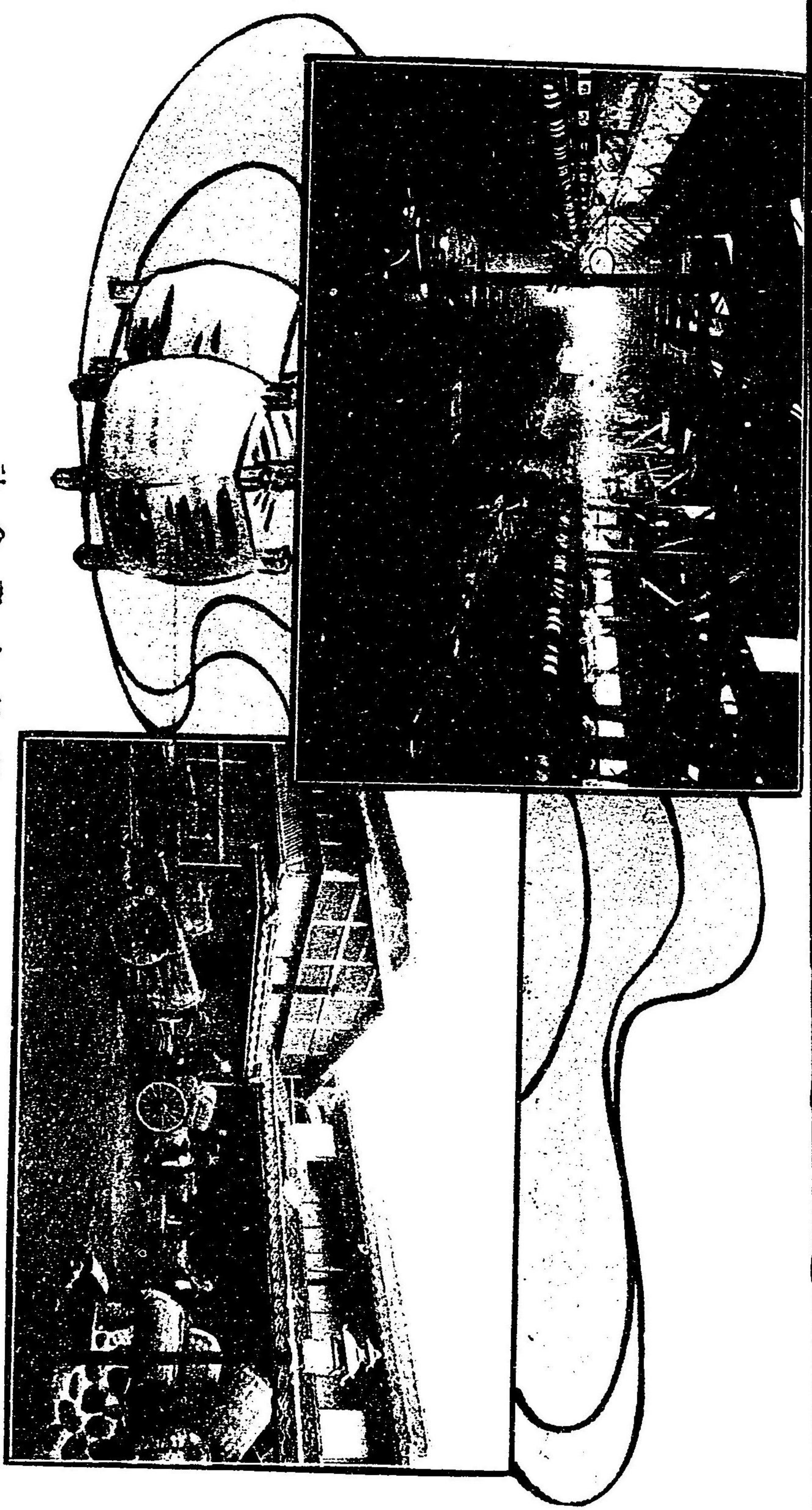


を開く、同十五年縣に於て女工二十名を募集し、富岡製絲場に入所せしめ(同廿一年修業歸縣)同十六年士族授産の爲め、坐繰絲工場を鳥取市に置き、同場内に製絲傳習所を併置し、縣下各郡より生徒及工女を募集して修業せしめ、其生絲は横濱に搬出して、海外の需用に應ぜんことを計れり。是れ本縣製絲工場の濫觴にして、又縣下の生絲を横濱市場に輸送せし嚆矢とす。明治二十年、鳥取市に器械製絲場設立せられ、同年各郡役所々轄内に一箇所ツ、製絲傳習所を置き、二十一年迄に工女二百八十餘名を出し、又同年群馬縣より製絲教師を聘し、縣下を巡回講話せしめ、尙廿一年より廿三年迄、繼續補助費を給して上信地方へ製絲傳習生を派遣する等施設せる結果、縣下の製絲業は、着々發達し、山陰製絲會社、米子製紙會社の如き、大規模の器械製絲場勃興するに至れり。尙近年絲價の變動、其他の事情に由り、多數小規模の製絲業者又は、坐繰製絲業者をして、個々獨立の經營を爲さしむるは、諸種の不利益を蒙ること尠からざるものあるを認め、四十四年東伯郡倉吉町に百窓の生絲共同揚返、共同荷造販賣を縣設し、之れを營業者に無償貸與し、且縣費を以て補助金を交付し、技術者を雇用して、以て共同的經營を實行せしめつゝあり。左に最近三ヶ年間の縣内生絲生産額を示す。

年	次	十人以上製 絲工場數	生絲製造高	熨斗絲產出高	生皮苧產出高	屑物產出高	總	價	格
明治四十一年	七	十二	三萬九千八百八十一	五千三百七十六	三千四百七十九	百七十四萬九千二百四十四圓			



社會式絲製陰三



鳥取市坂口製絲合資會社

同 四十二年 六 十二 二萬九千三百七十五 〆 七百五十三 〆 六千九百九十九 〆 三千五百二十七 〆 一百六十六萬二千九百三十三圓  
 同 四十三年 六 十九 三萬五千九百三十三 〆 九百三十六 〆 七千五百二十二 〆 四千三百六十三 〆 二百五萬四千九百一十二圓

● 真綿 真綿は、縣下各郡に於て、多少製造すれども、明治四十三年の製造戸數九百九十九戸に對し、僅に二百七十二貫を製する狀況にて盛ならず。既往三ヶ年の産額を掲ぐれば、左の如し。

年	次	製	造	戸	數	製	産	額	同	上	價	格
明治四十一年				七百九十二戸			二百六十九 〆				五千五百十六圓	
同 四十二年				八百六戸			百三十七 〆				二千五百四圓	
同 四十三年				九百九十九戸			二百七十二 〆				四千四百七十六圓	

● 蠶種製造事業 縣下の蠶業は前記の如く進歩を爲したりと雖も、其掃立蠶種たる、専ら之れを他府縣に仰ぎしを以て、品種の雑駁甚しく、爲めに善良の生絲を製するに適せざりし。明治廿五年、當時の蠶絲業組合は、飼育すべき蠶の種類を制限し、産繭の一定を期したる爲め、種類概ね統一したるも、之れ單に其名稱を一定せるに過ぎずして、實質に至りては、依然雑駁を免れざりし、是に於て東伯蠶絲同業組合は、三十二年、因幡蠶絲組合は、三十三年より、蠶種製造用の種繭審査會を開き、以て原種の一定を期せり。同三十六年よりは縣費を以て、原蠶種製造所を縣立農事試験場内に設け、

三十九年其組織を改正し、本所を鳥取市に、支所を縣下樞要の地、三ヶ所に置き以て全縣下原種の統一を策せり。而して、本事業施行の方法は、縣内蠶種製造者の生産せる種繭を提出せしめ、審査上合格したるときは、種繭合格證明書を與へ、本人に選附して、原蠶種を製造せしめ、審査に不合格となりし者及種繭を提出し能はざりしものに對しては、審査上優良なるものを購入し、之れを原料とし、製造したる原蠶種を無償にて、蠶種製造者に配付し、其複製種を以て、一般養蠶者の飼料に販賣せしむるにあり。而して其審査會は分ちて、所別審査會、共同審査會の二とし。所別審査會は、各本支所に之れを開き、其管轄内の種繭を審査し、優良と査定せるもの、みを更に共同審査會の審査に附し、以て合格、不合格を決定せり。明治四十五年蠶絲業法實施に伴ひ、別に鳥取縣地方種繭審査會を設けたる結果、原蠶種製造所に於ては、該審査會の審査に合格せる種繭中より、種繭を購入し、蠶種を製造する方法に改正せり。斯くの如くして、縣内蠶種製造者の飼育する原種は、改良したる又昔一化性春蠶の一種に一定せるを以て、今や縣下産繭の殆んど全部（春蠶）は、種類統一し、品質優良の好評を博し、縣内外の製絲家をして、競ふて購入せしむるの盛況となり、蠶種にありても亦、他府縣に輸出する數量尠からず。左に最近三ヶ年間の成績を掲ぐ。



大 山 蠶 種 園 所

年次	經費豫算額	種繭審査數量	原蠶種製造額	原蠶種配付數量
明治四十二年	四千四百四十二圓	二百九十三貫三百九匁	六萬四千八十蛾	四萬九千三百廿九蛾
同 四十三年	四千四百五十圓	三百六貫八匁	六萬一千六百五十七蛾	五萬六千六百六十四蛾
同 四十四年	一萬一圓	三百二十七貫六百十匁	八萬一千九百九十六蛾	七萬三千二百六十四蛾

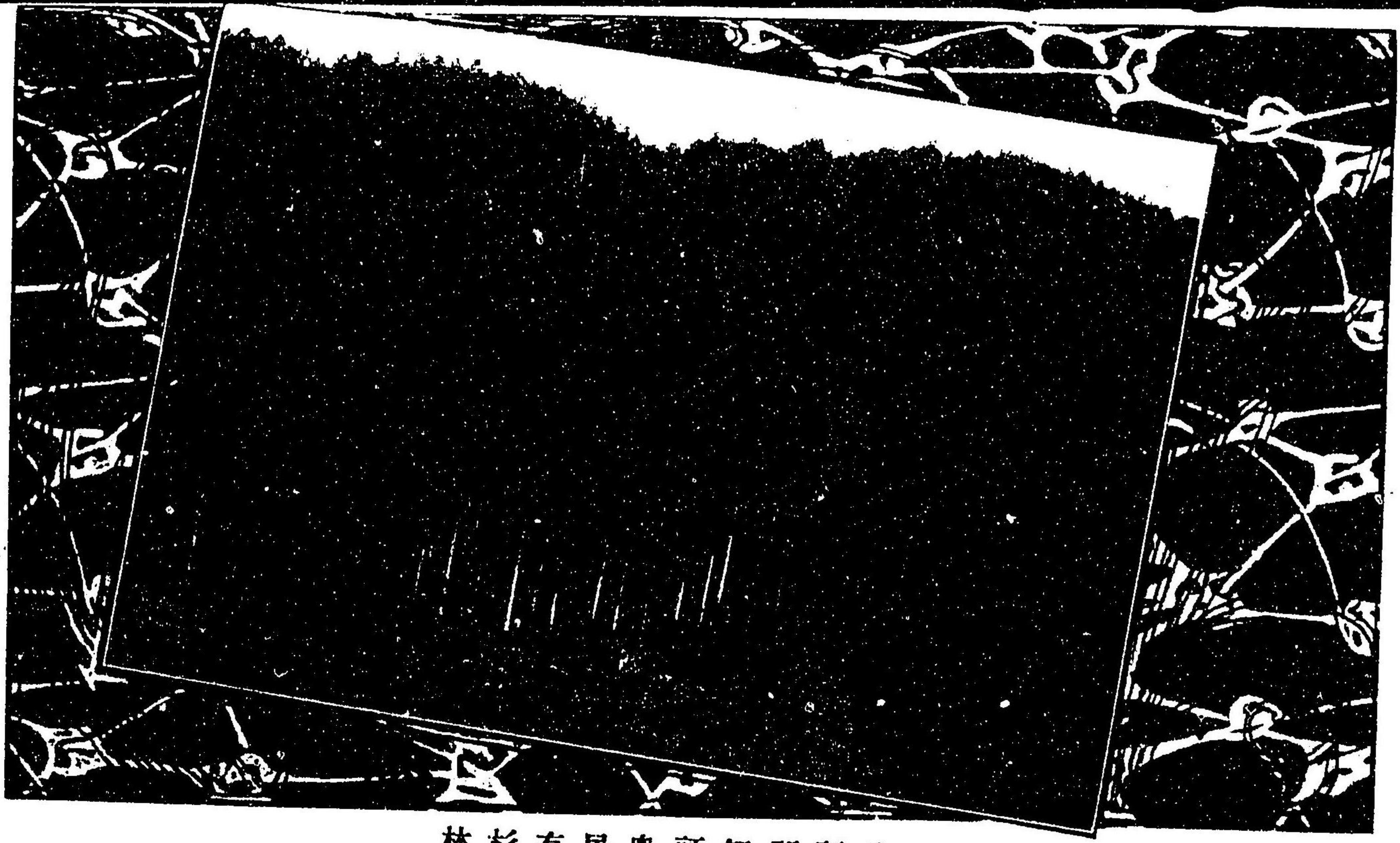
蠶病豫防 明治十九年、蠶種検査規則の發布に基き、同二十年より原種の病毒検査を行ひ、爾來多少の變遷を経て、三十八年に至り蠶病豫防法の發布あり、病毒の検査のみに止めず、蠶病一切の豫防驅除を行ふべきこと、なれるを以て、同年蠶病豫防事務所を鳥取市に、支所を東伯郡倉吉町、西伯郡米子町及日野郡黒坂村に置き、其事務を執行せり。四十四年十二月蠶病豫防事務所を廢し、同四十五年一月蠶業取締所を同一場所に設置し、蠶病豫防及其他蠶絲業に關する取締事務を繼續執行しつ、あり。既往三ヶ年間に於ける、蠶病豫防費及蠶種製造額を掲ぐれば、左の如し。

年次	蠶病豫防費	原蠶種製造額	種繭製用高
明治四十二年	二萬一千六十八圓五十錢	四百六十四萬七百四十二蛾	二萬四千七百七十五枚
同 四十三年	二萬三千八百六十一圓六十三錢	六百四十八萬二千六百四十五蛾	一萬九千四百六十三枚
同 四十四年	二萬九千九百十五圓二錢	七百七十五萬八百八十一蛾	一萬三千二十五枚

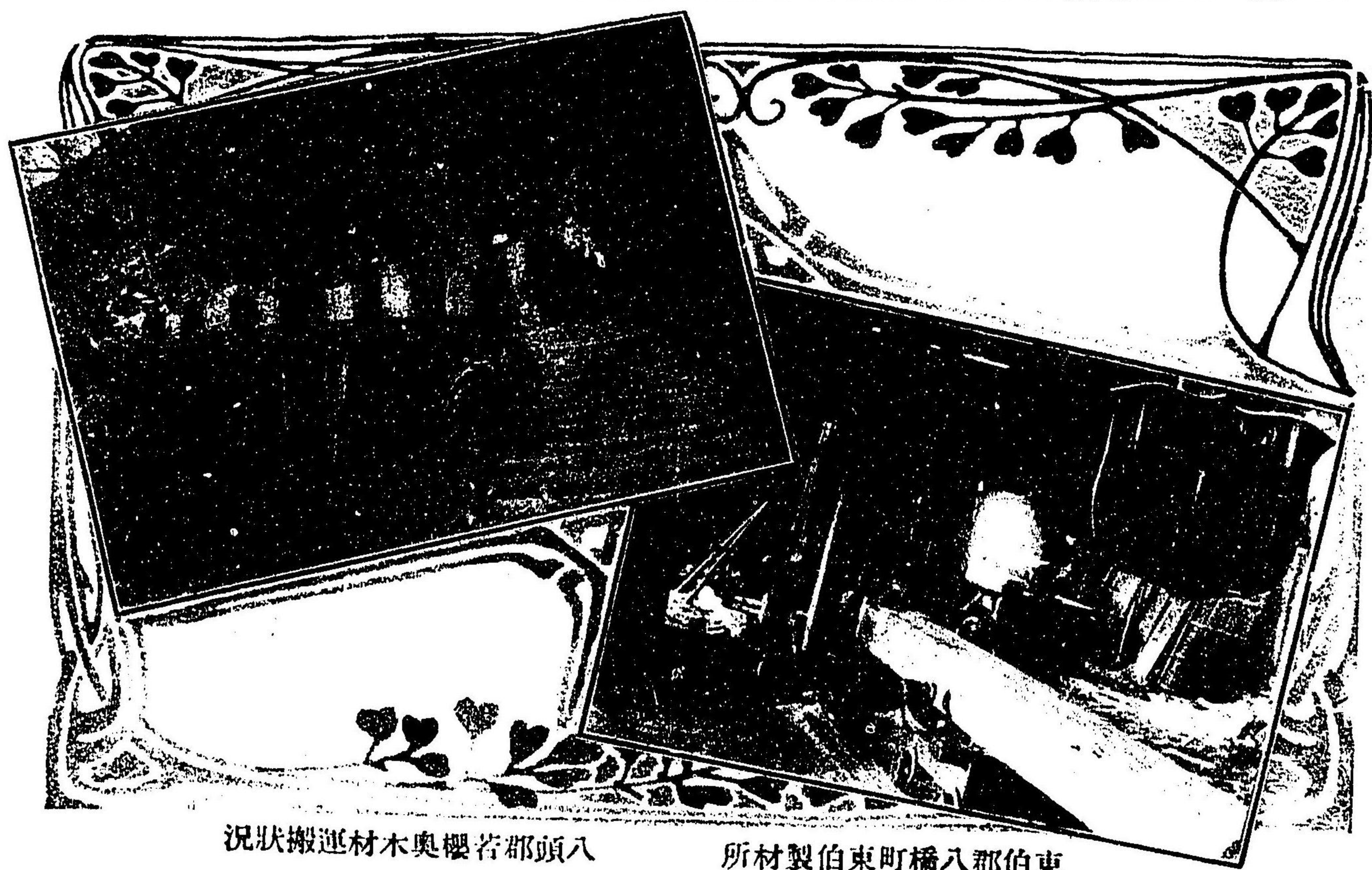
風穴及蠶種雪圍貯藏所 秋蠶の勃興に伴ひ、適當なる夏秋蠶種貯藏所の必要を認め、明治四十一年

蠶絲業





八頭郡智頭奥民有杉林



八頭郡若櫻奥木材運搬狀況

東伯郡八橋町東製材所





の整備と共に、豊富なる原料に依りて製産せらるゝ此林産物は、期年ならずして其搬出額倍蓰するに至らん。

工業原料 各種樹林に豊富なるを以て、隨て工業原料も亦、乏しからず。今其主たるものを掲ぐれば、左の如し。

經木眞田	十三萬反	度量衡器	三萬六千個
木履	二十五萬四千個	下駄	三十五萬八千個
戸	一萬間	障子	一萬六千間
襖	一萬五千間	桶樽類	四萬五千個
曲輪物類	二萬一千間	洋傘柄	二萬四千本
傘類	十七萬三千本	提灯	三萬二千本
杓子	一萬本	漁船類	二百五十艘
車類	八百個	木管	五十六萬二千個

縣有模範林 明治三十七年度より五十一年度に至る十五ヶ年間繼續を以て、日野郡に五百町歩、八頭郡に五百町歩、合計一千町歩の地を相し、杉及扁柏の模範林造成を企策し、二十七年より着手し

四十四年度迄に面積五百七町歩の植栽を了せり。其模範林の所在は左の如し。

日野郡根雨村	面積五百町歩	八頭郡明治村	面積二百二十五町八段一畝十歩
同 郡富澤村	面積百七十四町一段歩	同 郡池田村	面積百町八畝二十歩

重要副産物 椎茸は、縣下各地に産するも、人工を加へて養成するものは、八頭郡池田村、東伯郡山守村、日野郡神奈川村の三個所にして、就中製造最も盛んなるは神奈川村とするも尙他に人工栽培を企圖するもの尠からず。最近一ヶ年の産額は、壹萬六千斤なり。醋酸及「アルコール」は日野郡根雨村に於て製造す。其産額一ヶ年、醋酸石灰拾貳萬磅、メチールアルコール壹萬磅なり。其他副産物としては、左に列記する如し。

籾	三千貫	樹實	千七百石
五倍子	一萬五千斤	香料	二千斤
蔓及莖	二萬束	樹皮料	六千斤
松茸	九千斤	諸菌類	一萬四千貫
自然菜	廿九萬五千貫		

鳥取縣產業案内

雪を嚙て一峯こへぬ夏木立

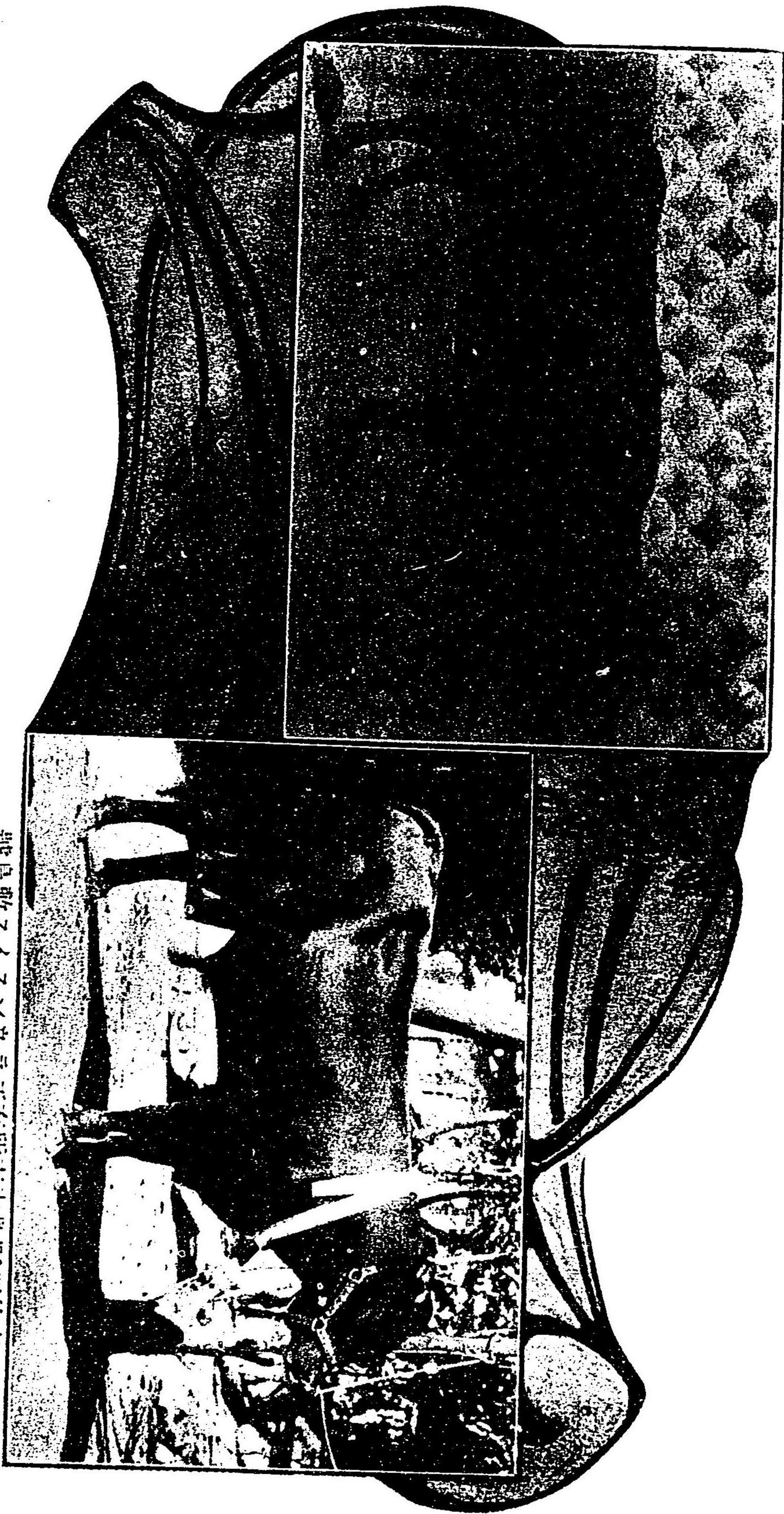
夏の山つぶり剃る音さやかなり

何の木の花とは知らずにはひ哉

曉 臺  
五 明  
芭 蕉

畜産業

牛 古來本縣は、産牛地として、其名高し。然れども藩制當時は、特に保護奨勵を加へたる事蹟なく、當業者も亦、改正の念に乏しく、殆んど自然の發達に放任したりしと雖も、其性質温良、克く勞役に耐へ、平安朝時代、京阪及大津地方に於て、有名なりし車牛の大部分は、殆んど本縣産出の畜牛なりしと云ふ。當時斯の如き良牛を産出したりしと雖も、維新後、需要の變遷に伴ひ、乳、肉、役の各用途に對し、是等の畜牛を以て満足すべきに非らず。明治十三年農商務省より洋種牛一頭の拂下を受けたるを始めとし、同十八年以來縣費を補助して、牛馬品評會を縣下各地に開き、又同年、種牡牛馬取締規則を發布して、種牡牛合格の程度を定め、同二十二年、優良なる種牡牛及蕃殖用牝牛並に仔畜にして、將來種畜用となるべき見込あるものに對し、同三十四年に至るの間、縣費を以て、飼養料を補助し、相當の期間、縣下に於て蕃殖用に供する義務を負はしめ、同三十年、各郡に畜産組合、乃



鳥取縣ノ牛

ち現時の産牛馬組合を組織せしめ、且之に縣費を補助して、斯業に關する保護獎勵上の機關となせり。同三十五年、種牝牛の供給を民有のみに委する時は、其種類雜駁に流れ、體格の良進を期し難きを認め、縣費を補助し、各産牛馬組合に系統正確なる良種牝牛を飼養せしめたるも、組合の經濟多數種牛の購入を許さず。由て同三十六年、縣立種畜場を設立し、内地及海外より、種牛を購入し、専ら民有牝牛に種付を爲し、且飼養管理及酪業の模範を示し、或は畜産思想の發達を圖らん爲め、場員をして、巡回講話及講習を行はしめたり。三十八年、曩に牛馬市場取締規則を發布し、牛馬市場の改善を圖る所ありしと雖も、尙弊害の存するを認めたるを以て、同則の改正及犢駒賣買取締規則を制定し、同時に牛馬賣買營業者取締規則を發布し、諸般の取締に努むる所あり、其成績良好にして、從來に比し牛價大に昇騰せり、而して時恰も日露戰役に際せるを以て、價格は益々騰貴し、且三十九年以來、中國聯合畜産共進會並に本縣畜産共進會等の開催と、彼是原因を爲して、畜牛改良の動機となり、雜種牛熱は、頓に旺盛を極め、價格も亦、一層の昇騰を來し、就中「ブラウンス井ツス」種の如きは、一段の聲價を博せり。四十年、縣は、産牛改良に關する方針を左の如く定めぬ。

縣下を大別し、縣の南方即ち山間部地方は、役用たる體形を損せしめずして、肉用を兼ねたる畜牛を。北方即ち平坦部は、乳用牛の産出を主となさしむる事とし、其目的を達するには、山間部には

鳥取縣產業案内

「ブラウンス井ツス」種を採用し、平坦部には「エアシャー」種を供用し、是等の純粹若は、進化雜種を蕃殖せんとす。

從來日野郡地方を除くの外、縣下各郡の畜牛は、周歲舍飼にして、隨て體質軟弱、習性癆惡に流れ易く、且生産費に多額の費用を要するが故に、是等缺點を矯正せん爲め、縣は明治四十年、牧場補助規則を設け、段別の大小に應じ、補助金を交付し、以て牧場開設の奨励に努めたる結果、目下三十三箇所、總面積五千五百七十六町歩の牧場を見るに至れり。又四十一年、縣は、種牛購入費一萬餘圓を支出し、民間に於ても亦、購入希望者續出せるを以て、特に人を歐洲に派遣し、「ブラウンス井ツス」種二十二頭「ホルスタイン」種六頭、「エアシャー」種七頭を各原産地より購入し、爾來益々其改良蕃殖を圖りつゝあり。

最近三ヶ年の牛頭数は、左の如し。

内國種	牝	九千七百七十五頭
計	牝	五千七百七十二頭
計	牝	一萬五千四百八十七頭

四十一年		雜種	牝	二萬二千四百四十六頭
		種	牝	一萬四千六十頭
		計	牝	三萬六千五百六頭
		外國種	牝	百六十五頭
		計	牝	百六頭
		計	牝	二百八十一頭
四十二年		雜種	牝	九千十三頭
		種	牝	五千四百四十九頭
		計	牝	一萬四千四百六十二頭
		外國種	牝	二萬四千六十三頭
		種	牝	一萬四千二百九十九頭
		計	牝	三萬八千三百六十二頭
		外國種	牝	百四十六頭
		計	牝	百二十二頭
		計	牝	二百六十八頭

畜産業

鳥取縣產業案内

牝	八千七百七十六頭
牝	五千五百五頭
計	一萬三千二百八十一頭
牝	二萬四千六百三十二頭
牝	一萬四千五百五十二頭
計	三萬九千八百八十四頭
牝	百四十頭
牝	百四十頭
計	二百八十頭

四十二年	五萬二千二百七十四頭
四十二年	五萬三千九十二頭
四十二年	五萬二千七百四十五頭
總計	

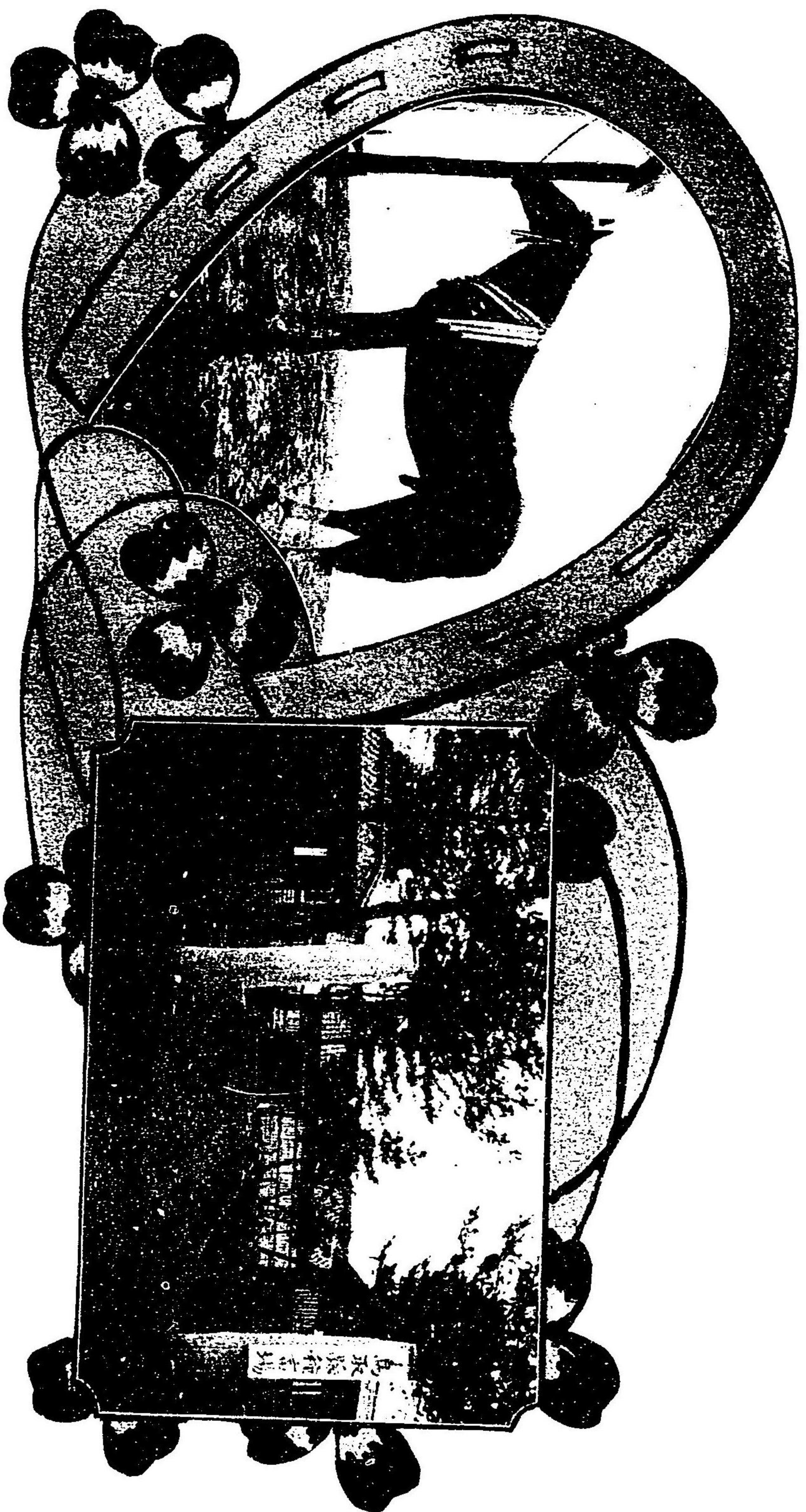
最近三ヶ年の牛、産出頭数は、左の如し。

牝	七百四十一頭
牝	六百十五頭
計	千三百五十六頭
牝	六千三百五十六頭
牝	五千九百三十七頭
計	一萬二千二百九十三頭
牝	四十頭
牝	五十五頭
計	九十五頭
牝	五百十二頭
牝	五百十六頭
計	千二十八頭
牝	六千七百七十八頭
牝	五千七百七十九頭
計	一萬千九百五十七頭

畜産業

鳥取縣產業案內

外國種	牝	四十九頭
	計	三十三頭
內國種	牝	八十二頭
	計	三百六十四頭
外國種	牝	三百四十七頭
	計	七百一十一頭
內國種	牝	六千七百七頭
	計	五千四百二十七頭
外國種	牝	一萬五千三百三十四頭
	計	三十五頭
外國種	牝	二十一頭
	計	五十六頭
外國種	牝	四十一頭
	計	一萬三千七百四十四頭
外國種	牝	四十二頭
	計	一萬三千六十七頭
外國種	牝	四十三頭
	計	一萬二千三百一頭
總計		



號又サガノ種洋有所部次作田仲郡白西

場畜種縣取鳥

馬 藩制の當時既に保護奨励を如へたるもの、如く、藩士の乗用馬は、縣下産出のものより選出し、享保年間に於ては、伯耆地方の農家に藩用馬匹を下附し、其産出せるもの、内より良駒を選び、再び藩用に買上げ、嘉永年間に至りては、牧場の種馬用として、産物役所へ種牡馬を下付し、又奥州産及薩州産馬を種馬用として下付したることありしと云ふ。

維新後馬政の廢弛と乗馬需用の減少とにより、頓に産馬の數を減し、加ふるに農家經濟上畜牛の飼養管理は馬匹より容易なるを以て、之に更ふるもの漸く増加せり。明治十八年種牡牛馬取締規則を發布し、同十九年農商務省より雜種牡馬を借受け、民有牝馬に無料種付をなし、翌二十年第四師團より軍馬十二頭、同二十一年同九師團を購入し、又二十三年青野軍馬育成所より「アルゼリ」種牡馬二頭を借入れ種付に供せしめたるに、其成績概して良好なりしも、一部不成績のものありしより、二十四年に至り洋種及雜種を不可とし、専ら内國種を以て縣情に適するものと爲し、先に下付の種牡馬を公賣し、二十五年に至り内國種馬二頭を購入して、篤志者に貸與するの狀況となり、改良上一頓挫を來せりと雖も、二十七八年日清事件以來、馬匹の需用頓に増加し、且つ同役に於て雜種馬の成績佳良なりしと、價額の騰貴とは、爰に産馬の改良蕃殖を行ふの動機となり、復た雜種蕃殖の不可を唱ふるものなきに至れり。



鳥取縣產業案内

以上の外、牛馬品評會の開設、畜産組合の組織、優等馬匹の補助等保護獎勵を加へたるの経過は、産牛の事業に對する方法と異なるなし。三十八年、農商務省より濠洲産牝馬二十一頭の貸下、及陸軍省より鹵獲牝馬八頭の交付あり。加ふるに同三十九年乃木陸軍大將は、曩にステツセル將軍寄贈の名馬アラブ種壽號（牡馬駉）一頭を、東伯郡赤碕町佐伯種畜場へ寄贈せられ。尙四十年五月、東宮殿下山陰道へ行啓あらせられたる際、紀念として、箕田陸軍中尉より、濠洲産牝馬一頭を、本縣に寄贈ありたるより、交々斯業の改良發達を促進し、良駒の産出、逐年増加し、茲に斯業改良上、一生面を開くに至れり。

最近三ヶ年の馬頭數は、左の如し。

四十二年	雜種	牝	千七百四頭
		計	千七百四頭
四十二年	內國種	牝	二百四十六頭
		計	千九百五十頭
四十一年	雜種	牝	八百六十五頭
		計	千九百一十一頭
四十一年	內國種	牝	二百九十六頭
		計	千五百五十六頭

畜産業

四十二年	雜種	牝	千六百六十一頭
		計	千九百四十四頭
四十二年	內國種	牝	二百五十三頭
		計	千九百四十四頭
四十二年	外國種	牝	千十七頭
		計	千三百四十七頭
四十一年	雜種	牝	四百頭
		計	千三百四十四頭
四十一年	內國種	牝	十九頭
		計	五百九十九頭
四十一年	外國種	牝	千四百九十二頭
		計	千八百十九頭
四十一年	內國種	牝	三百十九頭
		計	千八百十九頭

鳥取縣產業案内

四十二年		四十一年		四十二年		四十一年		四十二年		四十一年	
外國種	雜種	外國種	雜種	外國種	雜種	外國種	雜種	外國種	雜種	外國種	雜種
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
十七頭	九頭	八頭	九頭	六十五頭	三十八頭	六十一頭	二十一頭	四十頭	三百八十一頭	三百四十一頭	千四十頭

最近三ヶ年の馬、産出頭数は、左の如し。

總計	四十一年	四十二年	四十三年
	三千五百五十五頭	三千三百十七頭	三千二百五十二頭

畜産業

四十二年		四十一年	
外國種	雜種	外國種	雜種
計	計	計	計
十七頭	九頭	八頭	九頭

四十二年		四十一年	
外國種	雜種	外國種	雜種
計	計	計	計
八頭	九頭	六十五頭	三十八頭

四十二年		四十一年	
外國種	雜種	外國種	雜種
計	計	計	計
九頭	三百三十頭	六頭	四百四十七頭

四十二年		四十一年	
外國種	雜種	外國種	雜種
計	計	計	計
九頭	三百二十八頭	九頭	二百三十六頭

四十二年		四十一年	
外國種	雜種	外國種	雜種
計	計	計	計
八頭	三百三十頭	六頭	四百四十七頭

内國種		外國種	
牝	計	牝	計
四十六頭	七十六頭	五頭	六頭
四十二年 雜種		四十二年 雜種	
牝	計	牝	計
二百二十六頭	三百八十二頭	百五十六頭	三百八十二頭
四十一年		四十一年	
五百二十七頭	五百二十七頭	五百二十七頭	五百二十七頭
總計		總計	
四十二年	四百十六頭	四十二年	四百十六頭
四十二年	四百十六頭	四十二年	四百十六頭

鶏 明治二十四年頃より「レグホン」、「ブラマ」、「コーチン」等種類流行し、二十七八年に至りては、飼養者の數、大に増加の傾向ありしも、一時の流行に止まれり。爾來復た振はず。次で三十七八

年頃は、鶏は農圃を荒すの理由を以て、各戸の飼育數を制限し、甚しきは全く飼養禁止の申合をなしたる地方ありき。然れども縣下の産卵數は縣下の需用すら充すに足らず、海外輸入卵を用ゆるもの、逐年増加の狀況なるを以て、三十九年より卵肉兼用の飼養を奨励しつゝ、あるも兎角、新種の流行を逐ふの傾向あるは、甚だ遺憾なりとす。

明治四十三年の飼育戸數其他左の如し。

飼育戸數	二萬四千二百七十七戸	成禽數	八萬五千五百六十四羽
雛數	五萬五千五百五十二羽	價格	五萬二千三百四十八圓

産卵數 七百八萬三千三百七十七個

價格 十一萬五千二百八十二圓

山羊 山羊を飼養して、搾乳販賣を爲すもの、鳥取市及米子町に各一ヶ所あり。從來「ザーネン」種の雜種のみなりしも、去る四十一年、瑞西國より、「トツケンブルク」種を輸入して、蕃殖を行ひ、漸次盛大に向ひつゝあり。殊に近來自家用の乳汁を得ん爲め、山羊を飼養する者、續出するの狀況なり。

豚 養豚業は、明治二十七八年頃流行し一時は縣下東西伯地方に於て、三千餘頭に達したりしも、





(鳥取縣種畜場) 牧場

成牛	九百十頭	計	千六百七十二頭
頭數	七百六十二頭	成牛	十八萬四千五十八斤
計	千六百七十二頭	計	八萬二千三百二十三斤
成牛	九百十頭	成牛	四萬九千八百七十八圓
計	千六百七十二頭	計	二十六萬二千七百八十一斤
成牛	九百十頭	成牛	四萬九千八百七十八圓
計	千六百七十二頭	計	七萬四千六百六十三圓

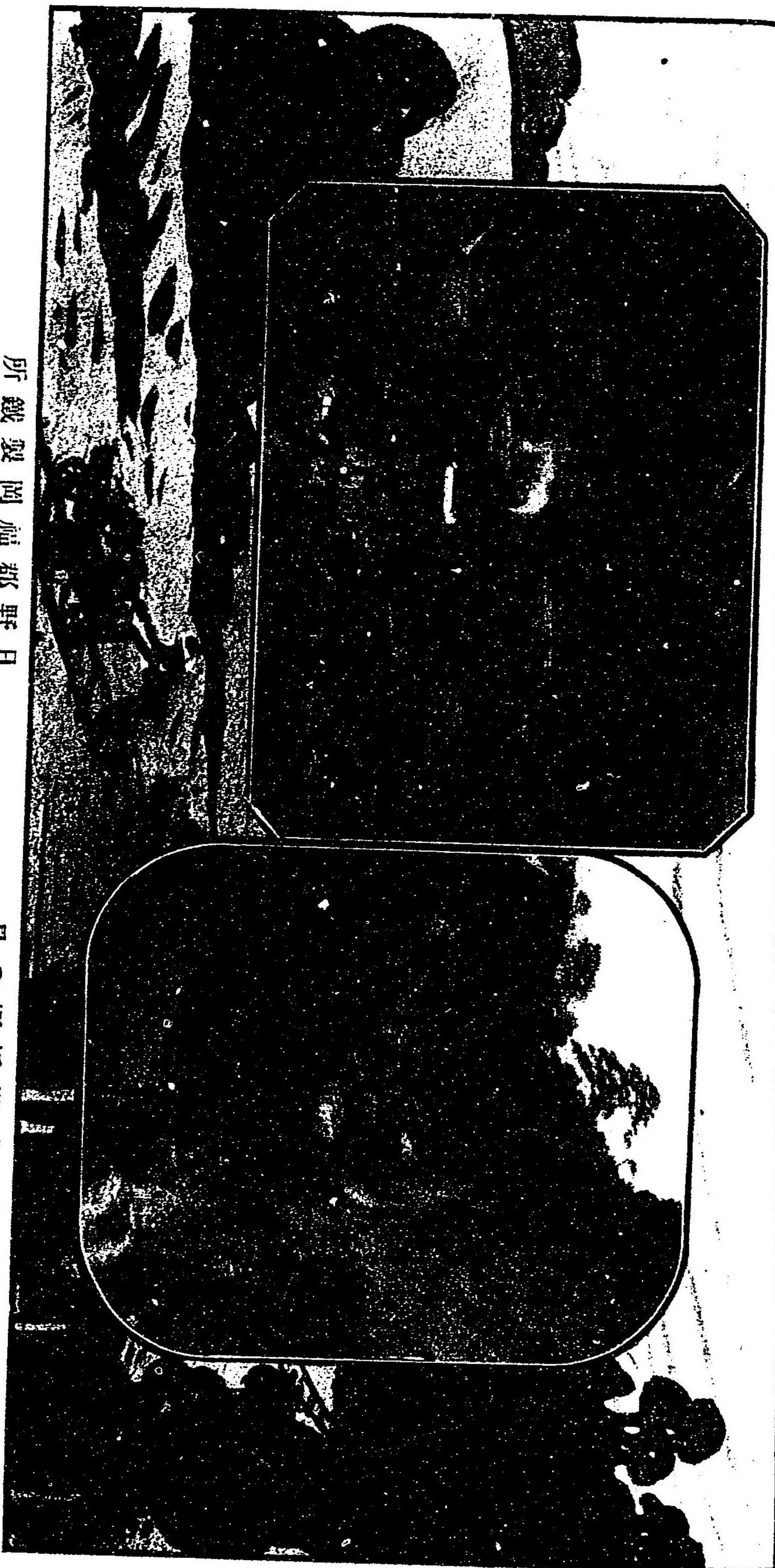
種畜場 本場は、鳥取縣東伯郡社村大字大谷村に在り、山陰鐵道倉吉停車場より倉吉町を経て西方約二里、縣立農學校に接し、車馬の交通便なり。本場に於ける業務の綱要は、左掲の如し。

一、種畜 縣下畜産改良方針に定めたる「ブラウンス井ツス」種「エアァシャー」種及「ホルスタイン」種の純粹蕃殖を行ひ、生産したる牡犢は育成して種畜となし、之を各産牛馬組合に貸與し、種付せしめ牝犢は、育成後優良なるものは、場内に繋留して蕃殖用に供し。又場内繋留種

- 牝牛は、餘勢に限り民有牝牛に種付すと雖、本場は、候補種牛の蕃殖を以て主なる目的とす。
- 二、試験 家畜改良に伴ふべき管理飼養の方法並に牧草及飼料品の栽培試験、又は飼料の經濟芻草の貯藏試験等を行ひ、模範方法を示さんことを期せり。
  - 三、酪業 飼牛家の副業として、地方の事情に適應すべき搾乳及製乳事業の普及を圖らんが爲め、牛酪製造其他乳製品製造の試験を行ひ、以て蕃殖の傍ら殘乳利用の方法を指示す。
  - 四、講習 低度にして、實地應用し易き畜産智識の普及を目的として、本場内に酪業其他必要事業に限り、短期の講習を爲し、又は各地方實業團體の主催に係る畜産講習會講話會に講師を派遣して、指導の任に當れり。
  - 五、實地指導 講話講習の際は勿論希望者あるときは、畜牛鑑定、飼養管理の方法、並に牧草及飼料品の鑑定、栽培、芻草の貯藏法、牛酪製造用器械並に製造法、搾乳法、削蹄法等に付き、場員實地指導の任に當れり。

一袋蕎麥も添ひけり駒迎かへ  
鶏の並ぶ敷居や五月雨

一 茶  
十 素



所鐵製岡 龍郡野日

泉の堀採鐵砂郡野日

## 鑛産業

鐵 本縣に於ける製鐵業の起源は、詳ならずと雖も、古より有名なりし印賀鋼を精煉したる者は、文化年中、日野郡印賀村青砥孫左衛門なる人なりと云ふ。維新後、時勢の進歩に伴ひ、洋鐵の輸入盛んとなり、和鐵は、爲めに壓倒せられんとするに至れり。日野郡根雨村鑛業家近藤喜八郎之を憂ひ、巨額の資本を投じ、明治二十年、同郡二部村大字福岡村に蒸汽機關を据付け、之が改良を圖り、年々約一千噸の鐵を製出し、尙同郡内十數ヶ所に、「トロンプ」式工場を設け、盛んに鋼、銑及鉚を製出し、陸海軍需用品として納入せり。然るに近年洋鐵の輸入益々増加し、和鐵の需用倍々減退し、復往日の盛況を見ざるに至れり。

明治四十三年の鐵類産額は、左の如し。

鐵	八萬八千四十五貫
銑	三十一萬二千八百五十三貫
鉚	三萬九千九百六十四貫
格魯謨鐵	百一十一萬五千貫

鑛産業





業改良の端緒を開きたり。爾後、或は傳習所を設けて、生徒を養成し、或は製紙改良機械模範所を開設し、或は輸出向製紙法教師を招聘して、實地教授を爲さしむる等、改良發展を圖りたる結果、毎年産額、約二十五六圓に達するに至れり。然れども従來の製紙業たる、多くは、農業者の副業として、營めるものなるを以て、其製品區々にして統一せず、且販賣の方法備はらざる爲め、奸商輩の左右する所となり、濫賣の結果、收支相償はざる傾向を生じたるを以て、明治四十年、因幡紙同業組合を設置せしめ、是等の缺陷を救済する方法を講ぜしめ、且、教師を聘して、折紙傳習所を設けしめ、益々製品の改善を圖り來れり。明治四十四年に於ては、更に縣費を以て、製紙模範工場を設置し、之れを當業者の組織に係る會社に貸與し、産額の増加と品質の改良を計るの設備中なり。最近三ヶ年間の産額は、左の如し。

	鳥取市	三千二十五萬圓		鳥取市	七百六十八圓
	岩美郡	四百十九圓		岩美郡	六百四十八圓
	八頭郡	八萬三千三百九十一圓		八頭郡	八萬三千百五十八圓
	氣高郡	十一萬六千四百四十九圓		氣高郡	十三萬四千四百六十五圓
四十一年	東伯郡	四千四百五十一圓	四十二年	東伯郡	五千七百三十二圓

工業

鳥取縣産業案内

西伯郡	六十七圓	西伯郡	二十七圓
日野郡	千四百二十四圓	日野郡	二千七百三十八圓
計	二十萬八千九百二十六圓	計	二十二萬四千五百三十六圓
鳥取市	千四百四十三圓	鳥取市	千七百四十五圓
岩美郡	千九百八十八圓	岩美郡	千十八圓
八頭郡	九萬九千八百八十七圓	八頭郡	八萬八千八百十二圓
氣高郡	十四萬千七百七十六圓	氣高郡	十二萬九千五百九十六圓
東伯郡	九千五百四十圓	東伯郡	六千五百七十四圓
西伯郡	六十二圓	西伯郡	五十二圓
日野郡	千八百三十五圓	日野郡	千九百九十九圓
計	二十五萬五千九百三十一圓	總計	廿二萬九千七百九十七圓

四十二年  
三ヶ年平均

種類別産額を掲ぐれば、左の如し。  
美濃紙 九萬九千九百一十一圓 (氣高郡を主とし八頭郡之れに亞ぐ)  
半紙 八萬八千三十三圓 (同上)

其他 七萬五千九百八十七圓 (半切紙、杉原紙、塵紙等にして八頭郡を主とし氣高郡、鳥取市之に亞ぐ)  
紙製品 傘、提燈、扇子、團扇、元結、紙函等にして、産額は、年に由り多少の増加ありと雖も、原料たる製紙業の發達に伴ひ、漸次盛況を呈せり。明治四十三年の産額は、左の如し。

鳥取市	千四百九十五圓	鳥取市	五千四百圓
西伯郡	二百四圓	西伯郡	百九十九圓
計	千六百九十九圓	計	五千五百九十九圓
鳥取市	二千九百十圓	鳥取市	六百五十一圓
西伯郡	八百七十圓	岩美郡	三百七十九圓
計	三千七百八十圓	八頭郡	百六十一圓
鳥取市	三萬四千八百七十五圓	氣高郡	二百七十圓
岩美郡	千三百五十二圓	東伯郡	千二十八圓
八頭郡	八百五十圓		
氣高郡	四百七十六圓		
東伯郡	二千八百四十六圓		

紙函  
扇子及團扇  
傘  
提燈

鳥取縣產業案内

1011

西伯郡 二萬三千八十四圓  
 日野郡 四百九十五圓  
 計 六萬三千九百七十八圓

西伯郡 千七百九十三圓  
 日野郡 百三十二圓  
 計 四千四百十四圓

紙函 千六百九十九圓

元結 五千五百九十九圓

扇子及 三千七百八十圓

傘 六萬三千九百七十八圓

提燈 四千四百十四圓

總計 七萬九千四百七十圓

絹織物 延喜式に依れば、因伯二州よりは、白絹緋帛及其他の帛類を調きたるを見れば、昔は本縣に於ても、絹布を製織せること明なり。池田氏因伯二州の太守に封ぜられしより、尙武の氣象を鼓舞する爲め、痛く奢侈を戒め、遂に一般に絹布の着用を嚴禁せしを以て、藩制當時は、因伯兩州、復た全く絹布の製織を絶つに至りぬ。廢藩置縣の後、明治十七年頃より、社會の風潮、漸く華美に移るに従ひ、絹綿交織物の流行を來し、縣下に於ても其製織に従事するものあり、又士族授産場に於ても、

絹織物を製造する等、多少見るべきもの有るに至りたり。明治二十六年、東伯郡及氣高郡に羽二重工場を起すものあり、縣も亦た其費金を補助する所ありたるを以て、輸出羽二重の産出、漸次發達せり、唯、憾らくは、従業者の資本、豊富ならざるを以て、未だ十分の發展を爲すに至らず。絹織物の最近三ヶ年の産額を掲ぐれば、左の如し。

鳥取市	二百圓
四十年	
氣高郡	二萬三千七百八十一圓
東伯郡	一萬五千二百二十圓
西伯郡	四百九十圓
計	三萬九千五百九十一圓
四十二年	
鳥取市	四百七十三圓
岩美郡	六百四十二圓
氣高郡	一萬七千四百四十圓
東伯郡	七千六百一十一圓
西伯郡	五百五十五圓
計	二萬六千七百六十二圓

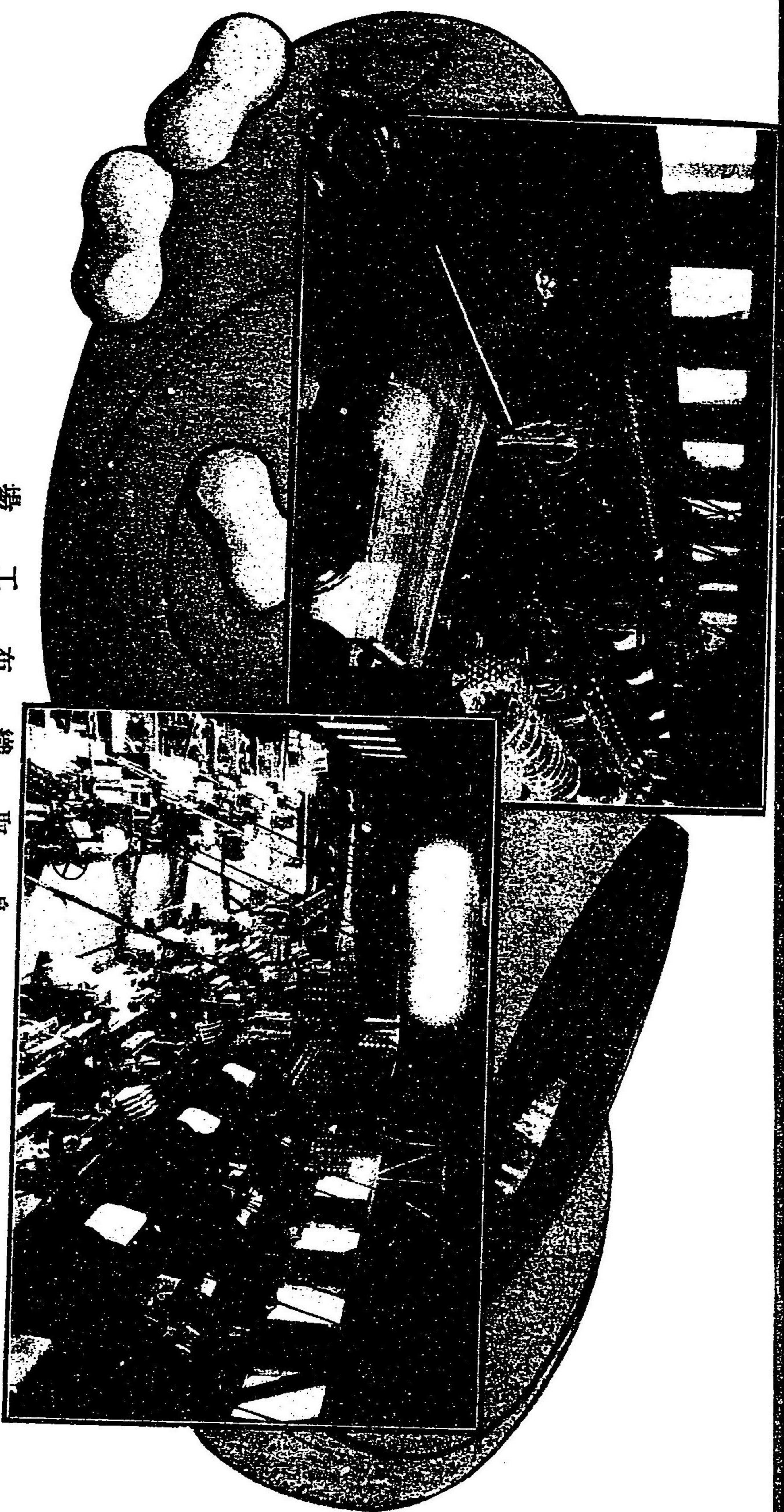
工業

1011

鳥取市	五百六十七圓
岩美郡	四百八十七圓
氣高郡	一萬八千四百八十六圓
東伯郡	五千二十八圓
西伯郡	六百八十八圓
計	二萬五千二百五十六圓

備考 産額中主なるものは、羽二重にして、他は雜絹織物なり。

●●●●●  
**木槿織** 木槿の外皮を剥ぎ、内皮を晒製せるものは、昔時、地方に於ては、木槿蓑の原料となり、京阪地方に輸出されては、雛人形の衣服の原料となりしを以て、八頭郡佐治谷地方に於ては、木槿を栽培せしもの多かりしも其價格少く、未だ地方物産と認むるに足らざりし。明治三十一年、鳥取を船橋春綱なるもの、此原料を以て、襖地を織製することを案出し、木槿機織場を設け試織して、京阪地方に出し、好評を博し、遂に同年中に千四百反餘を製出するに至れり。爾後、需要年と共に多きを加へ、明治三十二年には、橋本平次郎なるもの亦、此業を營み、春綱は事業を油谷喜八郎に譲り、現今は、平次郎、喜八郎兩人に於て、繼續従業せり、最近三ヶ年の産額は、左の如し。



鳥取縣工業

明治四十一年 二千四百五圓

同 四十二年 三千七百五十圓

同 四十三年 三千九百二十一圓

白木綿 起原は、詳かならずと雖も、元祿年間に於ては、多少他國へ販出したるもの、如し、享和年間に至り、販路を京阪地方に擴めしより漸次需要を増加し、文化年間より安政、文久年代に至る迄は、販路大に擴張し、年々四五十萬反の販出を爲し、青谷木綿、伯州木綿の名聲は、各地市場に喧傳せられぬ。明治二十年頃より金巾の輸入及紡績の勃興は、地方棉花をして、殆んど全滅の悲境に陥らしめ、従つて青谷木綿、伯州木綿も亦、一時、殆んど製織家を絶つに至れり。近年に至り再び白木綿の製織を爲すもの増加し、殊に鳥取、倉吉、吉岡、米子の四箇所には、力織工場の興るありて、漸次産額は増加しつゝあり。販路は、主に縣下の需要を充すに止まり、縣外に販出するものなし。其産額は、左の如し。

明治四十一年 一萬五千六百五十五圓

同 四十二年 二萬九千八十圓

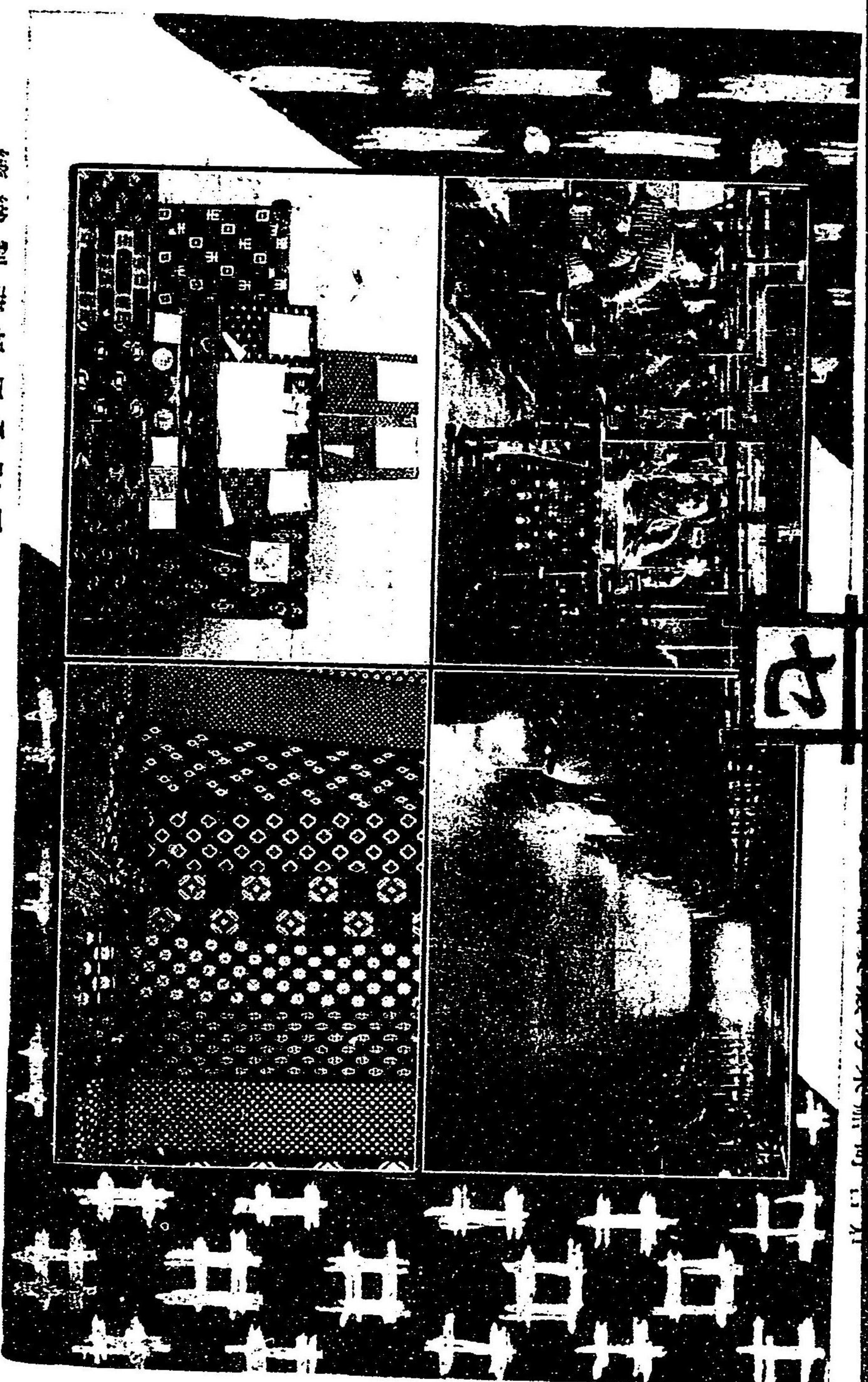
同 四十三年 四萬二千二百三十六圓

續木綿 西伯郡車尾村に於ては、古來機織の業、盛んに行はれ、今より八九十年前、摺染織の製造を始めたり。當時は、他に織物の産出無かりしを以て、摺染の如きも、大に地方に歓迎せられ、從

工業

つて縣下各地に於て、斯業を營むもの増加し、殊に東伯郡倉吉町稻島大助なるもの、始めて花鳥山水の模様を織出すことを發明し、後永井權平なるもの之れに意匠を加へて改良する所あり、模様彌々嶄新を極め、世の嗜好に適し、倉吉織の聲價を博するに至れり。之れより先き西伯郡夜見半島一帯、濱の目と稱する部落は、車尾村接近の村落より、順次織の製法を傳へ、其産額も亦次第に増加し、濱の目織なる稱呼を以て、他國へも販出するに至りぬ。此他鳥取市、岩美郡及氣高郡も亦、多少之れを産出す。最近三ヶ年の産額は、左の如し。

鳥取市	六千七百六十二圓
氣高郡	百六十八圓
四十一年	東伯郡 三萬四千七百一圓
西伯郡	二萬九千三百九十九圓
計	七萬千三十圓
鳥取市	八千二百八十四圓
東伯郡	二萬九千六百五十三圓
西伯郡	二萬七千四百八十九圓
計	六萬五千四百二十六圓
四十二年	



織機製 藏 松田桑町 同

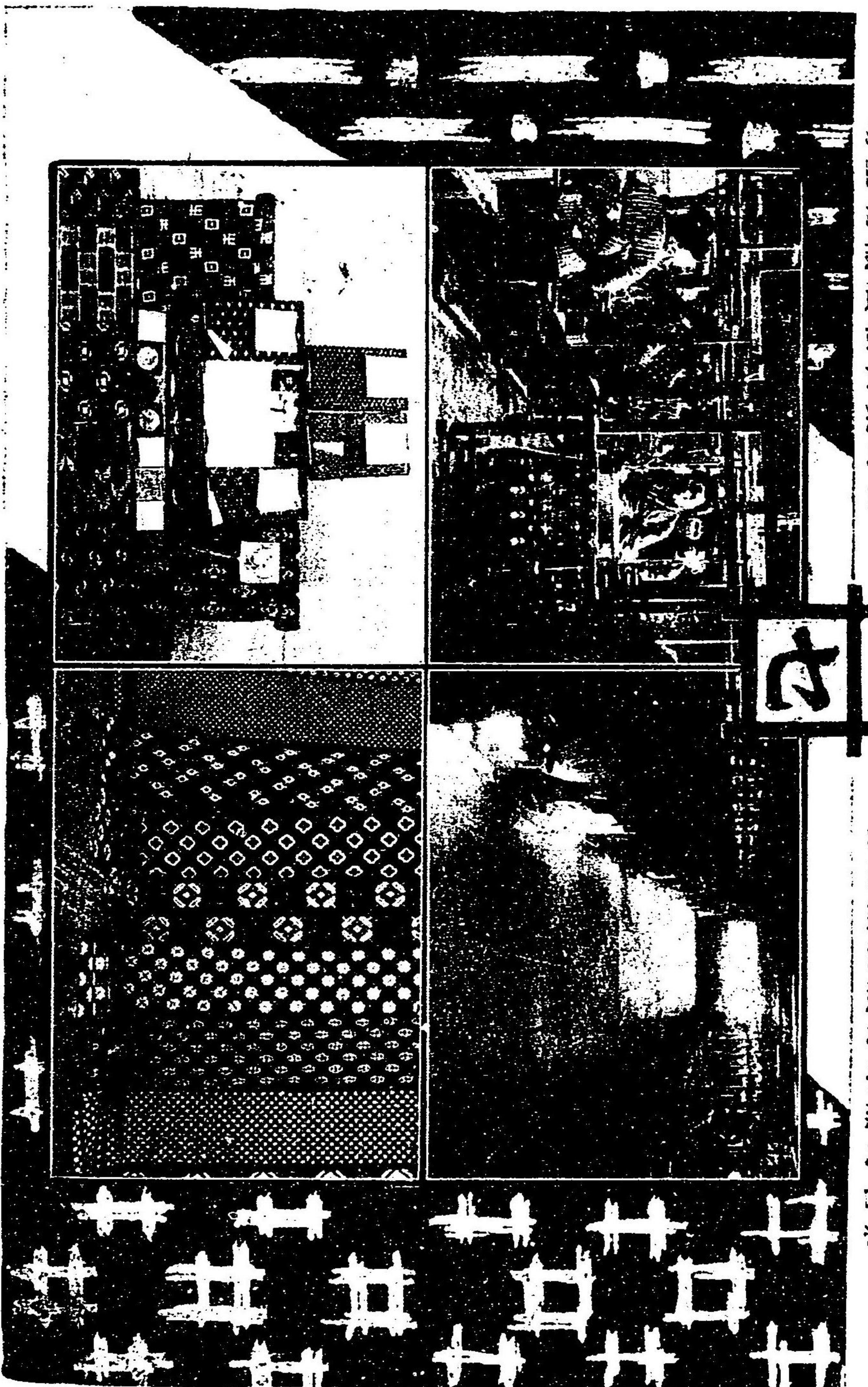
織機製 藏 秀木船町 吉倉

鳥取縣產業案内

106

つて縣下各地に於て、斯業を営むもの増加し、殊に東伯郡倉吉町稻島大助なるもの、始めて花鳥山水の模様を織出すことを發明し、後永井權平なるもの之れに意匠を加へて改良する所あり、模様彌々嶄新を極め、世の嗜好に適し、倉吉織の聲價を博するに至れり。之れより先き西伯郡夜見半島一帶、濱の目と稱する部落は、車尾村接近の村落より、順次織の製法を傳へ、其産額も亦次第に増加し、濱の目織なる稱呼を以て、他國へも販出するに至りぬ。此他鳥取市、岩美郡及氣高郡も亦、多少之れを産出す。最近三ヶ年の産額は、左の如し。

鳥取市	六千七百六十二圓
氣高郡	百六十八圓
四十一年	
東伯郡	三萬四千七百一圓
西伯郡	二萬九千三百九十九圓
計	七萬千三十圓
鳥取市	八千二百八十四圓
東伯郡	二萬九千六百五十三圓
西伯郡	二萬七千四百八十九圓
計	六萬五千四百二十六圓
四十二年	



織織製藏松田桑町同

織織製藏秀木船町吉倉



烏取市 八千六百四十五圓  
 岩美郡 千五十圓  
 四十二年 東伯郡 二萬七千三百六十八圓  
 西伯郡 二萬七千十八圓  
 計 六萬四千八十一圓

綿木綿及織色木綿 日野郡を除き、縣下各郡とも多少産出するも主として烏取市及其附近に於て産出するもの多しとす。販路は、縣下及但馬地方にして、最近三ヶ年の産額は、左の如し。

綿木綿

烏取市 一萬三千五百五十圓 岩美郡 三百七十四圓 氣高郡 五百六十九圓 八頭郡 千八百六十圓 東伯郡 百九十八圓 西伯郡 二百十二圓 計 一萬六千七百六十三圓	四十二年 烏取市 一萬四千百七十圓 岩美郡 六百六十五圓 氣高郡 二十三圓 八頭郡 二千二百三十九圓 東伯郡 二百十八圓 西伯郡 七百四十圓 計 一萬八千五十五圓
---------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------

工業

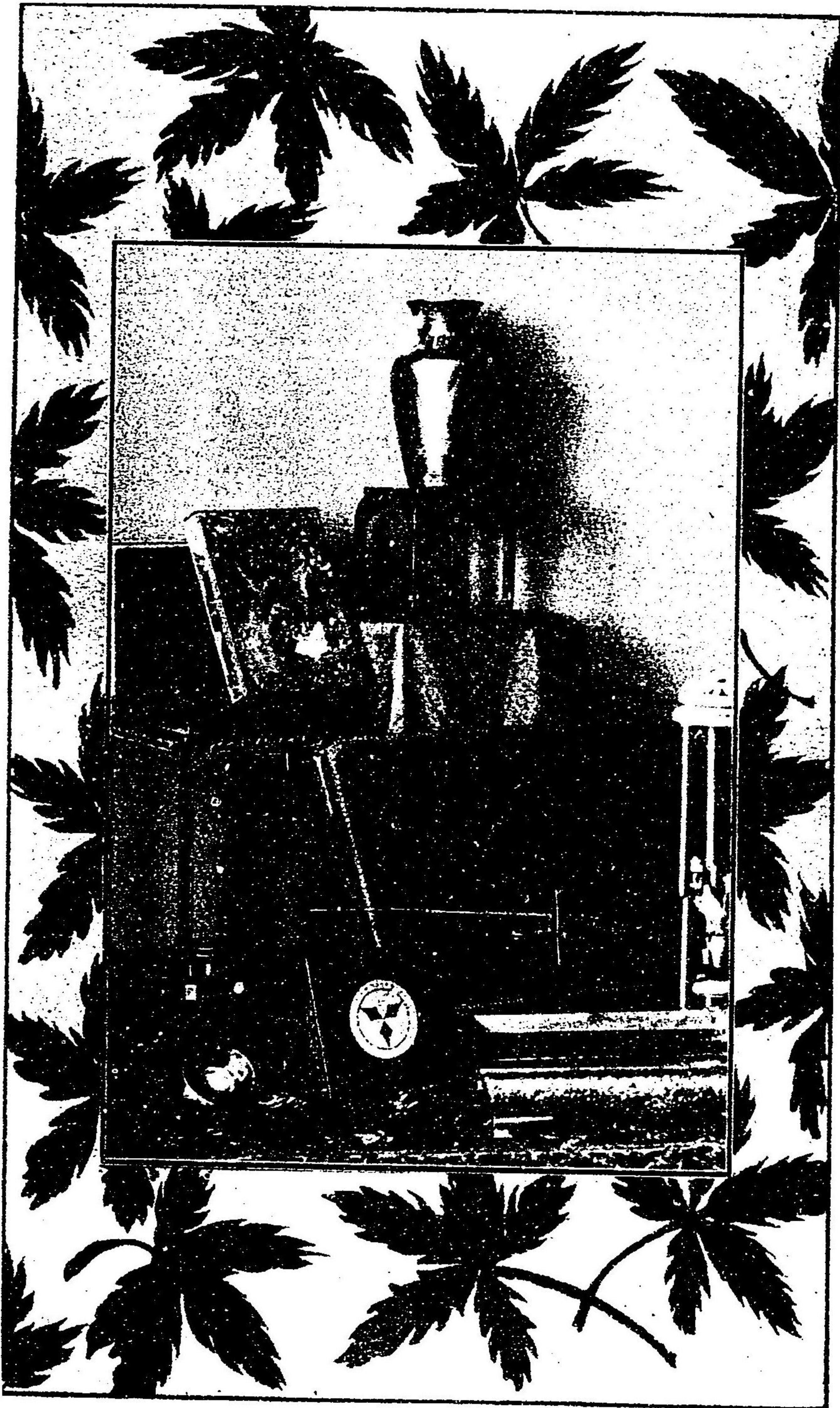
鳥取縣產業案內

四十二年  
 鳥取市 一萬五千七百九十三圓  
 岩美郡 千三十圓  
 氣高郡 八十二圓  
 八頭郡 二千十七圓  
 東伯郡 六百七十圓  
 西伯郡 六百十七圓  
 計 二萬四千七十九圓

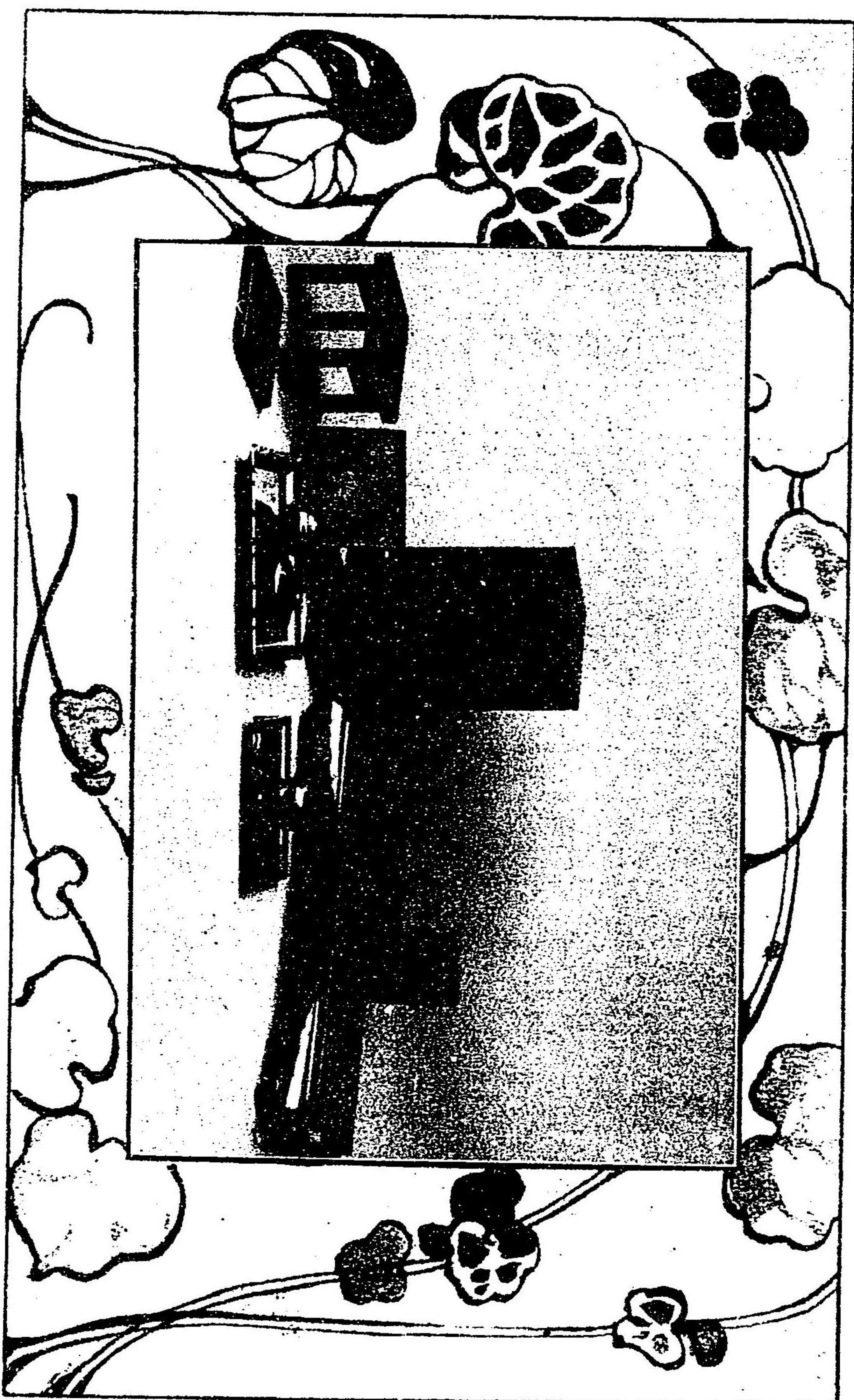
織色木綿

四十二年  
 鳥取市 一萬六千二百六十九圓  
 岩美郡 九百九十四圓  
 氣高郡 九百七十九圓  
 八頭郡 千四百九十六圓  
 西伯郡 二千二百三十三圓  
 計 二萬九千九百七十八圓

四十一年  
 鳥取市 一萬千八百三十九圓  
 岩美郡 六百四十三圓  
 氣高郡 百七十八圓  
 八頭郡 七百二十圓  
 西伯郡 千五十圓  
 計 一萬四千四百三十圓



漆器



器

漆

花瓶<sup>三寸</sup>及猿坐硯箱

右製作者

鳥取市

小泉徳藏

蒔繪紋付盃<sup>三寸</sup>

同

同市西町

奥村竹藏

高卓及廣盆

同

同市本町二丁目

山本豊藏

大形花臺及砂鉢

同

同市新町

中本兼松

漆器製造者	鳥取市本町三丁目	豊	藏
花 漆	同 市西町	村	竹 藏
漆箱製造者	同 市掛出町	村	幾 松
漆付重箱	同 市新町	本	兼 松
合 漆 製造者	同 市元魚町	本	節 次 郎

鳥取市 一萬六千六百七十一圓  
 岩美郡 六百圓  
 四十二年 八頭郡 千六百五圓  
 西伯郡 千八百九圓  
 計 一萬六千八百八十五圓

漆器 漆器の起れる年代は、未だ詳かならずと雖も、因幡國に在りては、今を距ること三百六十年前、乃ち天文年中、蒔繪師加藤七衛門なるもの本業を開始し。後元文元年、美作國大庭郡郷原村某なるもの、氣高郡日置村大字山根村に來りて、本業を營み、紀州黒江及能州輪島より職工を備ひて技術の改良を計る所あり。嘉永年中、藩主池田氏、國産役所なるものを設け、漆器業に對しても播州より職工數名を召致し、改良發展を圖る所ありたり。然れども其産額甚だ少なく、販路の如きも、僅かに縣内の需要を充すに過ぎず。是れ其製品たる精美堅良なるも、値不廉、且意匠舊守に流れ、時代の嗜好に適應せざるを以てなり。是に於て明治四十四年、鳥取市に於ける同業者は、組合を組織し、第一着の事業として、縣及鳥取市より補助を受け、漆工傳習所を開設し、良師を聘し、縣下各郡市より傳習生を募り、髹漆、蒔繪の兩科の傳習を爲さしむる等、着々改良發達を圖る所あり。又氣高郡立工業

工 業

徒弟學校に於ては、漆工科を設け、數年前より漆工の養成を爲しつゝあり。  
 伯耆國に在りては、應安年間、近江國日野町の木地師數名、日野郡下蚊屋村字本谷に移住し、木地の製造に従事し。今を去る二百六七十年前、漆塗業を創め、後百五十年を経て錫粉を使用し、銀模様を描出し、又は盃、大平の類に浮き模様を繰出する等、技術の改良を圖りたるより大に需要を増し、下蚊屋漆器の名は、雲伯隱石の各州に知らるゝに至れり。  
 明治四十三年中の縣下漆器の産額は、左の如し。

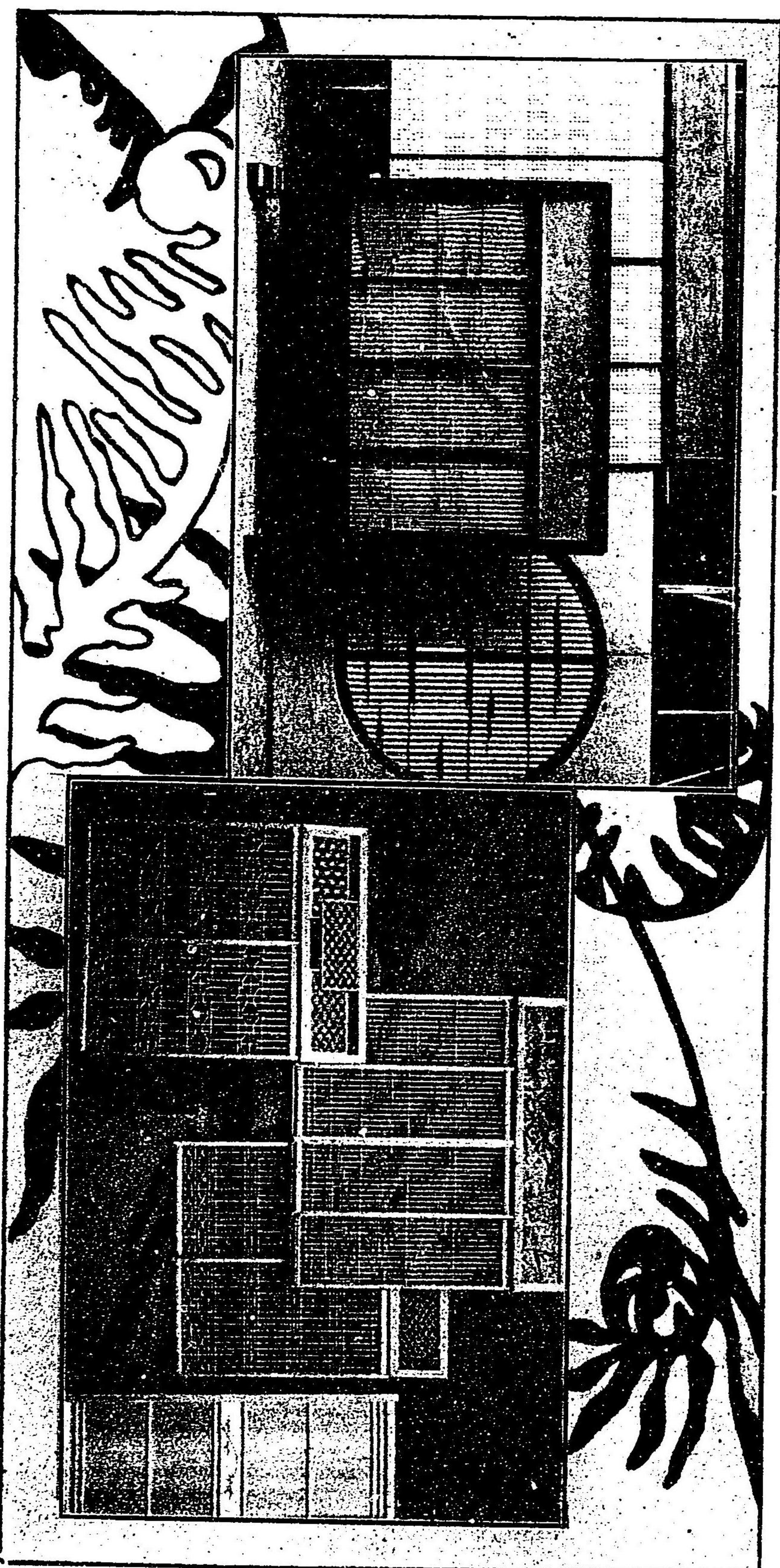
裝飾品	
鳥取市	八百二十圓
東伯郡	五十二圓
西伯郡	三千七百五十圓
計	四千六百二十二圓
家具	
鳥取市	千七百圓
氣高郡	百圓
東伯郡	百十五圓
西伯郡	四千六百三十圓

飲食器	
日野郡	二十五圓
計	六千五百七十圓
鳥取市	二千三百八十圓
氣高郡	四千四百圓
東伯郡	六百八十圓
西伯郡	二千五百六十圓
日野郡	千圓
計	一萬千二十圓
其他	
鳥取市	八百圓
氣高郡	五十圓
東伯郡	五百十圓
西伯郡	二千三百十圓
計	三千六百七十圓
工業	

鳥取縣産業案内

鳥取市	五千七百圓
氣高郡	四千五百五十圓
東伯郡	千三百五十七圓
西伯郡	一萬三千二百五十圓
日野郡	千二十五圓
合計	二萬五千八百八十二圓

●陶器 八頭郡國中村大字久能寺村は、古より陶業者の居住せし所にして、此地方を「土師の郷」と稱す。今を去る百七八十年前、京都より陶業者來り、御室燒の陶法を傳ふ、技術爲めに大に進む。後近江國信樂より職工來り、信樂燒の法を教ゆ、陶法更に面目を改む。所謂「因久燒」是なり。時の藩主、此業を保護獎勵する所あり、爲めに一時盛況を呈したりと雖も、廢藩置縣後、漸次衰頽に傾き、現今は二三戶其業を紹介し過ぎず、然れども其製品たる、形狀釉藥共に雅味饒く、抹茶器、煎茶器等、殊に雅客の嗜好に適すと云ふ。又同郡五總村大字牛戸村に「牛戸燒」なるものあり。主として日用の飲食器を燒く。此陶業は、嘉永年間、石見國の陶業者某、此地に移住して創業せしものにして、子孫今に父祖の業を紹介し。此他西伯、東伯、岩美、氣高、鳥取の各郡市に於て、小規模ながら陶業を營



窯

窯

鳥取市丹後片原町  
秋山正次郎

鳥取市新町  
門脇勝藏

同市藏人町  
平澤保太郎

吉野園子及美月  
石製作所

新立及根  
石製作所

吉野園子  
同

むもの少からず。

明治四十三年中の製産額は、左の如し。

鳥取市 六十圓

八頭郡 四千二百九十五圓

東伯郡 三百六十圓

西伯郡 千三百二十圓

計 六千三十五圓

海柳及海松細工。海柳細工は、一名白珊瑚細工と稱し、海松細工と共に鳥取市の特産品たり。其原料は、因幡附近の北海より採取す。製品の主なるものは、箸、洋杖、寫眞掛、楊子、婦人頭髪裝飾品、パイプ等にして、一般の嗜好に適す。従來博覽會、共進會等に出品し、褒賞を受けしこと枚擧に遑あらず。最近三ヶ年の製産額は、左の如し。

明治四十一年 六千四百十二圓

同 四十二年 九千九百圓

同 四十三年 七千六百十七圓

建具及指物類。鳥取市に於ては、藩制時代より本業を營むものありしと雖も、専ら地方の需要を充すに止まり、從て其製品も亦、堅牢を旨とし、雅致又は優美を缺き、其價格の如きも比較的低廉なら

す。是に於て明治四十二年、同業組合を組織せしめ、其事業として同年及四十三年、木工傳習所を開設し、教師を東京より聘し、技術を傳習せしむ、其成績大に見るべきものありしを以て、販路次第に擴まり、需要日に多きを加へつゝあり。西伯郡に於ても亦、四十四年、木工傳習所を開き、職工を養成する所あり。本縣の如きは、到る所、木竹の原料に豊富なるを以て、本業は、將來大に有望の事業に屬せり。

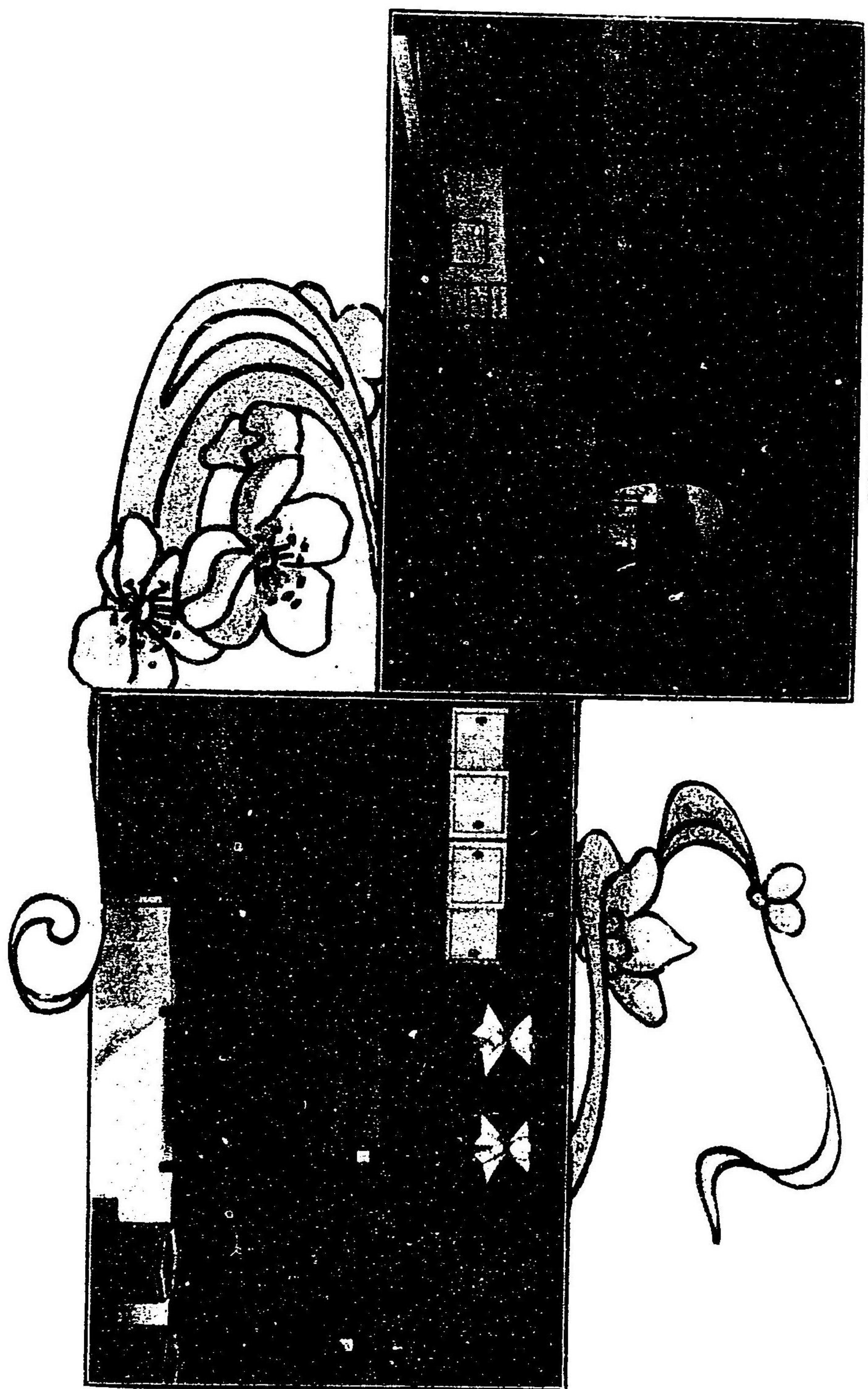
明治四十三年の産額は、左の如し。

建物類 六萬九千七百五十二圓

指物類 三萬八千六百八十八圓

彫刻 藩制の時、鳥取市に佛具師二三名ありて、佛具彫刻の外、僅かに普通器物の彫刻を爲せり。爾來世の變遷と共に、佛具の彫刻は、次第に廢れて、室内裝飾用の彫刻品需要多く、今日は供給常に需要を充す能はざるの状況なり。販路は、縣内及兵庫、島根、岡山の諸縣にして、最近一ケ年間の産額二千五百圓餘なり。本品は、従業者未だ少なく、従つて産額も亦、多からずと雖も、内地需要の外、美術的製品に在りては、海外輸出の望みあるを以て、當業者は、意匠及技術の改善と産額の増加に努めつゝあり。

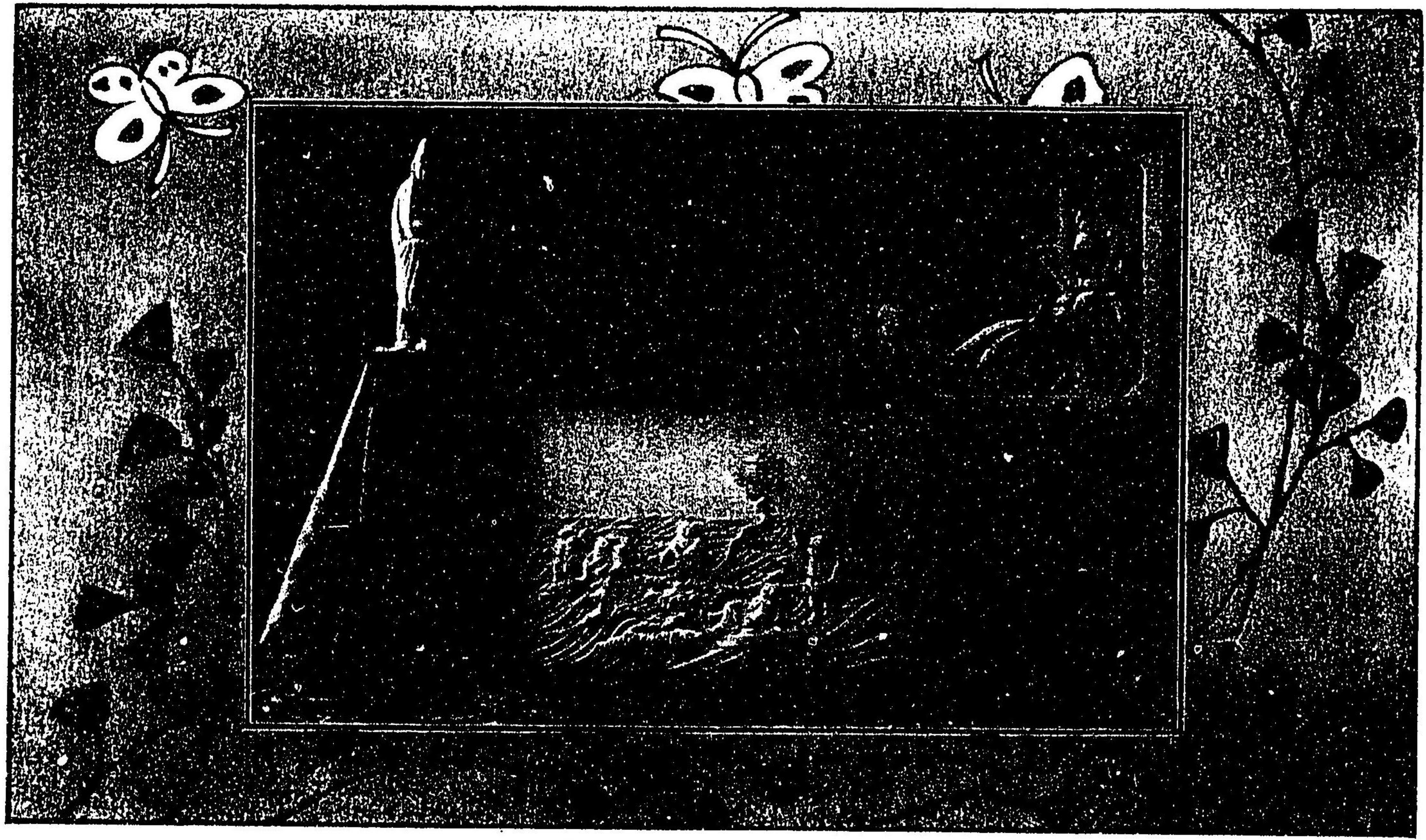
傘、提燈及團扇 本品は、鳥取市其主産地たり。起源は、詳かならずと雖も、藩制の際、藩士の内



鳥取市森下清五郎製作

鳥取市指物製造店南家山守取島

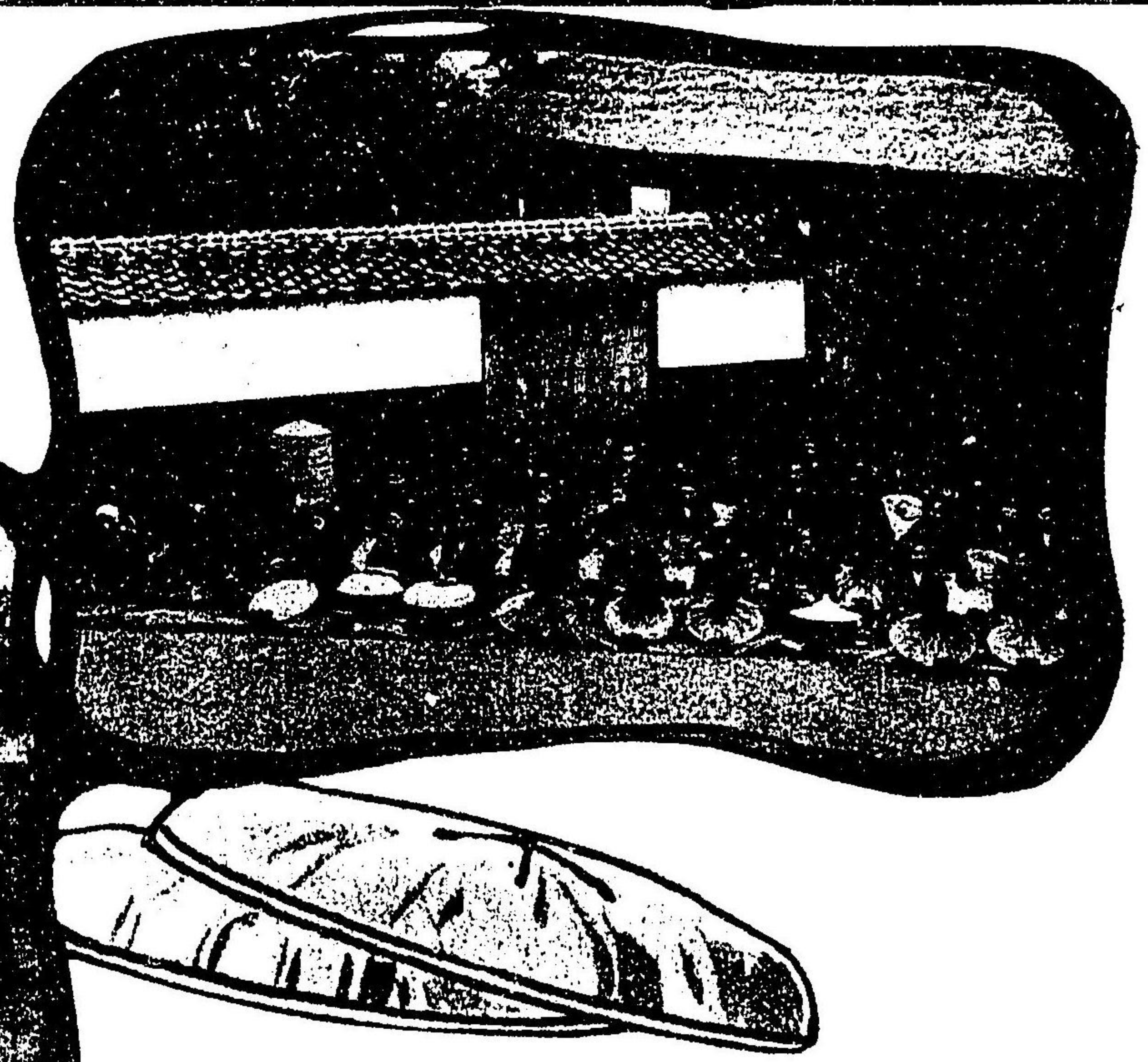




刻 影

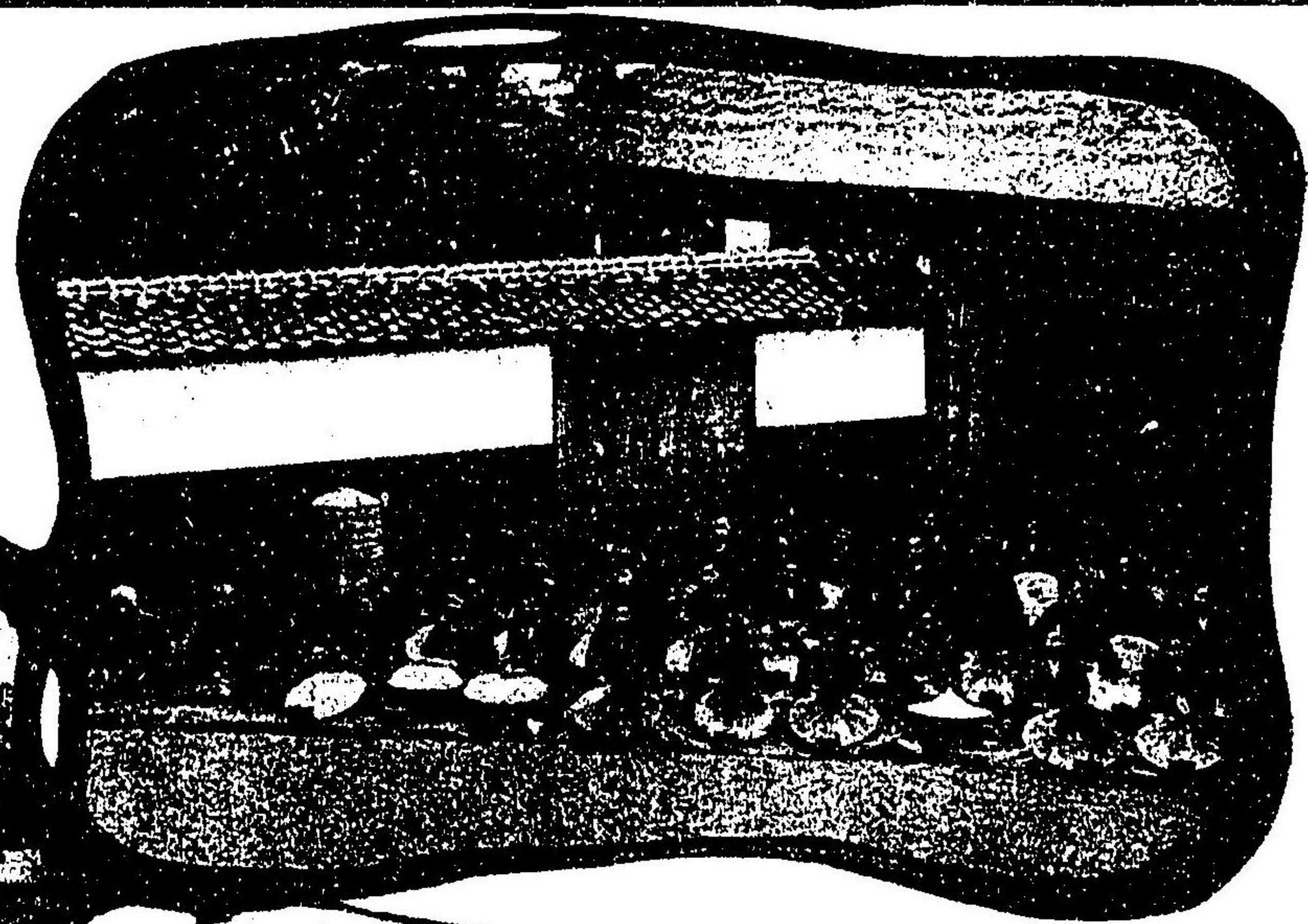
郷里川を  
舟下り  
遊覧  
舟  
遊覧の舟、遊覧の舟、遊覧の舟

(景の荷出) 社会資合笠製後田郡伯東



(景の業作) 社会同

(景の荷出) 社會資合笠製後田郡伯東



(景の業作) 社會同

職たりしもの今日に傳はりたるものなりと云ふ。殊に傘は、「鳥取傘」と稱し、堅牢を以て其名を知らる。然れども偏へに實用を主とせる結果、輕便優美の點に於て缺くる所あり、且價格較や不廉なるを以て、縣外に輸出するもの甚だ少なし。團扇も亦、藩制時代より製造せるものなり。明治十三年頃より上村某其他二三者、竹骨を讃州丸龜より仰ぎ、單に紙張りの手工を爲しつゝあり。需要は、甚だ多く、明治十六年頃に比すれば、今日は、二十倍に増加し、尙益々多きを加ふと云ふ。

菅笠 東伯郡長瀬村大字田後村、日野郡江尾村、氣高郡鹿野町等、多く優良品を製造す。起源は詳ならずと雖も、數百年前にあり。維新後、麥稈帽子流行の影響を被むり、需要次第に減じ、一時衰頽に傾きしと雖も、農業者の勞働用としては、麥稈帽子に比し遙かに適當なるを以て、再び需要を恢復し、田後村の如きは、田後製笠合資會社なるものを組織し、製品を兵庫、大阪及京都地方へ輸出するの盛況となれり。

最近三ヶ年の産額は、左の如し。

四十一年 九千七百七十七圓

四十二年 八千六百十二圓

四十三年 七千八百七十六圓

疊表及莫座 本業は、慶安年中、八頭郡大御門村大字殿村某、備後國より疊表製造の業を傳習し、

工 業